

高知県幡多郡十和村

川口新階遺跡
轟遺跡
中亀越遺跡
小田・カミヒラ遺跡
今成遺跡
上広瀬遺跡
広瀬遺跡

—十和村中部地区中山間地域総合整備事業等に伴う発掘調査報告書—

2004.3

高知県十和村教育委員会

高知県幡多郡十和村

川口新階遺跡
轟遺跡
中亀越遺跡
小田・カミヒラ遺跡
今成遺跡
上広瀬遺跡
広瀬遺跡

—十和村中部地区中山間地域総合整備事業等に伴う発掘調査報告書—

2004.3

高知県十和村教育委員会

卷頭写真1



川口新階遺跡



広瀬遺跡

卷頭寫真2



川口新階遺跡出土石器



小ノ田・カミヒラ遺跡出土石器

卷頭寫真3



広瀬遺跡出土石器



広瀬遺跡出土石器

卷頭寫真4



上広瀬遺跡・広瀬遺跡出土石器



轟遺跡出土石器

卷頭寫真5



今成遺跡出土石器



屋敷地區表採石器

卷頭寫真6



地吉本村地区表採石器



中広瀬地区表採石器

序

十和村は、日本最後の清流四万十川の中流に位置し、林野率91%の自然豊かな山村です。四万十川は村中央部を東西に蛇行し、流れに沿って国道381号が走り、川の蛇行をつききってJR予土線が走っています。面積164.66km²、8つの支流が四万十川に注ぎ、19集落53の小集落が散在するなか、約3600人の村民が暮らしています。

標高73mから600mの間のわずかな平地に住居と耕作地が分布するなか、昭和58年から基盤整備を進めておりますが、まだまだ未整備地区が多く残り整備は急務となっています。

今回の試掘確認調査は平成13年度～15年度の3ヶ年にわたる国庫補助事業により、平成16年度から実施されるは場整備計画地区で包蔵が予想される地区を含めて、遺跡の範囲等の確認調査を行ったところです。出土した主な遺物としては、縄文時代の土器、石器等であり、縄文人の生活の様子がうかがい知れるとともに、縄文時代が身近に感じられる品々が数多く出ております。

この報告書が村民の方々の埋蔵文化財への一層のご理解と、文化財に親しむきっかけになればと願い、今後における教育、研究の一助になることを期待するものです。

今回の発掘調査にあたっては、高知県教育委員会、高知県文化財団埋蔵文化財センター、直接調査に携わっていただいた畠中宏一氏をはじめ、多くの作業員の皆様、ご協力をいただいた地権者の皆様、報告書作成につきましては関係各位に多大なご指導とご教示をいただきました。ここに記して心から感謝とお礼を申し上げごあいさつとします。

平成16年3月

高知県幡多郡十和村教育委員会
教育長 伊藤 吉二

例　　言

1. 本書は高知県幡多郡十和村教育委員会が国庫補助を受け、平成13～15年度に発掘調査・整理作業を行った十和村内遺跡の試掘確認調査に関する報告書である。調査対象地は川口新階遺跡・轟遺跡・中龜越遺跡・小ノ田・カミヒラ遺跡・今成遺跡・上広瀬遺跡・広瀬遺跡を含む13箇所で調査面積は、916m²である。平成8年度に国庫補助を受けて実施した試掘確認調査の概要についても報告する。
2. 発掘調査は十和村教育委員会林久須男(H13・14)・酒井寿哉(H15)が担当し、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター前田光雄・高知県教育委員会文化財課畠中宏一が補佐した。
3. 本書の編集は十和村教育委員会が行い、編集実務及び執筆は「調査に至る経緯」を酒井寿哉が担当し、その他の部分を畠中宏一が担当した。
4. 発掘作業及び整理作業・遺物写真撮影では下記の方々の協力を得た。記して感謝します。
発掘調査　伊賀富一郎・泉谷和子・伊藤利光・上田和男・上田竹美・岡田保美・岡宗ハナ子・岡宗吉伸・岡本花子・芝洋子・芝勤・下原敏秀・杉脇竹雄・宗海カズミ・武石幸夫・竹内利子・竹内米子・谷才次郎・谷文男・中平大世・中平二三子・林伊佐雄・林久美子・林作恵・林智也・宮地寿晴・矢野男幸・矢野賴一・吉野秀美・藤川淑
整理作業　井澤久未・大谷亜紀子・門田美知子・黒岩佳子・小林貴美・佐藤雅子・高橋加奈・高橋由香・竹村延子・土居初子・西内広美・西村譲二・松山真澄・山中美代子・山本裕美子・吉本由佳
遺物写真撮影　坂本憲彦・西村譲二
5. 発掘調査及び執筆では下記の方々から御指導・御助言・御協力を得た。記して感謝します。
小野由香・遠部慎・木村剛朗・鈴木正博・多田仁・田辺猛・出原恵三・廣田佳久・松田知彦・松村信博・松本亜紀彦・森田尚宏・山崎真治・山本哲也・吉成承三
6. 遺跡の略号は「川口新階遺跡(01-TKS・02-TKS)」「轟遺跡(01-TTR)」「中龜越遺跡(01-TNK)」「小ノ田・カミヒラ遺跡(01-TOK)」「今成遺跡(01-TIN)」「上広瀬遺跡(02-TKH・03-TKH)」「広瀬遺跡(02-THS・03-THS)」として出土遺物の註記等にはこれを使用した。

本文目次

第Ⅰ章 十和村における埋蔵文化財保護行政の概要と調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯と経過	1
1. 十和村における埋蔵文化財保護行政と発掘調査	1
2. 調査に至る経緯	4
3. 調査の経過	5
第2節 十和村の地理的・歴史的環境	6
1. 地理的環境	6
2. 歴史的環境	8
第Ⅱ章 調査の方法と成果	13
第1節 屋敷地区	14
第2節 津賀地区	15
第3節 三島遺跡	16
第4節 磤遺跡	18
第5節 昭和藤次田・スカ谷地区	21
第6節 くぐつけ遺跡	22
第7節 河内遺跡	24
第8節 小野地区	27
第9節 地吉井手ノセキ地区	30
第10節 地吉本村地区	32
第11節 中亀越遺跡	33
第12節 古城下モダバ・ニイヤ地区	36
第13節 戸川千良林堂・シンカイノ上地区	38
第14節 小ノ田・カミヒラ遺跡	39
第15節 川口新階遺跡	45
第16節 今成遺跡	65
第17節 上広瀬遺跡	69
第18節 中広瀬地区	74
第19節 広瀬遺跡	75
第Ⅲ章 まとめ	85
第1節 剥片石器の石材について	85
第2節 石器について	86
第3節 繩文土器について	89
第4節 十和村における遺跡の立地について	92

挿図目次

第1図	十和村発掘調査地点・表採地点図	2
第2図	十和村地形図	7
第3図	十和村遺跡地図	10
第4図	屋敷地区表採地点位置図・出土遺物実測図	14
第5図	津賀地区位置図・調査区平面図	15
第6図	三島遺跡位置図・調査区平面図	17
第7図	森遺跡位置図・調査区平面図・土層柱状図	18
第8図	森遺跡出土遺物実測図	20
第9図	昭和藤次田・スカ谷地区位置図・調査区平面図	21
第10図	くぐつけ遺跡位置図・調査区平面図	23
第11図	河内遺跡位置図	25
第12図	河内遺跡調査区平面図	26
第13図	小野地区位置図・調査区平面図(1)・土層柱状図	28
第14図	小野地区調査区平面図(2)	29
第15図	地吉井手ノセキ地区位置図・調査区平面図	31
第16図	地吉本村地区表採地点位置図・出土遺物実測図	32
第17図	中龟越遺跡位置図・調査区平面図・土層柱状図	34
第18図	中龟越遺跡出土遺物実測図	35
第19図	古城下モダバ・ニイヤ地区位置図・調査区平面図	36
第20図	古城下モダバ・ニイヤ地区土層柱状図	37
第21図	戸川千良林堂・シンカイノ上地区位置図・調査区平面図	38
第22図	小ノ田・カミヒラ遺跡位置図・調査区平面図	40
第23図	小ノ田・カミヒラ遺跡土層柱状図	43
第24図	小ノ田・カミヒラ遺跡出土遺物実測図	44
第25図	川口新階遺跡位置図・調査区平面図	46
第26図	川口新階遺跡I・II区平面図・セクション図	47
第27図	川口新階遺跡I区A1・B1グリッドII層遺物出土状況図	48
第28図	川口新階遺跡I区A1・B1グリッドIII層遺物出土状況図	49
第29図	川口新階遺跡I区A1・B1グリッドIV層遺物出土状況図	50
第30図	川口新階遺跡I区C1・D1グリッドII層遺物出土状況図	51
第31図	川口新階遺跡I区C1・D1グリッドIII層遺物出土状況図	52
第32図	川口新階遺跡I区C1・D1グリッドIV層遺物出土状況図	53
第33図	川口新階遺跡I区A2・B2グリッドII層遺物出土状況図	54
第34図	川口新階遺跡I区A2・B2グリッドIII層遺物出土状況図	55

第35図	川口新階遺跡Ⅰ区A2・B2グリッドIV層遺物出土状況図	56
第36図	川口新階遺跡Ⅰ区C2・D2グリッドII層遺物出土状況図	57
第37図	川口新階遺跡Ⅰ区C2・D2グリッドIII層遺物出土状況図	58
第38図	川口新階遺跡Ⅰ区C2・D2グリッドIV層遺物出土状況図	59
第39図	川口新階遺跡出土遺物実測図	61
第40図	川口新階遺跡Ⅲ区土層柱状図	64
第41図	今成遺跡位置図・調査区平面図	66
第42図	今成遺跡土層柱状図・出土遺物実測図	68
第43図	上広瀬遺跡位置図・調査区平面図	70
第44図	上広瀬遺跡土層柱状図	72
第45図	上広瀬遺跡出土遺物実測図	73
第46図	中広瀬地区表採地点位置図・出土遺物実測図	74
第47図	広瀬遺跡位置図・調査区平面図	76
第48図	広瀬遺跡出土遺物実測図(1)	79
第49図	広瀬遺跡出土遺物実測図(2)	83
第50図	広瀬遺跡土層柱状図	84

表目次

表1	十和村発掘調査一覧	3
表2	十和村埋蔵文化財発見地点一覧	3
表3	十和村遺跡一覧	11
表4	川口新階遺跡Ⅰ・Ⅱ区グリッド・層位別遺物出土状況一覧	47
表5	頁岩系の石材が主に使用される遺跡	85

第Ⅰ章 十和村における埋蔵文化財保護行政の概要と調査経緯

第1節 調査に至る経緯と経過

1. 十和村における埋蔵文化財保護行政と発掘調査

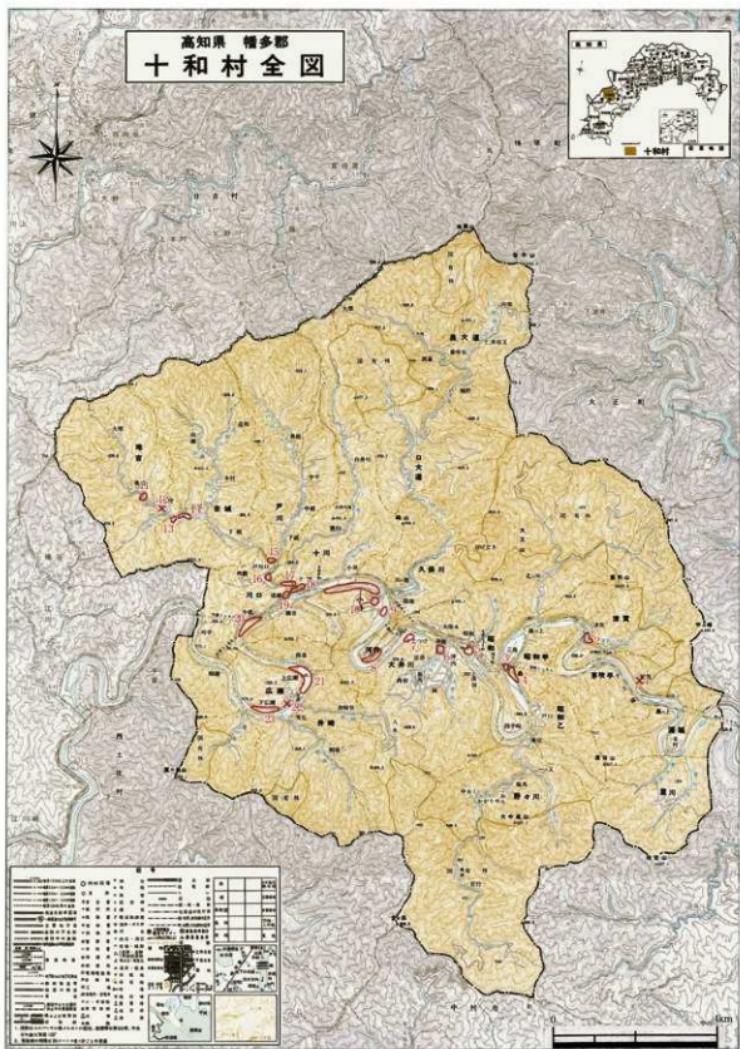
1960(昭和35)年～1962(昭和37)年に全国的に実施された、埋蔵文化財包蔵地の分布調査によって作成された『全国遺跡地図(高知県)』(文化財保護委員会1966)に登載されている村内の遺跡は、広瀬遺跡のみであった。十和村で実施された発掘調査(試掘確認調査を含む)は別表のとおりである。広瀬遺跡は1963(昭和38)年及び1971(昭和46)年に発掘調査が実施されているが、昭和50年代後半になるまでこの2件以外発掘調査は実施されていない。

1973(昭和48)年度には高知県教育委員会によって分布調査が実施され、『全国遺跡地図 高知県』(文化庁1976)が刊行されているが、この時は広瀬遺跡に加えて、1968(昭和43)年に発見された小野遺跡が地図に登載されている。1982(昭和57)年には曾我ノ森遺跡・十川駄場崎遺跡において発掘調査が実施されているが、これまでの4件はいずれも学術調査として調査が実施されている。

1983(昭和58)年度には高知県教育委員会が県内各市町村教育委員会の協力によって、中世城館跡分布調査を実施した。前述した『全国遺跡地図 高知県』(文化庁1976)に登載されている城館数が118箇所に止まり、様々な文献や書籍に掲載されている350余りの件数に比べて非常に少なかったからである。この調査によって発刊された『高知県中世城館跡分布調査報告書』(高知県教育委員会1984)によると、十和村内で確認された城館跡は、黒川城跡・南四手城跡・大井川東城跡・四手城跡・大井川城跡・富賀城跡・宮添城跡・久保川城跡・小野城跡・コノ(龍見)城跡の10箇所であった。

1986(昭和61)年になると高知県遺跡詳細分布調査調査が始まり、十和村でも十和村教育委員会及び高知県教育委員会によって1986(昭和61)～1987(昭和62)年に分布調査が実施された。1986(昭和61)年6月～9月までは資料に基づき踏査地域を選定する第1次調査が、1986(昭和61)年10月～1987(昭和62)年11月までは現地踏査による第2次調査が実施された。從来から周知されていた遺跡に加えて、新たに踏査等によって確認された遺跡が把握され、埋蔵文化財保護行政が推進されることとなる。これ以降開発に伴う緊急調査も実施されるようになった。十川駄場崎遺跡・川口ホリキ遺跡・今成遺跡は当時改良が進められていた国道381号線の改良工事に伴う調査であり、その他個人農地におけるは場整備に伴い広瀬遺跡・個人住宅建設に伴い十川駄場崎遺跡・奈路遺跡・学校施設建設に伴い川口新附遺跡の調査が実施されている。一方、十川駄場崎遺跡についてはその遺跡の重要性から1994(平成6)年まで度々学術調査が実施されている。1994(平成6)年までに実施された調査についてはほとんど報告書が刊行されているので、詳細についてはこれを参照されたい。

1996(平成8)年以降十和村教育委員会主体により実施された調査はすべて開発事業に伴う試掘確認調査であり、ほとんどが国庫補助事業によるものである。刊行物としては本報告書が初めてその成果を報告することとなる。



第1図 十和村発掘調査地点・表探地点図

表1 十和村発掘調査一覧

番号	調査遺跡・地区名	調査期間	調査	原因事業	事業主	調査主体	面積	地図番号
1	広瀬遺跡	S38.1.3～S38.1.6	本掘	学術調査	—	高知県教委	16m ²	23
2	広瀬遺跡	S46.8.23～S46.8.28	本掘	学術調査	—	十和村教委	23.5m ²	23
3	曾我・森遺跡	S57.2.18～S57.2.24	本掘	学術調査	—	十和村教委	107.25m ²	9
4	十川駄場崎遺跡	S57.2.20～S57.2.25	本掘	学術調査	—	十和村教委	18m ²	18
5	十川駄場崎遺跡・川口ホリキ遺跡	S61.7.21～S61.8.28	試掘	国道改良	高知県	十和村教委	260m ²	18-19
6	広瀬遺跡	S62.4.23～S62.4.24	本掘	は場整備	民間	十和村教委	?	23
7	十川駄場崎遺跡・川口ホリキ遺跡	S62.5.18～S62.6.13	本掘	国道改良	高知県	十和村教委	40m ²	18-19
8	十川駄場崎遺跡	S63.5.23～S63.7.2	本掘	個人住宅建設	民間	十和村教委	122.5m ²	18
9	十川駄場崎遺跡	H28.6.～H29.1.4	本掘	学術調査	—	高知県教委	128m ²	18
10	今成遺跡	H3.10.14～H3.10.23	試掘	国道改良	高知県	埋文センター	100m ²	20
11	奈路遺跡	H3.11.21～H3.12.3	本掘	個人住宅建設	民間	十和村教委	400m ²	6
12	川口新階遺跡	H4.4.20～H4.4.24	本掘	学校施設建設	十和村	十和村教委	104m ²	17
13	十川駄場崎遺跡	H5.6.21～H5.11.15	本掘	学術調査	—	十和村教委	132m ²	18
14	十川駄場崎遺跡	H6.6.7～H6.8.5	本掘	学術調査	—	十和村教委	53m ²	18
15	三島遺跡	H8.6.10～H8.6.12	試掘	村道改良	十和村	十和村教委	40m ²	3
16	河内遺跡	H8.10.7～H8.11.15	試掘	は場整備	高知県	十和村教委	490m ²	8
17	くぐつけ遺跡	H8.11.25～H8.12.6	試掘	は場整備	高知県	十和村教委	240m ²	7
18	川口新階遺跡	H13.9.4～H13.9.21	試掘	は場整備	民間	十和村教委	45m ²	17
19	轟遺跡	H13.10.23～H13.10.26	試掘	は場整備	十和村	十和村教委	78m ²	4
20	古城下モダバ・ニイヤ地区	H13.10.30～H13.10.31	試掘	は場整備	十和村	十和村教委	51m ²	14
21	地吉井手ノセキ地区	H13.11.6	試掘	は場整備	十和村	十和村教委	24m ²	11
22	中龟越遺跡	H13.11.6～H13.11.8	試掘	は場整備	十和村	十和村教委	49m ²	13
23	戸川千良林堂・シンカイノ上地区	H13.11.9	試掘	は場整備	十和村	十和村教委	24m ²	15
24	川口新階遺跡	H13.11.12～H13.11.15	試掘	は場整備	十和村	十和村教委	112m ²	17
25	小ノ田・カミヒラ遺跡	H13.11.16～H13.11.21	試掘	は場整備	十和村	十和村教委	112m ²	16
26	今成遺跡	H13.11.26～H13.12.14	試掘	は場整備	十和村	十和村教委	152m ²	20
27	昭和藤次田・スカ谷地区	H13.12.17～H13.12.20	試掘	は場整備	十和村	十和村教委	52m ²	5
28	川口新階遺跡	H14.10.16	試掘	は場整備	十和村	十和村教委	16m ²	17
29	津賀地区	H14.10.17～H14.10.18	試掘	は場整備	十和村	十和村教委	36m ²	2
30	小野地区	H14.10.22～H14.10.29	試掘	は場整備	十和村	十和村教委	162m ²	10
31	上広瀬遺跡	H14.11.12～H14.11.22	試掘	は場整備	十和村	十和村教委	244m ²	21
32	広瀬遺跡	H14.11.25～H14.12.11	試掘	は場整備	十和村	十和村教委	166m ²	23
33	上広瀬遺跡	H15.10.6	試掘	は場整備	十和村	十和村教委	244m ²	21
34	広瀬遺跡	H15.10.7～H15.10.8	試掘	は場整備	十和村	十和村教委	166m ²	23

表2 十和村埋蔵文化財発見地点一覧

番号	調査遺跡・地区名	発見時期	発見遺物	地図番号
35	地吉本村地区	H10.5.22	尖頭器	12
36	屋敷地区		トロトロ石器	1
37	中広瀬地区	H14.3.4	磨製石斧	22

2. 調査に至る経過

十和村は高知県幡多郡の北部に位置する。上流の大正町、下流の西土佐村とともに北幡地域を形成する。著しく蛇行する四万十川の流れに添って集落が散在する。集落は四万十川及びその支流の段丘にも形成され、古くは四万十川の流れを利用したいかだ流しで生計をたて、昭和期には椎茸栽培、養蚕等、山の恵みによる生活を営んできた。昭和30年代頃から灌漑用水の整備が進み、畑作から水耕作への転換もその頃から行われている。しかし、耕作地は段丘に沿って設けられているため小規模な区画が多く、大型の農機の使用が難しい耕地も多く、過疎化高齢化により耕作にも支障をきたしている。

また、近年は転作に伴う路地野菜の栽培が盛んとなっているが、前述のような耕作地であるため農業の基盤整備は急務となっている。十和村では農業従事者の声を受けて1983(昭和58)年より順次、は場整備を実施しているが、2004(平成16)年度からは「十和中部地区中山間地域総合整備事業等」に伴う、は場整備事業が実施されることになった。この計画は、村内の30箇所近くでは場整備を実施するという大規模なものであった。

北幡地域は県内では縄文時代の遺跡が多い地域であり、工事予定地内の周知の埋蔵文化財包蔵地、川口新階遺跡・森遺跡・上広瀬遺跡・広瀬遺跡以外の場所にも埋蔵文化財が所在する可能性が考えられた。しかし、工事予定箇所についてすべて事前の試掘確認調査を実施することは不可能であった。そこで、周知の埋蔵文化財包蔵地については必ず事前の試掘確認調査を実施することとし、その他の場所については、埋蔵文化財が所在する確率が高いと思われる場所について試掘確認調査を実施することとした。十和村教育委員会では高知県教育委員会文化財課(当時は文化財保護室)とともに場整備事業実施予定地については全箇所現地踏査を実施した。その結果、地形等から埋蔵文化財が所在する可能性が強い地域については、埋蔵文化財を保護し開発事業との調整を図るために、遺跡の内容・性格・範囲を把握することを目的として、試掘確認調査を実施する運びとなった。また、この試掘確認調査は村内の埋蔵文化財について把握し、文化財行政に活用するためにも実施するためにも非常に重要な調査となった。

試掘確認調査は2001(平成13)年度～2003(平成15)年度の3ヶ年にわたり国庫補助事業により実施することとした。調査を実施した地域は四万十川沿い、またはその支流、合流点の段丘に面した耕作地である。後述するが、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内で個人による小規模な狭地直しも行われることがわかったため、この事業に伴う試掘確認調査も実施することになった。

3. 調査の経過

十和中部地区中山間総合整備事業等のは場整備に伴う試掘確認調査は2001(平成13)～2003(平成15)年度にかけて実施された。原則として、地権者等との調整が進んでいる地区から調査を実施することにした。地区ごとの調査の実施時期については表に示されているとおりである。

2001(平成13)年度は収穫期の後の同年10月頃から調査を実施する予定であったが、調査を計画していた範囲外であるが、川口新階遺跡(川口字馬ノ石に相当する区域)の中に所在する農地で、個人によるは場整備の計画が届出された。このため、同年9月4日から試掘確認調査が実施された。この調査は同年9月21日に終了した。そして、その後は予定通り10月23日から轟遺跡、古城下モダバニイヤ地区、地吉井手ノセキ地区、中亀越遺跡、戸川千良林堂・シンカイノ上地区、川口新階遺跡(川口字新階・シロコエに相当する区域)、小ノ田・カミヒラ遺跡、今成遺跡、昭和藤次田・スカ谷地区の順に、神祭や調整のための中斷の時期をはさみながらも調査を実施した。調査については、裏作で菜花を栽培している部分等は除いて実施し、調査できなかった区域の状況については周囲の調査結果をもとに把握をすることに努めた。ただし、川口新階遺跡(川口字新階・シロコエに相当する区域)については、菜花を栽培していた区域の周辺には、遺物が出土した部分と出土しなかった部分があるため、調査の未実施区域の状況把握が困難であった。このため、当該区域の調査を翌年度に実施することにした。

2002(平成14)年度も収穫期の後に調査を実施することにした。調査対象区域は、昨年度菜花の作付け中であった川口新階遺跡(川口字新階に相当する区域)に加えて、昨年度は地権者との調整中であった津賀地区、小野地区、上広瀬遺跡、広瀬遺跡であった。調査は順調に進んだが、やはり上広瀬遺跡、広瀬遺跡で、作付け中等のため調査を実施できない部分があったため、当該区域については調査を翌年度に実施することにした。

2003(平成15)年度は年度当初から2001(平成13)年度以降に実施した試掘確認調査の整理作業を開始し、年度末での報告書刊行をめざした。また、昨年度調査ができなかった上広瀬遺跡、広瀬遺跡については、収穫後調査を実施してその結果については年度末に刊行予定の報告書で報告する計画とした。

なお、この調査によって中亀越遺跡・小ノ田カミヒラ遺跡が新たな埋蔵文化財包蔵地として確認され、轟遺跡・今成遺跡・上広瀬遺跡については遺跡範囲の変更が行われた。

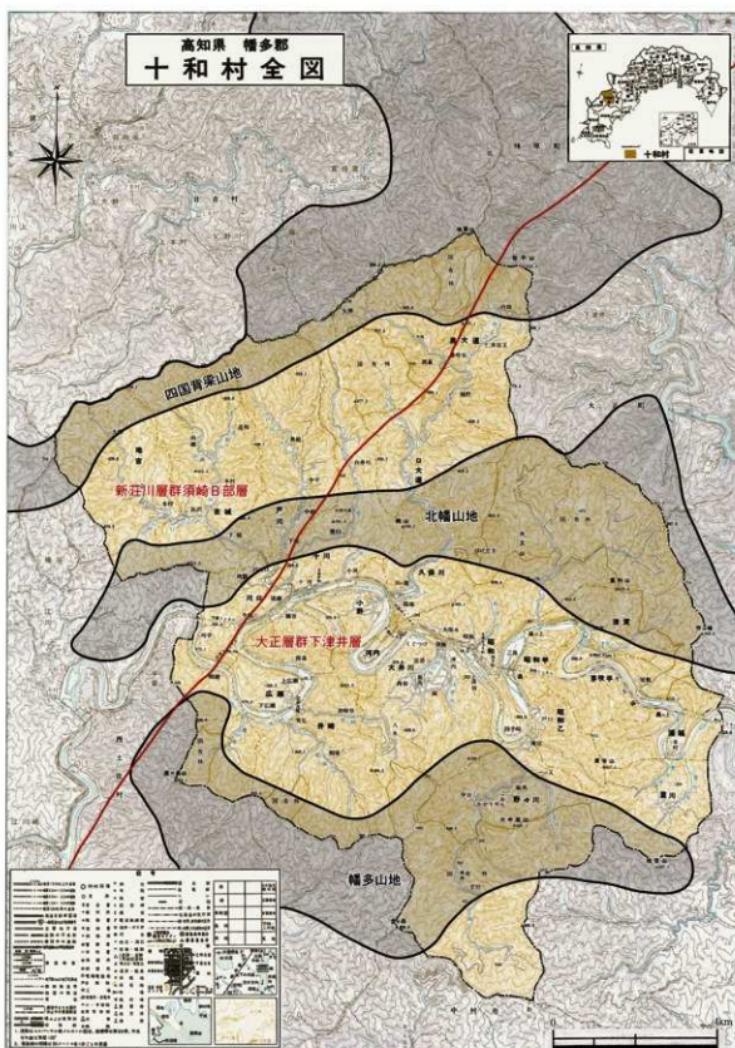
第2節 十和村の地理的・歴史的環境

1. 地理的環境

十和村は高知県北西部に所在する。同村は地質学的には仏像構造線を境界として秩父帯と接する四万十帯に属する。四万十帯は中筋構造線を境に白亜記層が分布する北帯と第三紀層が分布する南帯にわかれれるが、十和村は北帯の中部に位置する。四国ではこれらの地質帯はその形成過程が原団で中央構造線とほぼ平行に分布しており、また地質構造の影響を受ける山脈も、同様の方向に連なる。さて、県西部の四万十帯北帯は白亜紀でも比較的古い時代に形成され北側に分布する新莊川層群と、比較的新しい時代に形成され南側に分布する大正層群に分類される。この2つの層群の境界は横S字型に屈曲するが、これは四国西南部が形成される過程において東西の方向から強い營力を受けたからであると考えられ、四万十川の流路等、西南四国の地形に大きな影響を与えていたと思われる。十和村の北西部の大部分は新莊川層群須崎B部層に、南東部は大正層群下津井層に属する。須崎B部層・下津井層とも砂岩・泥岩の他に頁岩を含む地層であり、石器の石材選択にも影響を及ぼしていると考えられる。

地形的に十和村を概観すると村内を蛇行しながら西流する四万十川を挟んで北側には四国背梁山地(戸祇御前山 - 長山山地)、南側には幡多山地(鷹の巣山 - 大中尾山山地)が東西の方向に峰を連ねている。四国背梁山地(戸祇御前山 - 長山山地)からは津賀の川・北の川・炎谷川・久保川・小貝川・長沢川の各支流が南流して四万十本流に注ぎ込む。四国背梁山地(戸祇御前山 - 長山山地)の南側にはやや起伏が緩やかな北幡山地(古城 - 吹の峰山地)が続くため、これらの支流の多くは山間部の支流としては比較的長い流路を有する。両山地の間の地吉・古城にはやや東西に細長い盆地が形成される。幡多山地(鷹の巣山 - 大中尾山山地)からは里川川・野々川川・大井川・井崎川・相後川・鷹の巣川が北流して四万十本流に注ぎ込む。山地と四万十川本流の距離が比較的近いため、各支流の流域面積も比較的狭い。

十和村内の遺跡は、城館跡は山地の尾根部に、縄文時代の遺跡は河岸段丘上に立地する。河岸段丘は主に四万十川本流の蛇行部または支流との合流地点に発達する。また、その他には四万十川支流としては緩流部分が多くみられる長沢川流域や、大井川の繞谷丘陵の周辺の平地に遺跡が集中する。



第2図 十和村地形図

2. 歴史的環境

十和村内では旧石器時代の遺物は確認されていない。村内最古の遺物が出土した遺跡は十川駄場崎遺跡である。1988(昭和63)年の調査でE区VI層より出土した尖頭器、F区V層上層より出土した豆粒状または帯状の粘土を貼付した土器は縄文時代草創期の可能性があると思われる。1993(平成5)年~1994(平成6)年の調査では1区IX層から隆起線文土器が出土している。

縄文時代早期の遺物が確認された遺跡としては十川駄場崎遺跡、川口ホリキ遺跡が挙げられる。十川駄場崎遺跡では1982(昭和57)年の調査では第V層で比較的振幅が小さい山形の押型文土器が1片、1988(昭和63)年の調査ではA区第IV層で楕円形の押型文土器と思われる土器片が1片出土している。高知県高岡郡佐川町に所在する不動ヶ岩屋洞窟遺跡を標式遺跡として不動ヶ岩屋II式と呼ばれることがあるがここでは黄島式並行の可能性が強いと述べるに留めておく。十川駄場崎遺跡における1982(昭和57)年の調査では、押型文土器が出土した層より上層の第III層から織維が混入された無文厚手土器が出土しており、駄場崎式と呼ばれることもあるが、編年的な位置付けはここでは避けたい。この土器と胎土に金雲母を含む土器片が共伴して出土している。1987(昭和62)年における川口ホリキ遺跡の調査ではTR3第V層で同様の土器が出土している。主に縄文時代早期に出土するトロトロ石器については、十川駄場崎遺跡における1988(昭和63)年の調査で、A区IV層及びC区IV層より1点ずつ、1990(平成2)年の調査ではG区IV層から2点出土している。その他、奈路遺跡でもトロトロ石器は表採されている。

縄文時代前期の遺物が確認された遺跡としては十川駄場崎遺跡、川口ホリキ遺跡、広瀬遺跡が挙げられる。1987(昭和62)年における川口ホリキ遺跡の調査ではTR3第V層及びTR5第VII、VIII層から轟B式と思われる土器が出土している⁽¹⁾。十川駄場崎遺跡では1982(昭和57)年の調査で、広瀬遺跡では1971(昭和46)年の調査で羽鳥下層III式⁽²⁾と思われる土器が出土している。広瀬遺跡では1971(昭和46)年の調査で轟D式と思われる土器が1片、1963(昭和38)年、1971(昭和46)年の調査では彦崎ZI式と思われる土器が出土している⁽³⁾。1987(昭和62)年における川口ホリキ遺跡の調査ではTR3第V層から彦崎ZII式と思われる土器が出土している⁽⁴⁾。

縄文時代中期の遺物が確認された遺跡としては十川駄場崎遺跡、川口ホリキ遺跡、広瀬遺跡が挙げられる。1988(昭和63)年における十川駄場崎遺跡の調査で、F区第I層より船元I式土器が出土している。1987(昭和62)年における川口ホリキ遺跡の調査ではTR5第VII、VIII層から船元I、II式と思われる土器が出土している。広瀬遺跡では1963(昭和38)年、1971(昭和46)年の調査で船元II式と思われる土器が出土しており⁽⁵⁾、1971(昭和46)年の調査では里木II式と思われる土器が出土している。

縄文時代後期の遺物が確認された遺跡としては川口ホリキ遺跡、広瀬遺跡が挙げられる。1987(昭和62)年における川口ホリキ遺跡の調査ではTR5第VII層から、1963(昭和38)年における広瀬遺跡の調査では中津式並行⁽⁶⁾と思われる土器が包含層の下層から出土している。広瀬遺跡における1963(昭和38)年の調査では福田K2式、宿毛式と思われる土器が包含層の下層から出土している。同じく広瀬遺跡における1963(昭和38)年、1971(昭和46)年の調査では平城式と思われる土器が出土

している。1987(昭和62)年における川口ホリキ遺跡の調査ではTR5から片鉢式土器が出土している。また、同じく1987(昭和62)年における川口ホリキ遺跡の調査ではTR5から、1963(昭和38)年、1971(昭和46)年における広瀬遺跡の調査では西平式と思われる土器が出土している。ここで出土した西平式と思われる土器は、在地固有の特色を持つ土器様式を持つものであるとして広瀬(上層)式と呼ばれることがある。1993(平成5)～1994(平成6)年における十川駄場崎遺跡の調査では4区II層から片鉢式または伊吹町式と思われる土器が出土している。1987(昭和62)年における川口ホリキ遺跡の調査ではTR5から、伊吹町式の土器も出土している。

縄文時代晩期の土器の出土は少ないが、1987(昭和62)年における川口ホリキ遺跡の調査ではTR5第V層から、口縁部下に突帯を有し、内外面に二枚貝による調整を持つ土器が出土しており、晚期初頭～前半のものと位置付けをして報告されている。

その他、詳細な時期の確定は難しいが縄文土器の細片や石器が出土している遺跡としては、三島遺跡、轟遺跡、松原遺跡、曾利遺跡、くぐつけ遺跡、河内遺跡、琴平ノ下遺跡、曾我ノ森遺跡、小野遺跡、川口新階遺跡、今成遺跡、上広瀬遺跡がある。中亀越遺跡、小ノ田・カミヒラ遺跡については、前述したとおり2001(平成13)年の試掘確認調査で発見された遺跡である。ほとんどが、四万十川またはその支流に発達した河岸段丘に立地する。

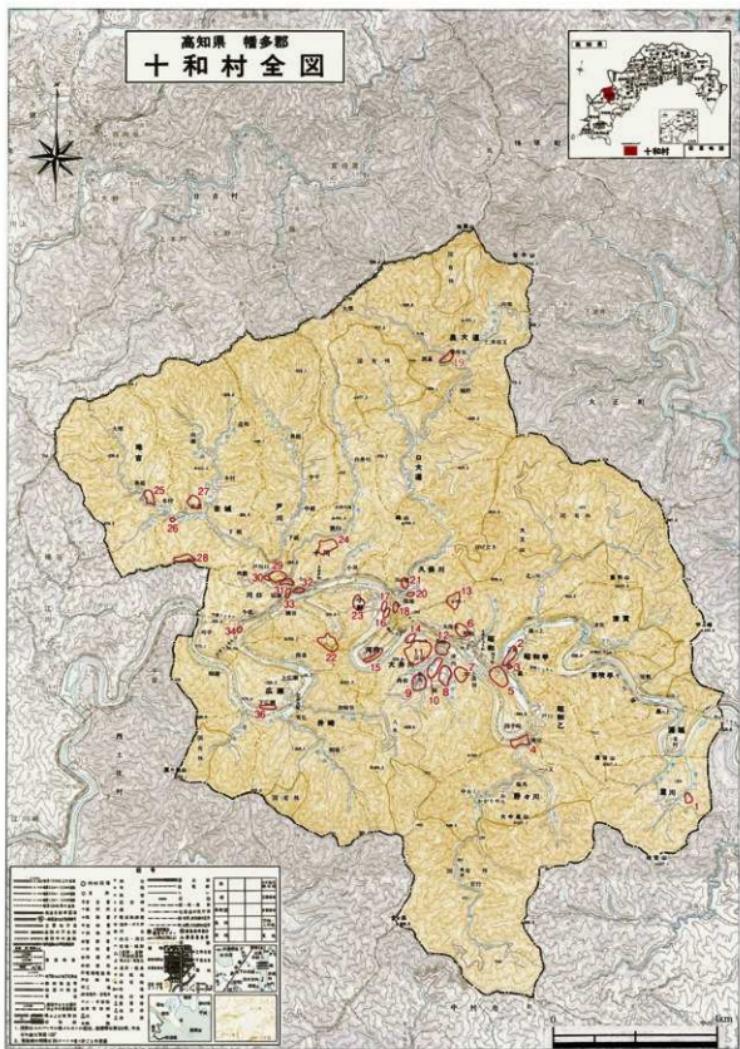
弥生時代、古墳時代、古代の遺物が出土する遺跡はほとんど確認されていないが、1991(平成3)年に実施された奈路遺跡の発掘調査で出土した磨製石剣は弥生時代の遺物である可能性もある。

十和村・大正町そして窪川町・中村市の一帯は古くは上山郷と呼ばれていた。『南路志』によると、1190(建久元)年に現大正町田野々の熊野権現が上山領主田那部旦增之嫡子永旦によって勧請されたという記述があるところから、上山郷は古代末に成立した可能性が強いと考えられている。中世の上山郷は幡多荘の一部となったと考えられ、1250(建長2)年以降は一条氏の支配を受けたものと思われる。一方、1204(元久元)年に祇園牛頭天王を中平重熊嫡子福井主善養子同重行が勧請したという棟札が小野地区の八坂神社に残っているが、これ以降、小野、地吉、四手、久保川、井崎、大道地区等で地頭・名主が順次、檀那として棟札に名を残すようになる。南北朝時代以降は地頭上山氏の勢力が強かったようだが、上山郷では彼らが、一条氏に大きな反抗をしたという記録は残っていない。

中世城跡としては黒川城跡、野々川城跡、南四手城跡、四手城跡、富賀城跡、大井川東城跡、大井川城跡、宮添城跡、奥大道城跡、久保川城跡、小野城跡、川津城跡、横臼城跡、地吉城跡、鳥城跡、兵部ヶ城跡、コノ(龍見)城跡が確認されているが、城主について詳細がわかっているものは少なく、『大海集』に四手城主中平熊重の名がみえるぐらいである。

中世の遺物散布地としては、土師質土器片が確認されている奈路遺跡、河内遺跡、曾我ノ森遺跡、今成遺跡、青磁片が確認されている轟遺跡、松原遺跡、奈路遺跡、久保川東遺跡、備前焼片が確認されている奈路遺跡、河内遺跡、そして天目茶碗、染付が出土している奈路遺跡がある。

1991(平成3)年に実施された奈路遺跡の発掘調査では16世紀前半でも中葉に近い時期と思われる掘立柱建物跡と土坑が確認されている。また、古城地区の吉良明神(別名擂鉢神社)に保管されている瓦質土器の擂鉢は鎌倉時代後半～室町時代初頭のものと思われる。



第3図 十和村遺跡地図

表3 十和村遺跡一覧

	遺跡名	所在地	時代	種別
1	黒川城跡	十和村黒川字城ノ森	室町	城跡
2	三島遺跡	十和村昭和197-17	縄文	散布地
3	轟遺跡	十和村昭和甲字神田114-2	縄文・室町	散布地
4	野々川城跡	十和村野々川441-13	室町	城跡
5	南四手城跡	十和村昭和甲字四手崎山	室町	城跡
6	四手城跡	十和村昭和甲字又山	室町	城跡
7	大井川東城跡	十和村大井川字九戈谷	室町	城跡
8	曾利遺跡	十和村大井川1011	縄文	散布地
9	松原遺跡	十和村大井川785~788・790	縄文・室町	散布地
10	大井川城跡	十和村大井川字森ノ駄場	室町	城跡
11	宮添城跡	十和村大井川字橋元平ヲ	室町	城跡
12	奈路遺跡	十和村大井川字奈路	縄文・室町	集落跡
13	富賀城跡	十和村昭和字大又山	室町	城跡
14	くぐつけ遺跡	十和村大井川1982	縄文	散布地
15	河内遺跡	十和村河内134-3	縄文	散布地
16	曾我ノ森遺跡	十和村小野字曾我ノ森	縄文・室町	散布地
17	小野遺跡	十和村小野字寺中	縄文	散布地
18	琴平ノ下遺跡	十和村久保川字琴平ノ下60-62	縄文	散布地
19	奥大道城跡	十和村大道610-D・1300-1	室町	城跡
20	久保川東遺跡	十和村久保川字147-1	室町	城跡
21	久保川城跡	十和村久保川字森分	室町	城跡
22	川津城跡	十和村小野字城ノ森	室町	城跡
23	小野城跡	十和村小野字興七ヶ谷	室町	城跡
24	横臼城跡	十和村川上1190~6	室町	城跡
25	地吉城跡	十和村地吉1313-2	室町	城跡
26	中龜越遺跡	十和村地吉字中龜越7	縄文	散布地
27	鳥城跡	十和村古城字コジロ	室町	城跡
28	兵部ヶ城跡	十和村古城字マキノ谷	室町	城跡
29	コノ(龍見)城跡	十和村川口字小ノゾラ	室町	城跡
30	小ノ田・カミヒラ遺跡	十和村川口字小ノ田318	縄文	散布地
31	川口新階遺跡	十和村川口字新階・馬ノ石	縄文	散布地
32	川口駄場崎遺跡	十和村川口字駄場崎	縄文	集落跡
33	川口ホリキ遺跡	十和村川口字ホリキ	縄文	散布地
34	今成遺跡	十和村川口字シモツルイ84-3	縄文	散布地
35	上広瀬遺跡	十和村広瀬字宮ノ堀・宮ノ下堀	縄文	散布地
36	広瀬遺跡	十和村下広瀬字谷屋敷	縄文	散布地

1982(昭和57)年に実施された曾我ノ森遺跡の発掘調査では1899(明治32)年まで当地に所在していた曾我神社が、出土した土師質土器から室町時代まで遡ることが判明している。

近世陶磁器が確認されている遺跡としては森遺跡、曾利遺跡、河内遺跡、久保川東遺跡があげられる。

註(1)高知県宿毛市に所在する橋上遺跡を標式遺跡として橋上Z式と呼ばれたこともあったが、ここでは本文中のとおりの型式名を使用する。なお、森式は熊本県森貝塚を標式遺跡として型式設定された名称である。

(2)羽島下層式については高知県高岡郡鶴原町に所在する初瀬影野地遺跡を標式遺跡として影野地Z式と呼ぶこともあったが、ここでは本文中のとおりの型式名を使用する。なお、羽島下層式は岡山県羽島貝塚を標式遺跡として型式設定された名称である。

(3)(岡本健児1963)には1963(昭和38)年の調査で出土した土器について「彦崎Z式土器に近似する」と記しているが、ここでは「竹管様のものを器面に引っ張りながら結節状に圧痕を押捺した」と表現しているところから彦崎Z I式と記述した。なお、彦崎Z式については、広瀬Z式と呼ばれたこともあったが、ここでは本文中のとおりの型式名を使用する。なお、彦崎式は岡山県彦崎貝塚を標式遺跡として型式設定された名称である。

(4)(山本哲也1988)では里木I式と記述しているが、その後同型式の土器を彦崎Z II式と呼ぶようになったため、ここでは本文中のとおりの型式名を使用する。なお、里木式は岡山県里木貝塚を標式遺跡として型式設定された名称である。

(5)(岡本健児1963)には1963(昭和38)年の調査で出土した土器について「船元式土器に近似する」と記しているが、ここでは「隆帯文に爪形」と表現しているところから船元II式と記述した。広瀬C式と呼ばれたこともあったが、ここでは本文中のとおりの型式名を使用する。なお、船元式は岡山県船元貝塚を標式遺跡として型式設定された名称である。

(6)高知県土佐清水市に所在する下益野遺跡を標式遺跡として下益野式と呼ばれたこともあったが、ここでは本文中のとおりの型式名を使用する。なお、中津式は岡山県中津貝塚を標式遺跡として型式設定された名称である。

第Ⅱ章 調査の方法と成果

本章では調査の方法と成果について、実施された調査ごとに記すこととする。十和村で実施された発掘調査の時期と場所、経緯については「第Ⅰ章第1節調査に至る経緯と経過」で述べたとおりであるが、本報告書に掲載する発掘調査の中には、川口新階遺跡、上広瀬遺跡、広瀬遺跡のように、数次にわたって実施されている例もある。これらの調査を実施した年月日の順に記述すると、必然的に複数回にわけて調査を実施した遺跡については実施時期毎にわけて記述することになり非常に繁雑になる。そこで、本報告書では、各調査の実施された順序については「第Ⅰ章第1節」を参照していただくことにして、各遺跡・地区ごとにまとめて調査の成果を報告することとする。原則として四万十川及びその支流の上流に位置する遺跡・地区から順に報告する。また、今回の発掘調査、整理作業期間中に、調査対象地域以外で考古資料が確認された。貴重な資料であるため、この章で報告することとする。

調査の方法については、基本的にTPを設定した後、表土については重機を使って除去した。その下からは重機と人力を併用して掘削し、遺物・遺構の検出に努めた。は場整備事業は試掘確認調査の後すぐに実施する計画ではないので、調査を実施した翌年は調査対象地を農地として使用することとなっていた。このため、調査はもとより調査後の埋め戻しにはできる限りの配慮をする必要があった。TPの大きさはできる限り狭く設定し、試掘確認調査による耕地への影響を最小限に止めようとした。埋め戻しの土については、山土を外部から運んでき使ったが、傾斜地での調査も多く、キャリーで土を運ぶことができない場合もあった。このため、埋め戻し後の填圧は人力と重機を併用して行ったが、少し土を埋め戻すごとに行うなど注意を払った。また、傾斜地での調査であるため、重機の移動にも苦労した。翌年度の作付けが行われるため、石垣等を壊さずに調査区の中を移動しなければならなかった。移動が不可能な場所については人力で調査を行ったが、重機のオペレーター岡田保美氏はできる限り重機を乗り入れて調査できるよう最大限の努力をした。もちろん、安全を第一に考えた範囲のことである。測量・写真撮影については必要に応じて実施した。土層の層序についてはTPの広さが狭いということもあり、柱状図を作成した。TPの位置については耕作地の畦からの距離を測って簡易な方法で測量して調査を迅速に進めることを優先したが、遺物が出土したTP等については、平板による測量で図面を作成した。今回の調査区については平成15年度中に測量図面を作成する予定であったので、当面は地籍図等を利用して簡易な図面を作成し、測量図面作成後修正する予定であったが、測量図面作成が遅れることとなったため、今回の報告書は地籍図を平板による測量図面で修正したものを使用することとなった。

第1節 屋敷地区

屋敷地区は試掘確認調査が実施された場所ではないが遺物が表探されたことが報告されているため、ここで節を設けて述べることとする。

1. 表探地点

高知県幡多郡十和村茅吹手字屋敷154-1

2. 表探地点の概要

表探地点は四万十川右岸に位置する高位の河岸段丘上である。郷土考古学研究家の田辺猛氏によって遺物が表探された。掘り返された廃土の中から発見したということである。

3. 表探年月日

不明。

4. 表探遺物

トロトロ石器(1)が1点表探されている。県内では非常に貴重な資料であるため紹介する。詳細については後述する。



第4図 屋敷地区表探地点位置図・出土遺物実測図

第2節 津賀地区

1. 調査場所

高知県幡多郡十和村津賀字アノキ田・エノキ田

2. 調査区の概要

四万十川の屈曲部右岸に発達した河岸段丘の一部で支流の津賀川との合流地点付近である。現在は大部分が水田である。地形は四万十川本流に向かって傾斜する。津賀川に面した部分は河岸段丘や幅が狭い。地形等から未知の遺跡が存在する可能性があるため調査を実施した。

3. 調査期間

平成14年10月17日～平成14年10月18日



4. 調査面積

- ①調査対象面積 約12,201m²
- ②試掘確認調査面積 約112m²

5. 調査方法及び経過

まず、任意に1～2×2mの試掘坑(テストピット; 以下TPと記す)を18箇所設定して調査した。

6. 基本層序

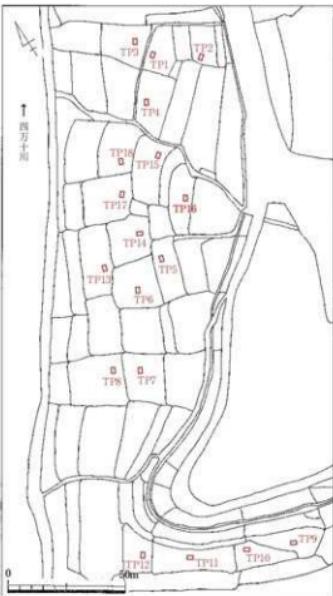
灰色粘土の耕作土の下は青灰色または黄褐色のシルト層が分厚く堆積することが多く、その下に砂層または砂礫層を確認できる場合もあった。

7. 出土遺物・検出遺構

遺物・遺構ともに確認することはできなかった。

8. 調査成果

シルトや砂が分厚く堆積しており、浸水が多い地域だったと思われる。調査対象範間に埋蔵文化財包蔵地が所在する可能性は低いと思われる。



第5図 津賀地区位置図・調査区平面図

第3節 三島遺跡

1. 調査場所

高知県幡多郡十和村昭和197

2. 調査区の概要

調査区は周知の埋蔵文化財包蔵地三島遺跡の範囲内で、遺跡の南部に位置する。三島遺跡は高知県遺跡詳細分布調査によって発見された遺跡である。1987(昭和62)年4月19日に十和村教育委員会によって縄文土器片4点発見されたことが届けられている。発見場所は高知県幡多郡十和村昭和197-17であり、調査対象地域よりは上流側であった。

同遺跡は四万十川の中洲に所在し、四万十川本流と通称三島渓流に挟まれた位置にある。伝承によると1459(長禄3)年に叢祠した郷社三島神社が、1890(明治23)年の大水によって流されるまでは調査対象地域の近隣に所在していたということである。現在三島神社は仲又山に所在する。対岸の森には「神田」という字名があり、三島神社との関係を窺わせる。このため、調査対象地域では、縄文または中世の埋蔵文化財が所在する可能性が高いと思われた。なお、この調査は村道昭和戸口線第2三島橋架換工事に伴う試掘確認調査として実施された。

3. 調査期間

平成8年6月10日～平成8年6月12日

4. 調査面積

①調査対象面積 約300m² ②試掘確認調査面積 約40m²

5. 調査方法及び経過

調査対象区に3箇所のTPを設定して調査した。

6. 基本層序

耕作土・床土の下は基本的には河川堆積による粘質土層や砂層がみられた。TP3では表土より約1.5m下で厚さ約20cmのアカホヤの堆積がみられた。表土より約3.8m下からは疊層となっている。

7. 出土遺物・検出遺構

遺物は出土しなかった。TP1では床土より下層で浅い掘り込みを検出したが、近世のものか近代のものか判別はつけることはできなかった。他には近代のものと思われる遺構以外検出することはできなかった。

8. 調査成果

調査対象区は緩傾斜地であることや、土層から度々の冠水を被った砂層を確認していることから、縄文時代、中世の遺跡の立地条件としては不適当であると考えられ、遺跡の中心部から離れていた可能性がある。三島神社は東方の微高地に所在していた可能性がある。

今回の調査は地図で示したように、三島遺跡の南端部のみで実施された。このため、今回の調査では三島遺跡の全容をつかむことができなかつた。調査では特に遺物を検出することはできなかつたが、このことによって三島遺跡全体の存在を否定することができるわけではない。



第6図 三島遺跡位置図・調査区平面図

第4節 藤遺跡

1. 調査場所

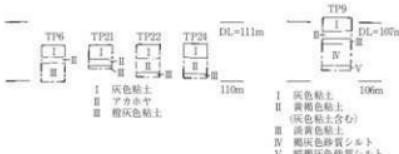
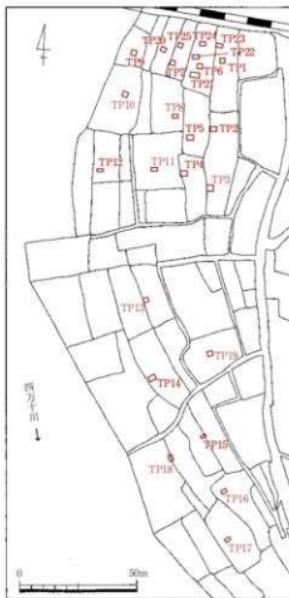
高知県幡多郡十和村昭和甲字神田・下駄谷口・下屋式道辻

2. 調査区の概要

調査区は周知の埋蔵文化財包蔵地森遺跡の遺跡範囲とほぼ一致する。森遺跡は高知県遺跡詳細分布調査によって発見された遺跡である。1987(昭和62)年4月19日に十和村教育委員会によって縄文土器片1点、青磁碗片1点、近世陶器片7点が発見されたことが届けられている。発見場所は高知県幡多郡十和村昭和甲58であり、調査対象地域内であった。

同遺跡は、緩やかに屈曲する四万十川本流左岸に発達した河岸段丘上に位置する。地形は調査区の西側を南流する四万十川本流に向かって傾斜する。調査区北端は現在JR予土線の高架下となっているが、この部分は谷状の地形となっている。現在は大部分が水田で、一部が畠として利用されている。

森地区の埋蔵文化財としては、1979(昭和54)年、林道建設の際に出土した供養碑と地蔵座像がある。出土地点は字ガメイシで、古くは四万十川の渡し場があった場所である。供養碑は高さ39cm、一番広い底部の幅が22cm、厚さは6.5cmと薄く板状である。碑には上部に阿弥陀如来を表す「キリーク」の梵字とその下に「南無阿弥陀仏」の名号が入る。紀年銘によると1510(永正7)年に造立されたようである。地蔵座像は高さ28cm、一番広い底部の幅が18cm、厚さは5~8cmである。地蔵菩薩は合掌の形をとり、頭の丸い船型光背を有する。地蔵の頭部の上に地蔵菩薩を表す「カ」の梵字が見える。紀年銘によると1511(永正8)年に



第7図 森遺跡位置図・調査区平面図・土層柱状図

造立されたようである。出土地点が前述したように昔の渡し場であったことなどから、水没者の供養等のために石造物が作られたのではないかと思われる。

3. 調査期間

平成13年10月23日～平成13年10月26日

4. 調査面積

①調査対象面積 約8,681m² ②試掘確認調査面積 約78m²

5. 調査方法及び経過

まず、調査対象地域内に任意に1～2×2mのTPを19箇所設定して調査した。その結果TP6・9では遺物包含層が確認されたため、TP20～25を設定して包含層の広がりを確認し、必要に応じてトレーナ（以下TRと記す）の面積を拡大して調査した。

6. 基本層序

耕作土のすぐ下はアカホヤである。その下は橙灰色粘土層でよく縮まっている。ただし、河川近くのTPでは耕作土・盛土の下に粘土層や砂質シルト層が分厚く堆積する。

7. 出土遺物・出土遺構

TP6・9・21・22・24で遺物包含層等を確認した。詳細は以下のとおりである。

TP6

第I層は耕作土である。剥片1点が出土した。石材は珪質頁岩である。第II～III層は自然堆積層である。第II層からは繩文土器片6点・石匙(4)・剥片4点が出土した。(4)の石材は頁岩である。剥片は3点が珪質頁岩で1点がチャートである。

TP9

第I層は耕作土である。第II層は床土である。第III～V層は自然堆積層である。第IV層からは繩文土器約10点・剥片3点が出土した。剥片の石材は珪質頁岩である。

TP21

第I層は耕作土である。第II～III層は自然堆積層である。第II層からはチャート製剥片・姫島産黒曜石製剥片・繩文土器約10点・剥片2点が出土した。剥片の石材は1点が姫島産黒曜石、1点がチャートである。(2)は繩文土器であり、纖維痕がみられる。

TP22

第I層は耕作土である。第II～III層は自然堆積層である。第II層からは繩文土器2点・剥片1点が出土した。剥片の石材は珪質頁岩である。第II層上面でSK1が検出された。土器片1点(3)・剥片2点が出土した。土器片は細片で時代の特定は難しいが、口縁端部は調整によって面を成している。剥片の石材は1点が珪質頁岩、1点がチャートである。土坑は埋土が軟弱で比較的新し

い時代のものである可能性も強い。

TP24

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ～Ⅲ層は自然堆積層である。第Ⅲ層からは縄文土器1点・剥片1点が出土した。剥片の石材は姫島産黒曜石である。

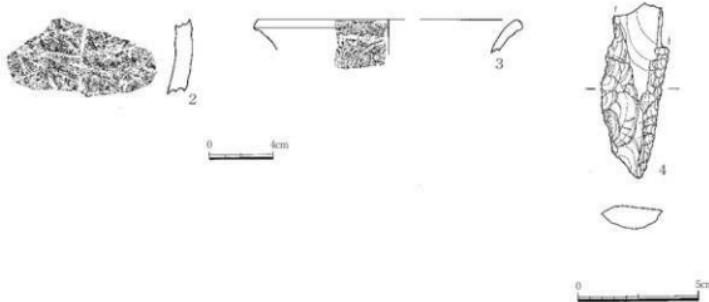
8. 調査成果

縄文土器については細片または無文のものが多いが、TP21で出土したものの中には縄文時代早期後半～前期前半のものと思われる纖維混入土器が出土している。アカホヤが降灰後そのまま堆積したものか、二次堆積したものか判断することは難しいが、TP6・21・22・24のアカホヤ層から出土した遺物については同時期のものである可能性が強い。

石器では剥片が最も出土しており、四万十川流域に原石が多い珪質頁岩製のものや、チャート製、そして九州との繋がりを想起させる姫島産黒曜石製のものまで出土している。製品では石匙が出土しているが、縄文時代早期のものであるとすれば非常に古い例ということになる。石匙の形態としては横長型と縦長型等があるがこれは縦長型である。

TP9から出土した土器については細片であるため判断するのが難しいが、胎土等から縄文時代後期の可能性が強いとみられる。同TPの同層中から出土した剥片も同時期のものである可能性が強い。

調査の結果、従来の埋蔵文化財包蔵地と考えられていた範囲の中でも、南部に設定したTPでは遺物包含層であると考えられる土層を全く確認することができなかった。試掘確認調査後、2002(平成14)年9月2日付けで遺跡範囲の変更が行われた。



第8図　轟遺跡出土遺物実測図

第5節 昭和藤次田・スカ谷地区

1. 調査場所

高知県幡多郡十和村昭和字藤次田・スカ谷



2. 調査区の概要

調査区は四万十川本流に炎谷川が合流する地点に発達した河岸段丘の一部である。現在は大部分が水田で、一部は畠として利用されている。地形は四万十川本流に向かって傾斜している。地形等から未知の遺跡が存在する可能性があるため調査を実施した。

調査区の北側には四手城跡が所在するが、この城は中平氏の居城だったといわれ、詰・土壘・縄堀等が残る。

3. 調査期間

平成13年12月17日～平成13年12月20日

4. 調査面積

- ①調査対象面積 約9,682m²
- ②試掘確認調査面積 約52m²

5. 調査方法及び経過

調査対象地域内に任意に1×2mのTPを26箇所設定して調査した。



第9図 昭和藤次田・スカ谷地区位置図・調査区平面図

6. 基本層序

耕作土の下は厚い盛土となる場所が多い。その下は比較的軟弱な粘土層となっている。

7. 出土遺物・検出遺構

遺物・遺構ともに確認することはできなかった。

8. 調査成果

軟弱な粘土層は浸水により堆積したようだ。地元の話では、浸水のたびに堆積した粘土の上に盛土をして耕地を作り直したようである。調査対象範囲に埋蔵文化財包蔵地が所在する可能性は低い。

第6節 くぐつけ遺跡

1. 調査場所

高知県幡多郡十和村大井川20-1他

2. 調査区の概要

調査区は周知の埋蔵文化財包蔵地であるくぐつけ遺跡の範囲内的一部及びその周辺である。くぐつけ遺跡は高知県遺跡詳細分布調査によって発見された遺跡である。1987(昭和62)年5月19日に十和村教育委員会によって叩石1点、チャート剥片1点が発見されたことが届けられている。発見場所は高知県幡多郡十和村大井川1982であった。同遺跡は四万十川の緩やかな屈曲部に形成された河岸段丘上に所在する。調査対象地域では、縄文時代の埋蔵文化財が所在する可能性が高いと思われた。なお、この調査は村営河内・大井川は場整備事業に伴う試掘確認調査として実施された。

くぐつけはもと大井川集落を構成する小村の1つであり「く、付」と表記された時期もある。大井川は四万十川のかつての蛇行によって形成された繞谷丘陵の周辺の盆地に発達した集落であり、曾利遺跡・松原遺跡・奈路遺跡・くぐつけ遺跡のような縄文時代・中世の遺跡や、大井川東城跡・大井川城跡・宮添城跡等の中世の城跡が残っている。奈路遺跡については1991(平成3)年に発掘調査が実施されているが、その成果については「歴史的環境」で記したとおりである。1852(嘉永5)年～明治時代まで三代にわたって庄屋を務めていたのが中平家であり、前節で紹介した四手城の城主である中平重熊を開祖としている。中平家住宅(旧庄屋屋敷)は有形文化財として村指定されている。

3. 調査期間

平成8年11月25日～平成8年12月6日

4. 調査面積

①調査対象面積 約10,000m² ②試掘確認調査面積 約240m²

5. 調査方法及び経過

調査対象区域に2×2mのTPを60箇所、任意に設定して調査した。

6. 基本層序

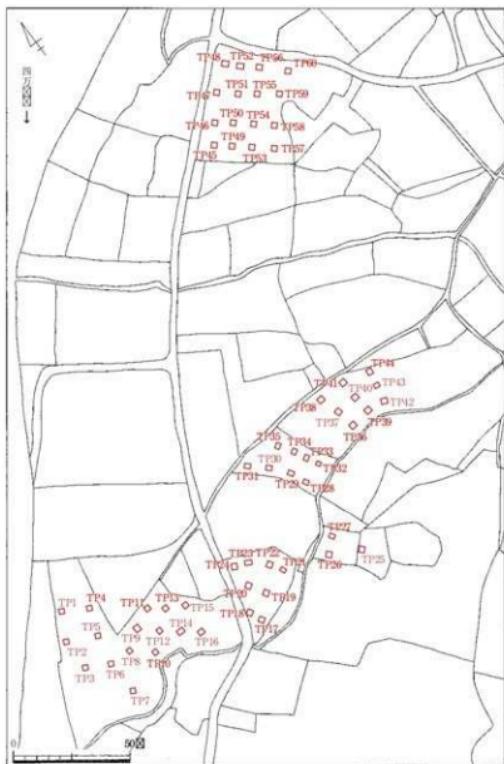
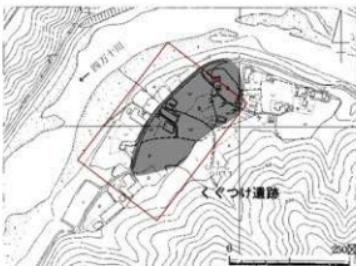
耕作土の下は主に褐色の粘土層である。

7. 出土遺物・出土遺構

TP10より木片が出土したのみである。

8. 調査成果

遺物は木片のみであり時代を特定できるものではなく、調査対象範囲に埋蔵文化財包蔵地が所在する可能性は低いと思われる。



第10図 くぐつけ跡位置図・調査区平面図

第7節 河内遺跡

1. 調査場所

高知県幡多郡十和村河内134-3他

2. 調査区の概要

河内遺跡は高知県遺跡詳細分布調査によって発見された遺跡である。1987(昭和62)年5月19日に十和村教育委員会によって縄文土器片3点、チャート剥片2点、備前甕片2点、土師質土器片1点、近世陶器器片9点が発見されたことが届けられている。発見場所は十和村河内134-3であった。同遺跡は四万十川の緩やかな屈曲部に形成された河岸段丘上に所在する。村営河内・大井川は場整備事業に伴い調査を実施した。

集落北西の山腹には集落名と同じ河内神社が鎮座する。(1987岡本健児)によると河内神社という名称の神社は県外にはほとんど存在しないということであり、年間降水量が多い場所に限って分布する傾向があるようである。十和村内にはかつての河内神社を合祀した十川の星神社を含めると11社あり、1890(明治23)年の大洪水以前は川の合流点または川近くに洪水から集落を守るような位置取りで鎮座していたようである。

旧往還の時には辻堂があり、かつては旅人が休憩をとり、夏季には部落から当番の人が出て、お茶の接待をしていたということである。現在でも当番の最終日に当たるお茶屋上げの日には念仏を唱える行事があり、無形民俗文化財として村指定されている。盆行事としては四万十川で先祖の靈を迎える精霊迎えがあり、田植えの終わりにはオサバイイサマ祭りが行われるが、これらも無形民俗文化財として村指定されている。

3. 調査期間

平成8年10月7日～平成8年11月15日

4. 調査面積

①調査対象面積 約18,000m² ②試掘確認調査面積 約490m²

5. 調査方法及び経過

調査対象区域に2×2mのTPを100箇所、3×3mのTPを10箇所任意に設定して調査した。

6. 基本層序

①耕作土②黄褐色または青灰色粘土である。

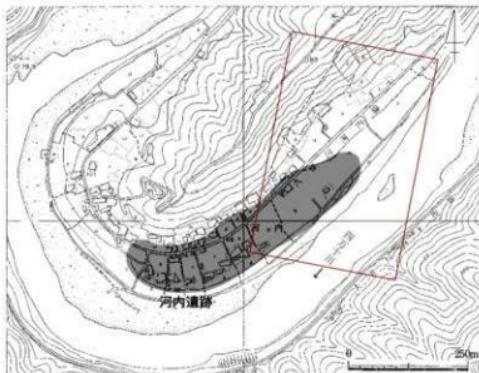
7. 出土遺物・出土遺構

試掘確認調査ではTP52・54から木杭、TP55より木片が出土したのみである。表面採取ではA地

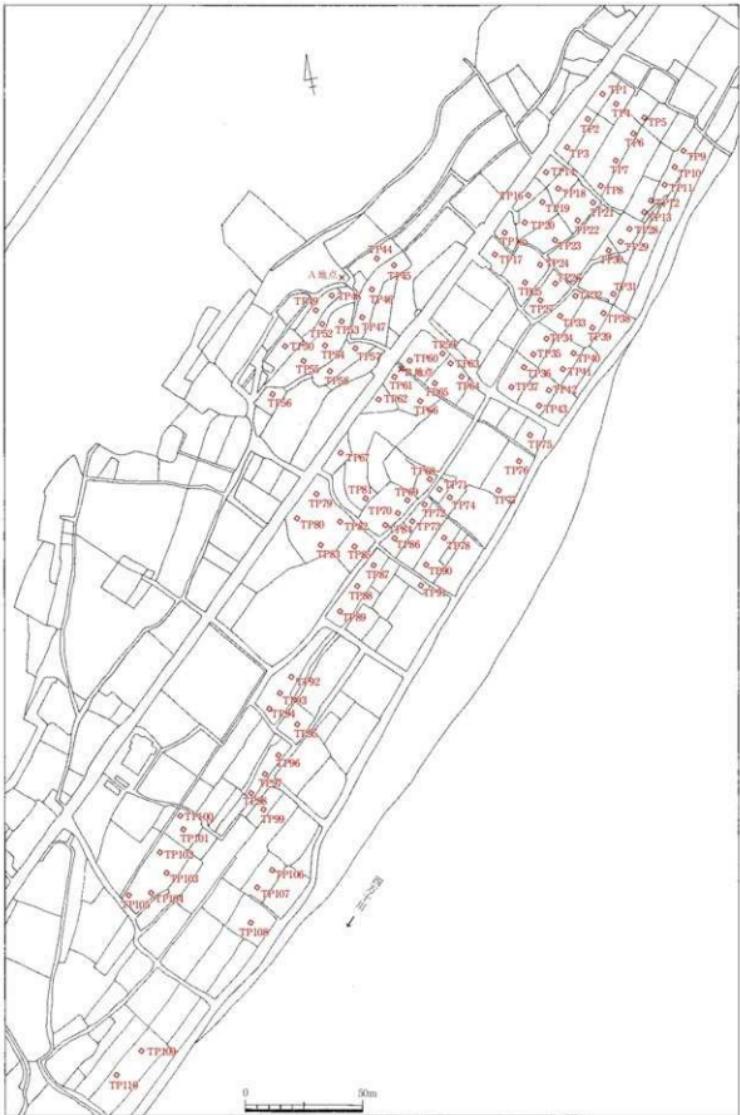
点で中世の擂鉢、B地点でスクレイパー（巻末写真1参照）を表面採取した。現物は実見していないが、残っている写真から石材は珪質頁岩であると思われる。縦長の剥片を利用して作っており、一部に自然面を残すようである。両側縁の片面側のみを押圧剥離によって二次加工している。写真でみる限り両側縁の内一方については精緻に加工を施すが、他方については粗雑な加工であるように見える。

8. 調査成果

遺物は時代を特定できるものではなく、調査対象範囲に埋蔵文化財包蔵地が所在する可能性は低いと思われる。調査は河内遺跡の範囲内を東部を中心に比較的広範囲を調査しているが、表面採取で遺物を確認しているため、調査を実施しなかった場所に遺跡の中心が所在する可能性が強い。



第11図 河内遺跡位置図



第12図 河内遺跡調査区平面図

第8節 小野地区

1. 調査場所

高知県幡多郡十和村小野字彦三屋敷・井戸ノ上・柳ノ久保・寺中・中谷・西ヤシキ・中瀬ノ上・瀬ノ上・シモダバ・ヘンロクヨヲ

2. 調査区の概要

この調査区は四万十川左岸に発達した比較的広い河岸段丘に位置している。1968(昭和43)年に郷土考古学者木村剛朗氏によって発見され石礫、石錐、叩石、チャート剥片が表採されている小野遺跡や、1982(昭和57)年に発掘調査された曾我ノ森遺跡が隣接しており、埋蔵文化財が所在する可能性が高いと考えられた。現在は大部分が水田で、一部は畑として利用されている。地形はほぼ平坦で緩やかに四万十川本流に向かって傾斜している。調査区の南または西から四万十川本流に注ぐ幾筋かの小川によって形成された谷が所在する。

3. 調査期間

平成14年10月22日～平成14年10月29日

4. 調査面積

①調査対象面積 約26.178m² ②試掘確認調査面積 約152m²

5. 調査方法及び経過

まず、調査対象地域内に任意に1～2×2mのTPを77箇所設定して調査した。その結果TP43・59では遺物包含層が確認されたため、TP78～81を設定して包含層の広がりを確認して調査した。

6. 基本層序

①耕作土(灰色粘土)②盛土(黄褐色粘土(灰色粘土を含む))・自然堆積層(③灰黄色粘土④灰色粘土⑤灰色砂⑥灰色シルト(暗褐色粘土を含む)⑦橙灰色粘土)。柱状図の土層については以上の丸番号を用いる。

7. 出土遺物・検出遺構

TP43・59・79で遺物包含層等を確認した。詳細は以下のとおりである。

TP43

第I層は耕作土である。第II層は盛土である。第III～IV層は自然堆積層であるが、第IV層からは剥片1点が出土している。石材は珪質頁岩である。

TP59

第I層は耕作土である。第III～V層は自然堆積層であり、第IV層からは土器片が出土している。

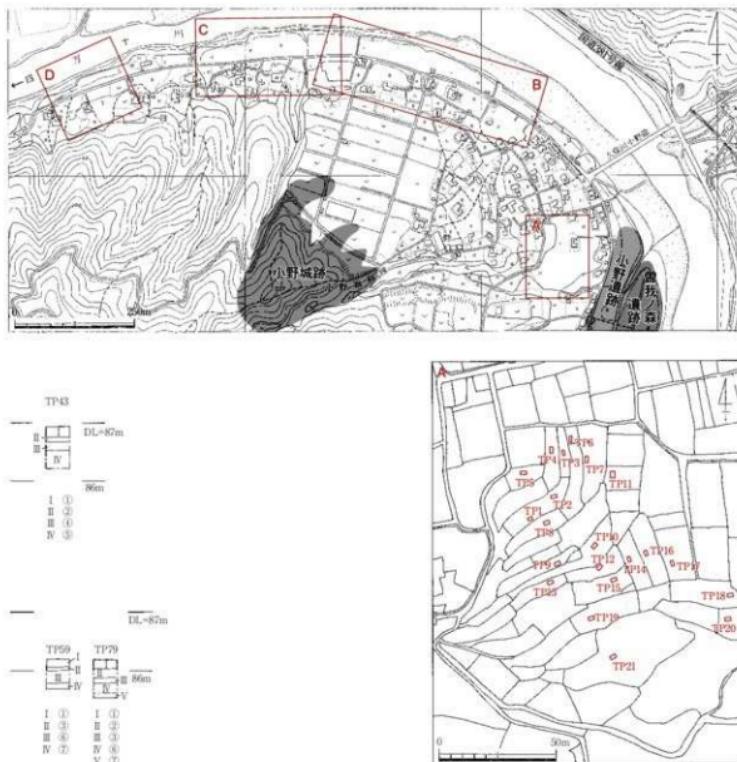
TP79

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ層は盛土である。第Ⅲ～V層は自然堆積層であり、第Ⅳ層からは剥片2点が出土している。石材は1点が珪質頁岩で、1点がチャートである。

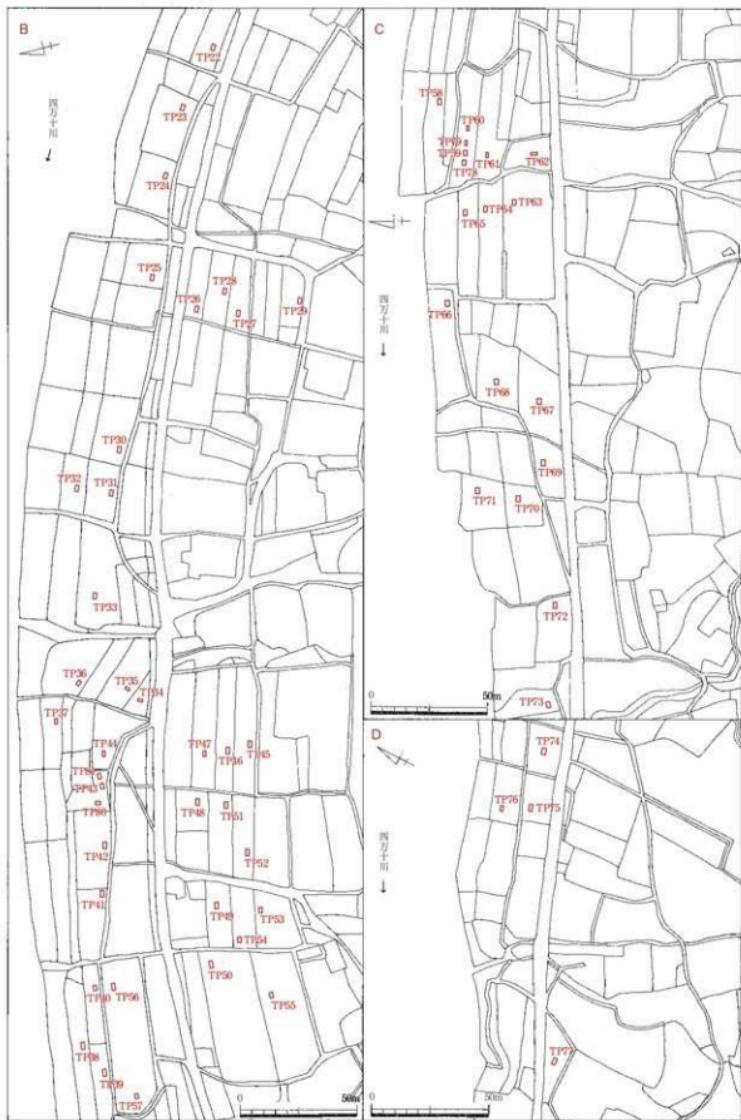
8. 調査成果

土器については細片のみであるが、胎土より繩文土器であるとみられる。剥片は珪質頁岩製である。

一部ではあるが遺物が出土している。現在この地域は比較的区画の広い水田が多いところから、以前存在していた遺跡が過去の水田開発によって削平された可能性も考えられる。



第13図 小野地区位置図・調査区平面図(1)・土層柱状図



第14図 小野地区調査区平面図(2)

第9節 地吉井手ノセキ地区

1. 調査場所

高知県幡多郡十和村地吉字井手ノセキ

2. 調査区の概要

調査区は長沢川が屈曲する部分に発達した河岸段丘の一部である。現在は大部分が水田で、一部は畠として利用されている。地形は緩やかに長沢川に向かって傾斜している。付近の埋蔵文化財包蔵地としては地吉城跡があげられる。郭と思われる平坦部が三段確認できる。見張り台的な規模のものであった可能性は強い。周知の埋蔵文化財包蔵地は所在していないが、地形等から未知の遺跡が存在する可能性があるため調査を実施した。

地吉地区は長沢川上流に位置するが、愛媛県の松野町・広見町・日吉町方面への山越えの道は昔から利用されていたようである。調査区の西方には地吉八幡宮が鎮座するが、ここの夫婦杉は村内唯一の県指定天然記念物といっている。また地吉地区の大念仏踊りは県指定の無形民俗文化財となっており、五ツ鹿踊り・綾踊りは村指定の無形民俗文化財となっている。同じ長沢川流域の古城地区同様、村内では無形民俗文化財が受け継がれている地域である。また、今回の試掘確認調査では、四万十川本流域以外ではこの長沢川流域を6箇所調査することになった。これは長沢川流域には四万十川流域に比べると小規模ではあるが河岸段丘が発達しており、は場整備を実施するべき農地が所在し、また遺跡が存在する可能性がある場所が多かったためである。後述するが、この流域で新発見の遺跡が2箇所確認されることになる。

3. 調査期間

平成13年11月6日

4. 調査面積

①調査対象面積 約3,793m² ②試掘確認調査面積 約24m²

5. 調査方法及び経過

調査対象地域内に任意に1×2mのTPを12箇所設定して調査した。

6. 基本層序

耕作土の下はほとんど10cm大の礫を含む黄褐色粘土であり、これが地山であると考えられる。TP7には二次堆積のアカホヤがみられた。

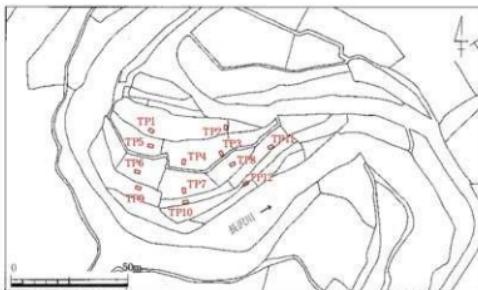
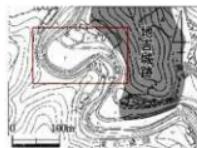
7. 出土遺物・検出遺構

遺物・遺構ともに確認することはできなかった。

8. 調査成果

表土の下はすぐ地山で、遺物包含層となり得る土層が存在しない。土砂が堆積し難い条件であるか、または後世の農地造成によって削平されたことが理由として考えられる。調査対象範囲に埋蔵文化財包蔵地が所在する可能性は低いと思われる。

試掘確認調査では遺物を確認することはできなかったが、調査期間中に、偶然付近の畑(十和村地吉字宮ノ前873-1)で珪質頁岩の剥片が表採されている。長沢川流域における遺物発見場所としては最奥部に位置する。また、長沢川の河原には石器の石材としてよく利用される珪質頁岩が、転石としてみられる。このためか、長沢川流域は四万十川本流以外では遺跡がよく分布する地域となっている。



第15図 地吉井手ノセキ地区位置図・調査区平面図

第10節 地吉本村地区

地吉本村地区はすでに場整備事業が完了しており、試掘確認調査が実施された場所ではないが遺物が表採されたことが報告されているため、ここで節を設けて述べることとする。

1. 表採地点

高知県幡多郡十和村

2. 表採地点の概要

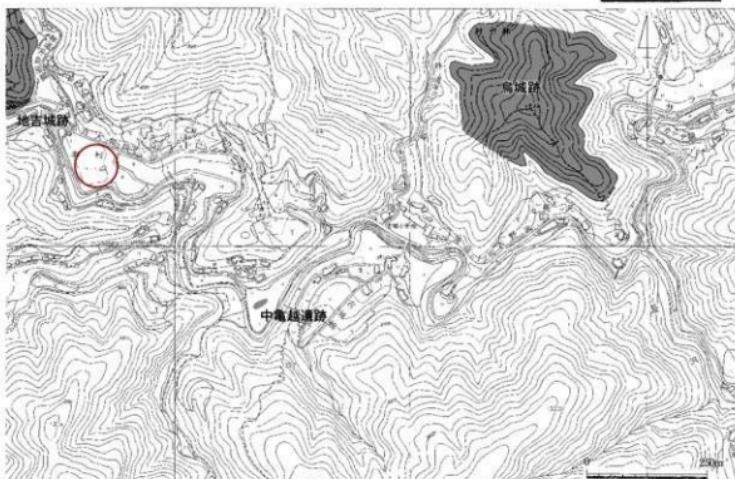
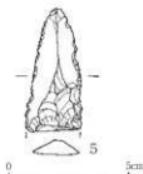
表採地点は四万十川の支流である長沢川左岸に位置する河岸段丘上である。郷土考古学研究家の田辺猛氏によって石鎚(5)1点が表採された。

3. 表採年月日

平成10年5月22日

4. 表採遺物

石鎚(5)が1点表採されている。石材は珪質頁岩である。



第16図 地吉本村地区表採地点位置図・出土遺物実測図

第11節 中亀越遺跡

1. 調査場所

高知県幡多郡十和村地吉字中亀越・亀越口

2. 調査区の概要

調査区は長沢川が屈曲する内側、左岸に発達した河岸段丘の一部である。現在では大部分が水田で、一部は畑として利用されている。地形は緩やかに長沢川に向かって傾斜している。周知の埋蔵文化財包蔵地は所在していないが、地形等から未知の遺跡が存在する可能性があるため調査を実施した。

3. 調査期間

平成13年11月6日～平成13年11月8日

4. 調査面積

①調査対象面積 約6,004m² ②試掘確認調査面積 約49m²

5. 調査方法及び経過

まず、調査対象地域内に任意に1～2×2mのTPを24箇所設定して調査した。その結果TP1・2・9・10・13では遺物包含層が確認されたため、TP25～29を設定して包含層の広がりを確認し、必要に応じてTPの面積を拡大して調査した。

6. 基本層序

耕作土(①灰色粘土)・盛土(②黄褐色粘土(黒褐色粘土・灰色粘土を含む))・自然堆積層(③アカホヤ④橙灰色粘土)となる。柱状図の土層については以上の丸番号を用いる。

7. 出土遺物・検出遺構

TP1・2・7・9・10・13・23・27・29で遺物包含層等を確認した。詳細は以下のとおりである。

TP1

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ層は盛土である。第Ⅲ～Ⅳ層は自然堆積によって形成された層である。第Ⅲ層から剥片1点が出土した。石材は珪質頁岩である。

TP2

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ～Ⅲ層は自然堆積によって形成された層である。第Ⅱ層から剥片9点が出土した。石材は8点が珪質頁岩で、1点がチャートである。

TP7

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ層は盛土である。剥片1点が出土した。石材は珪質頁岩である。

第Ⅲ層は自然堆積によって形成された層であるが、遺物を確認することができなかった。

TP9

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ～Ⅲ層は自然堆積によって形成された層である。第Ⅱ層からは剥片1点が出土した。石材は珪質頁岩である。

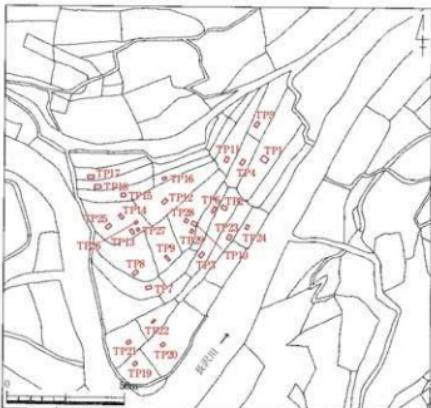


TP10

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ層は盛土である。第Ⅲ層は自然堆積によって形成された層である。第Ⅲ層からは剥片7点が出土した。石材は珪質頁岩である。

TP13

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ層は盛土である。第Ⅲ～Ⅳ層は自然堆積によって形成された層である。第Ⅲ層からは(6)を含めて剥片7点が出土した。石材は6点が珪質頁岩で、1点がチャートである。

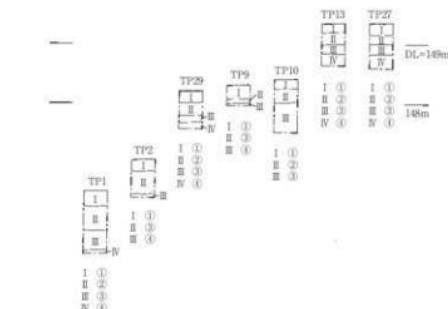


TP23

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ層は盛土である。剥片5点が出土した。石材は珪質頁岩である。第Ⅲ層は自然堆積によって形成された層であるが、遺物を確認することができなかった。

TP27

第Ⅰ層は耕作土である。剥片が出土した。第Ⅱ層は盛土である。剥片1点が出土した。石材は珪質頁岩である。第Ⅲ～Ⅳ層は自然堆積によって形成された層である。第Ⅲ層からは剥片1点が出土した。石材は珪質頁岩である。



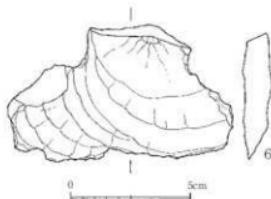
第17図 中龜越遺跡位置図・調査区平面図・土層柱状図

TP29

第Ⅰ層は耕作土である。剥片2点が出土した。石材は珪質頁岩である。第Ⅱ層は盛土である。剥片2点が出土した。石材は珪質頁岩である。第Ⅲ～Ⅳ層は自然堆積によって形成された層である。第Ⅲ層からは剥片2点が出土した。石材は珪質頁岩である。

8. 調査成果

遺物はほとんどが珪質頁岩製の剥片であり、遺物を包含する層はアカホヤである。このことから考えると、遺物が製作されていた時期は縄文時代前期の可能性が強いが、アカホヤが二次堆積である可能性も若干考えられる。いずれにしても縄文時代のものと考えて過多はないと思われる。石器製作または原石を採取した後の簡単な加工が行われていたものと考えられる。遺物が出土したTPの周辺については畦の中等から表採される遺物も多いため、埋蔵文化財包蔵地であると考えられた。このため、2002(平成14)年9月2日に新発見の遺跡として新設した。但し、大部分は後世の開発による削平を受けていると考えられる。



第18図 中龜越遺跡出土遺物実測図

第12節 古城下モダバ・ニイヤ地区

1. 調査場所

高知県幡多郡十和村古城字下モダバ・ニイヤ

2. 調査区の概要

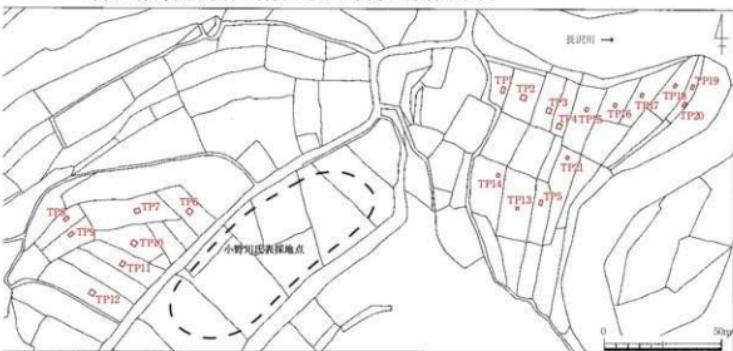
調査区は長沢川が緩やかに屈曲する右岸に発達した河岸段丘の一部である。東側の下モダバ地区、西側のニイヤ地区とともに現在は大部分が水田で、一部は畑として利用されている。地形は緩やかに長沢川に向かって傾斜している。周知の埋蔵文化財包蔵地は所在していないが、地形等から未知の遺跡が存在する可能性があるため調査を実施した。



また、隣接地は周知の埋蔵文化財包蔵地ではないが、「四万十川流域の縄文文化研究」(1987 木村剛朗)において、郷土考古学者小野川和昭氏によって発見され、「古城遺跡」として紹介されている。同著によると下記の遺物が表採されている。しかし、すでに場整備が行われており、かなり地形は改変されている。今回の試掘確認調査はその時には場整備が実施できなかった部分についての調査である。

尖頭状石器……石材はチャートである。形は二等辺三角形で両側縁に押圧剥離を施し、先端は鋭利である。

石核……石材は姫島産黒曜石である。最大長5cm、最大幅4.9cm、最大厚2cm、重量は5gをはかり、県内の姫島産黒曜石の石核としては大きい部類である。



第19図 古城下モダバ・ニイヤ地区位置図・調査区平面図

剥片……石材はチャートがほとんどである。十和村内の遺跡では在地の石材としては珪質頁岩を使うことが多く、チャートを主として利用する例は少ない。

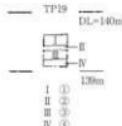
3. 調査期間

平成13年10月30日～平成13年10月31日

4. 調査面積

①調査対象面積 約6,087m²

②試掘確認調査面積 約51m²



第20図 古城下モダバ・ニイヤ地区土層柱状図

5. 調査方法及び経過

まず、調査対象地域内に任意に1～2×2mのTPを21箇所設定して調査した。

6. 基本層序

耕作土(①灰色粘土)・盛土(②黄褐色粘土(灰色粘土を含む)・③暗褐色砂質シルト(アカホヤを少量含む))・自然堆積層(④灰橙褐色粘土(10cm大の礫を含む))。

7. 出土遺物・検出遺構

TP19で遺物が出土した。詳細は以下のとおりである。

TP19

第I層は耕作土である。第II～III層は盛土である。第IV層からは剥片が約10点出土した。石材は珪質頁岩である。第IV層は自然堆積によって形成された層であるが、遺物を確認することができなかった。

8. 調査成果

遺物はTP19で出土した珪質頁岩製剥片のみである。時期特定は難しいが縄文時代のものと思われる。中龟越遺跡と同様の在地石材加工場があったものと思われる。盛土の中で確認されたことから、周辺にあった遺物包含層が削平されて盛られたものとみられる。

今回の試掘確認調査では、小野川氏が遺物を表探した場所の周辺についても試掘したが、遺物を確認することはできなかった。これは今回の調査区が、段丘の周縁部を中心だったためであると思われる。

第13節 戸川千良林堂・シンカイノ上地区

1. 調査場所

高知県幡多郡十和村戸川字千良林堂・シンカイノ上

2. 調査区の概要

調査区は長沢川が屈曲する部分に発達した河岸段丘の一部である。すぐ下流で支流の戸川川が合流している。現在は大部分が水田で、一部は畑として利用されている。地形はほぼ平坦で僅かに長沢川に向かって傾斜している。周知の埋蔵文化財包蔵地は所在していないが、地形等から未知の遺跡が存在する可能性があるため調査を実施した。

3. 調査期間

平成13年11月9日



4. 調査面積

- ①調査対象面積 約4,962m²
- ②試掘確認調査面積 約24m²

5. 調査方法及び経過

まず、調査対象地域内に任意に1×2mのTPを12箇所設定して調査した。

6. 基本層序

耕作土及び盛土の下はすぐ橙灰色砂礫層の地山であった。

7. 出土遺物・検出遺構

遺物・遺構ともに確認することはできなかった。

8. 調査成果

表土の下はすぐ地山で、遺物包含層となり得る土層が存在しない。土砂が堆積し難い条件である、または後世の農地造成によって削平されたことが理由として考えられる。調査対象範囲に埋蔵文化財包蔵地が所在する可能性は低いと思われる。



第21図 戸川千良林堂・シンカイノ上地区位置図・調査区平面図

第14節 小ノ田・カミヒラ遺跡

1. 調査場所

高知県幡多郡十和村十川字小ノ田・カミヒラ

2. 調査区の概要

調査区は長沢川が屈曲する部分に発達した河岸段丘の一部である。対岸で長沢川の支流である吹敷川が合流している。現在は大部分が水田で、一部は畠として利用されている。地形はほぼ平坦で僅かに長沢川に向かって傾斜する。調査区の北側は東から尾根がのびてきているため、やや傾斜を有する。試掘確認調査前、調査区には周知の埋蔵文化財包蔵地は所在しなかったが、東側の山にはコノ(龍見)城跡があることや、地形等から未知の遺跡が存在する可能性があると考えられたため調査を実施した。

3. 調査期間

平成13年11月16日～平成13年11月21日

4. 調査面積

①調査対象面積 約12.201m² ②試掘確認調査面積 約112m²

5. 調査方法及び経過

まず、調査対象地域内に任意に1～2×2mのTPを47箇所設定して調査した。その結果TP2・3・5・6・7・8・9・10では遺物包含層が確認されたため、TP48～56を設定して包含層の広がりを確認し、必要に応じてTPの面積を拡大して調査した。

6. 基本層序

耕作土(①灰色粘土)・盛土(②黄褐色粘土(灰色粘土を含む))・自然堆積層(③暗褐色砂質シルト④暗灰色粘土⑤黄褐色粘土⑥黄灰色粘土(暗灰色粘土を含む)⑦淡暗灰色粘土⑧暗黃灰色粘土(アカホヤを含む)⑨アカホヤ⑩橙灰色粘土)。柱状図の土層については以上の丸番号を用いる。

7. 出土遺物・出土遺構

TP2・3・5・6・7・8・9・10・17・24・25・29・35・36・48・49・50・51・52・53・55・56で遺物包含層等を確認した。詳細は以下のとおりである。

TP2

第I層は耕作土である。第II層は盛土である。第III～V層は自然堆積層である。第III層からは縄文土器片2点が出土した。(7)は口縁部である。波状口縁である。第IV層からは剥片8点が出土した。石材は珪質頁岩である。

TP 3

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ層は盛土である。剥片1点・縄文土器片1点が出土した。剥片の石材は珪質頁岩である。第Ⅲ～V層は自然堆積層である。第Ⅲ層からは縄文土器片が出土した。第Ⅳ層からは剥片3点が出土した。石材は珪質頁岩である。

TP 5

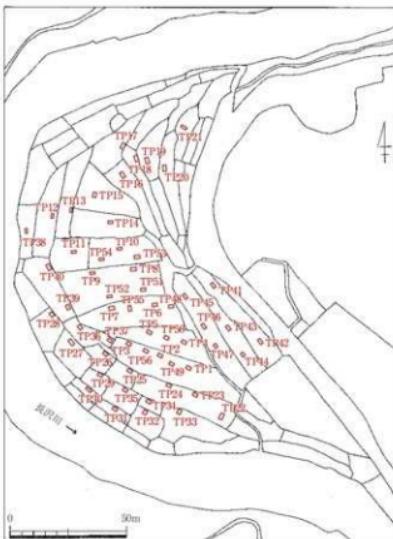
第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ層は盛土である。第Ⅲ～V層は自然堆積層である。第Ⅲ層からは縄文土器片5点・剥片1点が出土した。(8)は口縁部であるが、端部は丸く肥厚されており、この部分については縄文が施される。剥片の石材は珪質頁岩である。

TP 6

第Ⅰ層は耕作土である。青磁3点・白磁1点・瓦片1点が出土した。青磁は中世の所産とみられる。白磁は15世紀後半のD類である。第Ⅱ～VI層は自然堆積層である。第Ⅳ層からは縄文土器片約30点・石鎚1点(20)・剥片約10点が出土した。(9・10)は口縁部である。とともに端部は面を成し、太い沈線によって施文する。(9)は丸い刺突文と竹管文により施文される。(10)は磨消縄文を有する。(11)は太い2本沈線により施文されている。石鎚(20)・剥片の石材は珪質頁岩である。

TP 7

第Ⅰ層は耕作土である。縄文土器片・剥片1点が出土した。剥片の石材は珪質頁岩である。第Ⅱ～V層は



第22図 小ノ田・カミヒラ遺跡位置図・調査区平面図

自然堆積層である。第Ⅱ層からは縄文土器約10点・剥片3点が出土した。剥片の石材は珪質頁岩である。第Ⅲ層からは縄文土器約30点・剥片1点・磨製石斧(21)・石錐(22)が出土した。(12)は口縁部を丸く肥厚し縄文を施し、1本沈線により施文する。剥片の石材は珪質頁岩である。磨製石斧(21)の石材は緑色岩、石錐(22)の石材は砂岩である。

TP8

第Ⅰ層は耕作土である。剥片1点が出土した。石材は珪質頁岩である。第Ⅱ～V層は自然堆積層であるが、遺物を確認することができなかった。

TP9

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ～V層は自然堆積層である。第Ⅲ層からは剥片1点が出土した。石材は珪質頁岩である。

TP10

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ層は盛土である。第Ⅲ～VI層は自然堆積層である。第Ⅳ層からは縄文土器20点・剥片8点・叩石(23)1点が出土した。(13・14)は2本沈線により施文されている。(15)は底部で平底を呈する。剥片の石材は7点が珪質頁岩で、1点がチャートである。叩石(23)の石材は砂岩である。

TP17

第Ⅰ層は耕作土である。剥片1点・RF1点が出土した。石材はともに珪質頁岩である。第Ⅱ層は自然堆積層であるが、遺物を確認することができなかった。

TP24

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ層は盛土である。第Ⅲ～IV層は自然堆積層である。第Ⅲ層から剥片5点が出土した。石材は珪質頁岩である。

TP25

第Ⅰ層は耕作土である。縄文土器片1点・剥片1点が出土した。剥片の石材は珪質頁岩である。第Ⅱ層は自然堆積層である。剥片1点が出土した。石材は珪質頁岩である。

TP29

第Ⅰ層は耕作土である。剥片1点が出土した。石材はチャートである。第Ⅱ層は盛土である。縄文土器片5点・剥片4点が出土した。剥片の石材は珪質頁岩である。第Ⅲ層は自然堆積層であるが、遺物を確認することができなかった。

TP35

第Ⅰ層は耕作土である。染付け1点が出土した。近世の所産である。第Ⅱ層は盛土である。縄文土器1点が出土した。第Ⅲ層は自然堆積層であるが、遺物を確認することができなかった。

TP36

第Ⅰ層は耕作土である。剥片1点が出土した。石材は珪質頁岩である。第Ⅱ層は盛土である。第Ⅲ層は自然堆積層であるが、遺物を確認することができなかった。

TP39

第Ⅰ層は耕作土である。剥片1点が出土した。石材は珪質頁岩である。第Ⅱ層は自然堆積層で

あるが、遺物を確認することができなかった。

TP40

第Ⅰ層は耕作土である。剥片1点が出土した。石材は珪質頁岩である。第Ⅱ層は盛土である。第Ⅲ層は自然堆積層であるが、遺物を確認することができなかった。

TP48

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ層は盛土である。縄文土器4点・剥片1点が出土した。石材は珪質頁岩である。第Ⅲ層は自然堆積層であるが、遺物を確認することができなかった。

TP49

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ層は盛土である。第Ⅲ～V層は自然堆積層である。第Ⅲ層からは縄文土器3点・剥片1点が出土した。石材は珪質頁岩である。第Ⅳ層からは剥片1点が出土した。石材は珪質頁岩である。

TP50

第Ⅰ層は耕作土である。縄文土器1点・剥片2点が出土した。土器は平底を呈する底部である。剥片の石材は珪質頁岩である。第Ⅱ～IV層は自然堆積層である。第Ⅱ層からは縄文土器4点が出土した。第Ⅲ層からは縄文土器9点が出土した。第Ⅳ層上面で径約20cm、深さ約36cmのピットを検出したが、埋土から遺物は出土しなかった。

TP51

第Ⅰ層は耕作土である。剥片1点が出土した。石材は珪質頁岩である。第Ⅱ層は盛土である。第Ⅲ～V層は自然堆積層である。第Ⅲ層からは縄文土器3点・剥片3点が出土した。石材は珪質頁岩である。

TP52

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ層は盛土である。第Ⅲ～V層は自然堆積層である。第Ⅳ層からは縄文土器約20点・砥石1点・剥片約10点が出土した。(16・17)は口縁部であり、端部外面に1本沈線を横位に巡らしている。剥片の石材は珪質頁岩である。

TP53

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ～V層は自然堆積層である。第Ⅱ層からは石鏃1点(24)・縄文土器4点・剥片1点が出土した。(24)の石材は頁岩である。剥片の石材は珪質頁岩である。第Ⅲ層からは縄文土器1点が出土した。

TP55

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ～IV層は自然堆積層である。第Ⅱ層からは縄文土器8点・剥片5点が出土した。(18・19)は口縁部であり肥厚されている。(18)は丸い刺突文に2重弧線文を有する。(19)は口縁部に繩文が施され、その上に山形の2本沈線と丸い刺突文を有する。剥片の石材は3点が珪質頁岩、1点がチャート、1点が姫島産黒曜石である。

TP56

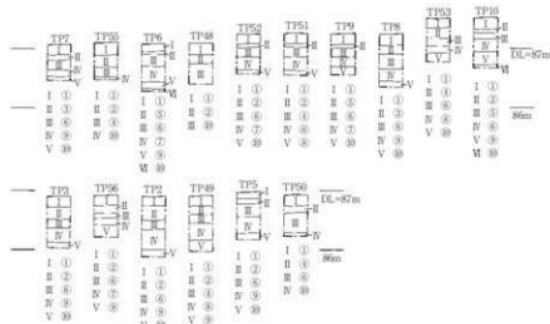
第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ層は盛土である。第Ⅲ～VI層は自然堆積層である。第Ⅳ層からは剥片3点が出土した。石材は珪質頁岩である。

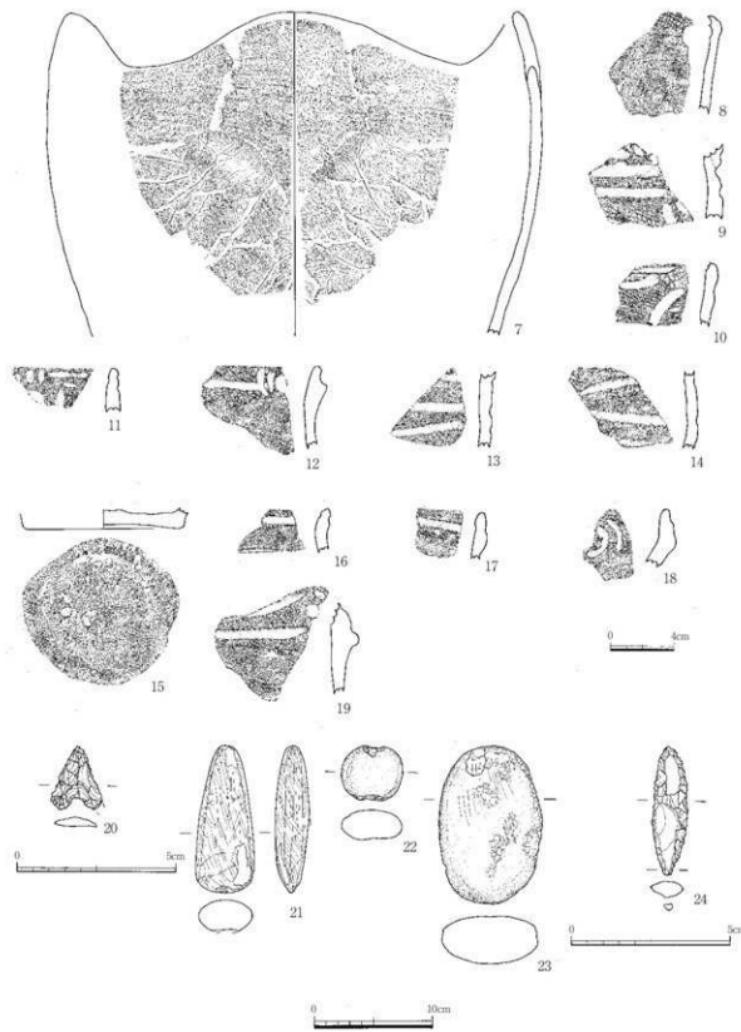
8. 調査成果

比較的多くの遺物を確認することができた。土器では縄文時代後期の平城式土器が出土している。その他の時期を決定付ける遺物は出土していないため、今回の調査で出土した遺物は概ねこれに近い時期のものである可能性が高いと考えられる。平城式土器についてはI式、II式の型式があり、今回の発掘調査では両型式とみられる土器が出土している。この型式については編年の前後関係についても諸説あるが、今回の調査で出土した平城式土器の位置付け等については、「まとめ」に譲ることとする。

石器は磨製石斧・石鎌・石錐・剥片が出土している。石器の剥片のみ出土することが多い十和村の遺跡の中では土器の出土が多く、石器の製品も器種が多様である。集落跡の存在を窺わせる。調査区はコノ城跡の西方に位置するため、中世の遺構・遺物が確認されることも期待されたが、出土例はTP6の白磁片・青磁片のみであった。

遺物が主に出土したTP2・3・5・6・7・8・9・10・48・49・50・51・52・53・55・56の周辺については埋蔵文化財包蔵地であると考えられる。このため、2002(平成14)年9月2日に新発見の遺跡として登載した。





第24図 小ノ田・カミヒラ遺跡出土遺物実測図

第15節 川口新階遺跡

1. 調査場所

高知県幡多郡十和村川口字馬ノ石491
字新階・シロコエ

2. 調査区の概要

川口新階遺跡は石鎚が表採されたことで、以前から「十川中学裏(畑)庭遺跡」として知られていた。高知県遺跡詳細分布調査実施中の1986(昭和61)年11月21日に確認したときに、遺跡の中心部の字名をとって川口新階遺跡と名称を変更した。遺跡は長沢川右岸で、四万十川本流との合流地点付近の蛇行部分に形成された河岸段丘上に位置する。地形はほぼ平坦であるが、川よりの北、西に向かって緩やかに傾斜している。

1992(平成4)年4月20日～4月24日に十川小学校プール建設に伴い試掘確認調査が実施された。発掘調査地点は字馬ノ石497-1に相当する部分である。本報告書ではこの調査を第1次調査と呼ぶこととする。縄文土器片2点・叩石1点・珪質頁岩製調片約50点・チャート製調片1点が出土している。

2001(平成13)年度にはまず、字馬ノ石491において個人の手場整備に伴う試掘確認調査が実施されたが、本報告書ではこの調査を第2次調査と呼ぶこととする。そして、字新階・シロコエにおいて十和中部地区中山間総合整備事業等の手場整備に伴う試掘確認調査が実施されたが、本報告書ではこの調査を第3次調査と呼ぶこととする。しかし、調査期間中、菜花の作付け中であったため、一部調査を実施できない区域があった。

2002(平成14)年度には、第3次調査の時に作付け中のため調査できなかった字新階502-3、514-1に相当する場所について調査を実施することになった。本報告書ではこの調査を第4次調査と呼ぶこととする。

本報告書では第2～4次調査について報告する。第1次調査の内容については「付編川口新階遺跡十和村十川小学校プール建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」「高知県十和村奈路遺跡」(廣田佳久1993)を参照されたい。

3. 調査期間

第2次調査 平成13年9月4日～平成13年9月21日
第3次調査 平成13年11月12日～平成13年11月15日
第4次調査 平成14年10月16日

4. 調査面積

第2次調査	①調査対象面積 約45m ²	②試掘確認調査面積 約45m ²
第3次調査	①調査対象面積 約10,668m ²	②試掘確認調査面積 約112m ²

- 第4次調査 ①調査対象面積 約1,346m²
 ②試掘確認調査面積 約16m²

5. 調査方法及び経過

第2次調査

調査区名をI区とする。調査区の南に隣接する水田からは磨製石斧・叩石・石核・剥片が表採されていたため、当調査区からは当初から高い確率から遺物が出土することが考えられた。また、調査区の範囲が限られていたため、最初から開発対象範囲全域を対象にして調査が実施された。

調査区の形がほぼ長方形であるため、調査区のはば中心を通るパンクを長軸方向に1本、短軸方向に1本、十文字の形に設定した。このパンクによってできた4区画をさらに南北2つずつの区画に分け、調査区を8つの簡易なグリッドに区画した。

調査区には重機の搬入経路がないため、掘削等の作業はすべて人力で行った。調査の進行に応じて遺物出土状況や層序を確認し、図面・写真により記録を残した。

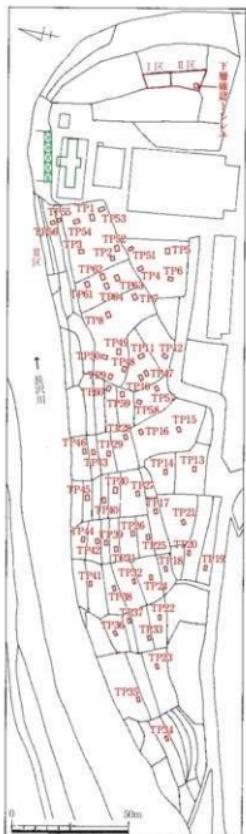
なお、調査区の南に隣接する水田については、通常の調査を実施することはできなかったが、2001(平成13)年4月13日及び同年4月19日に出土遺物を採取した。出土した遺物等資料を紹介する都合上、本報告書ではII区とする。下層確認TRについては、このII区に設定して調査をした。

第3次調査

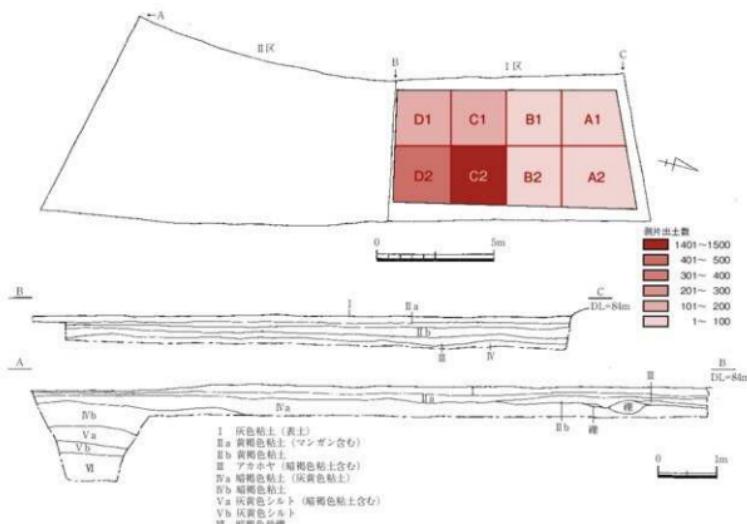
調査区名をIII区とする。まず、調査対象地域内に任意に1~2×2mのTPを46箇所設定して調査した。その結果TP 1・2・3・9・10・17・18・24・33・39では遺物包含層が確認されたため、TP47~56を設定して包含層の広がりを確認し、必要に応じてTPの面積を拡大して調査した。

第4次調査

まず、調査対象地域内に任意に1~2×2mのTPを8箇所設定して調査した。なお、調査区名は第3次



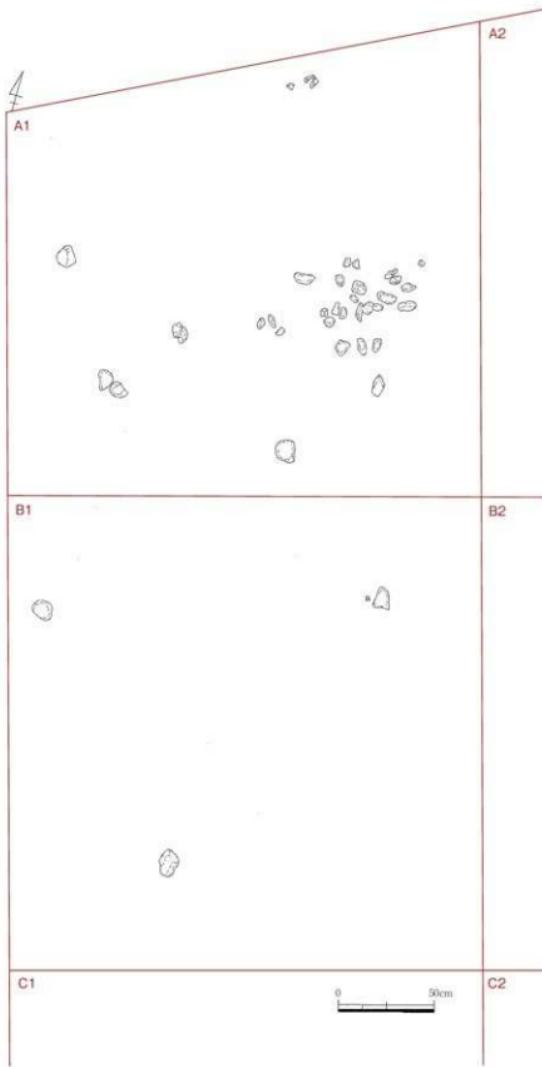
第25図 川口新階段跡位置図・調査区平面図



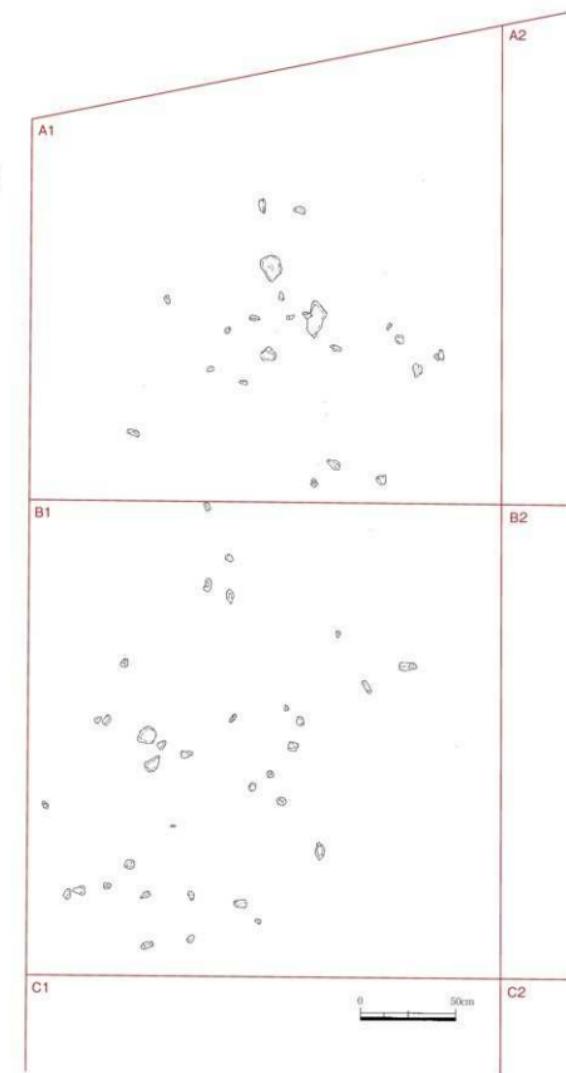
第26図 川口新階遺跡I・II区平面図・セクション図

表4 川口新階遺跡I・II区グリッド・層位別遺物出土状況一覧

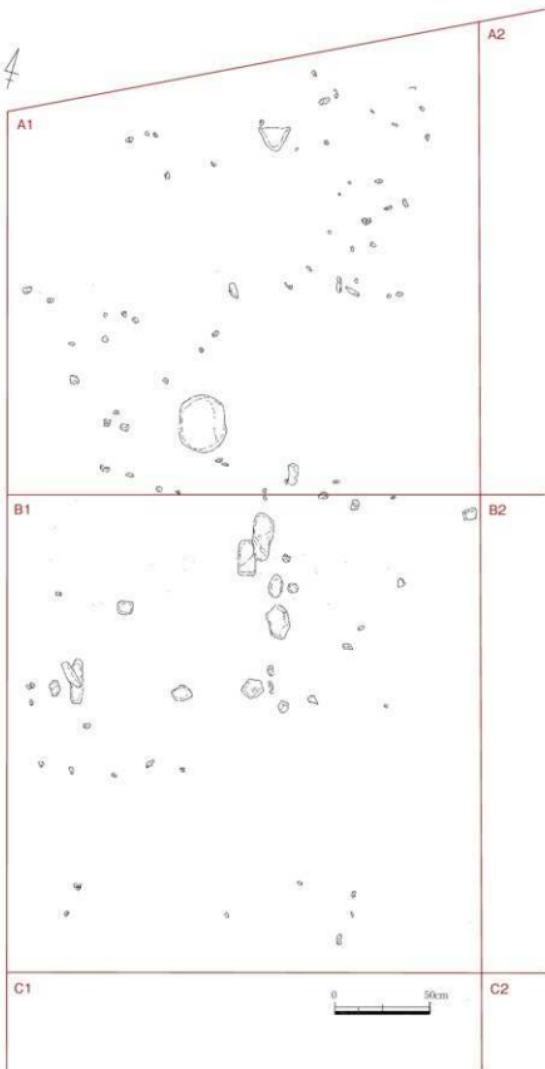
区	グリッド	層	珪質頁岩						チャート				砂岩			
			石核	長軸 :(cm)	尖頭器	石器	石器 未製品	楔形 石器	R.F.	洞片	洞片	石器	厚石	石斧	砾石	石皿
I	A1	II								2						1
I	A1	III								8		1				
I	A1	IV	1	5						50	2					2
I	B1	II														
I	B1	III	1	10						6						
I	B1	IV	2	5~10						37	2					
I	C1	II								5						
I	C1	III								1	50					
I	C1	IV	2	5~10						98		1				
I	D1	II								1						
I	D1	III								1	23					
I	D1	IV	2	10~15	1					3	100		1			
I	A2	I								8						
I	A2	II								18						
I	A2	III								17						1
I	A2	IV								1	40					
I	B2	I									1					
I	B2	II								9		1				
I	B2	III								8	1					
I	B2	IV								2	39	1	1			
I	C2	I									10					
I	C2	II									39					
I	C2	IV	6	5~20	2	2	1			2	1348		3			
I	D2	II									5					
I	D2	III									137					
I	D2	IV	1	10		1					275		1			
I	上記合計		15	5~20	4	3	2	0	9	2333	7	8	1	0	0	2
I	ルート・サブ・層		3	15	0	1	0	1	2	706	0	3	0	0	0	0
I	I区合計		18	5~20	4	4	2	1	11	3039	7	11	1	0	0	2
II	表様		22	10~20	0	0	2	0	2	309	1	1	0	2	1	0



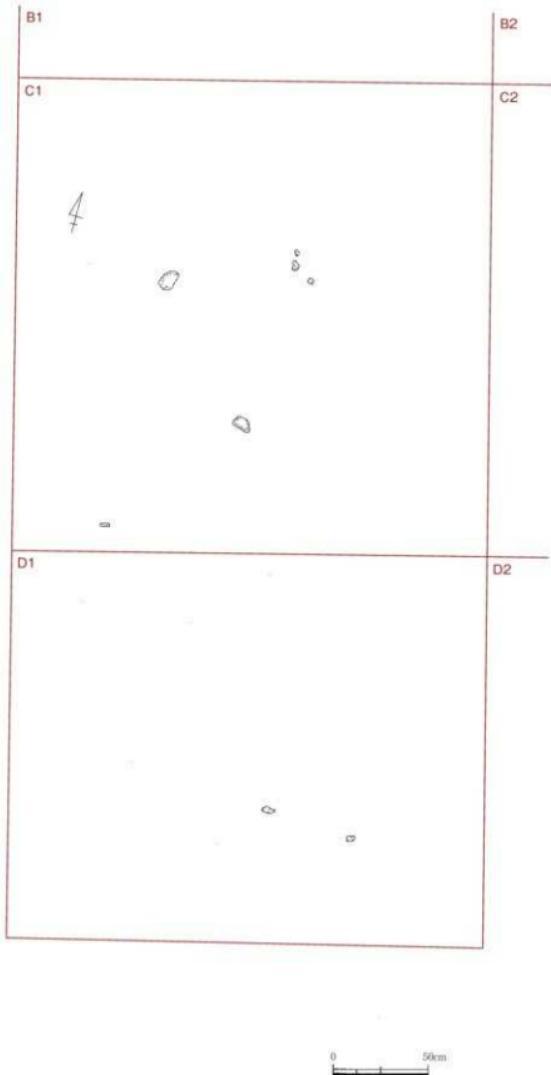
第27図 川口新墻遺跡I区A1・B1グリッドII層遺物出土状況図



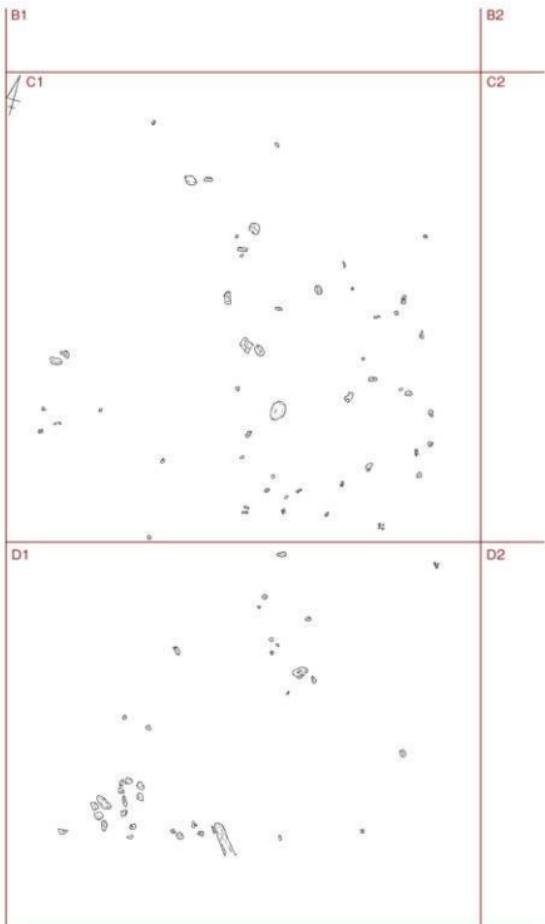
第28図 川口新階遺跡I区A1・B1グリッドⅢ層遺物出土状況図



第29図 川口新階遺跡I区A1・B1グリッドM層遺物出土状況図

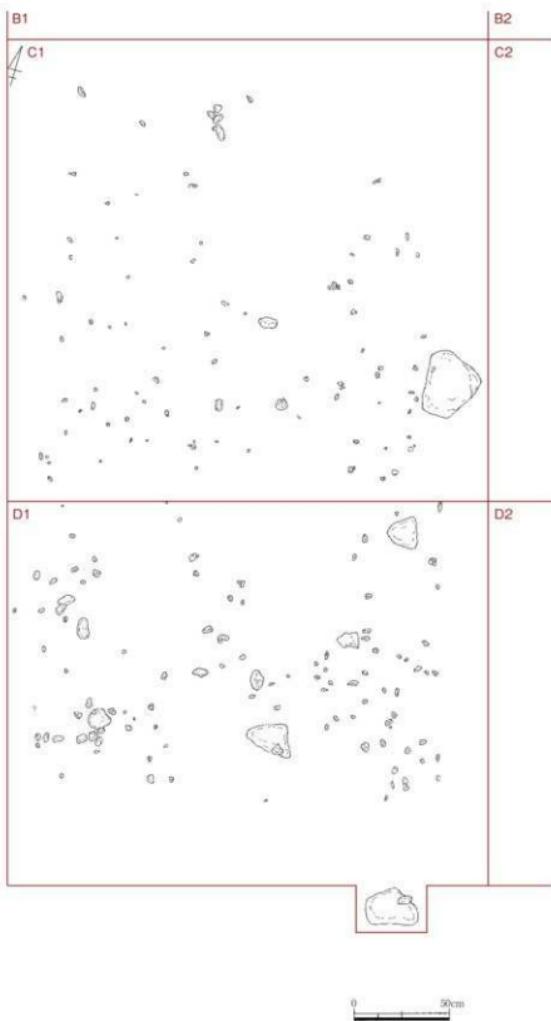


第30図 川口新階遺跡I区C1・D1グリッドII層遺物出土状況図

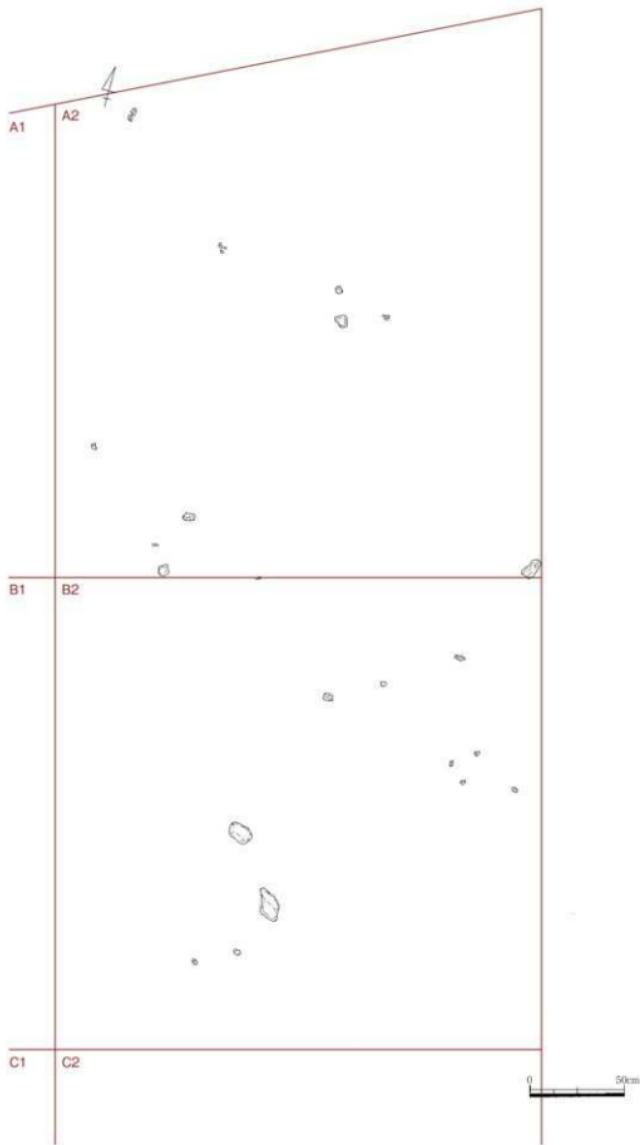


0 50cm

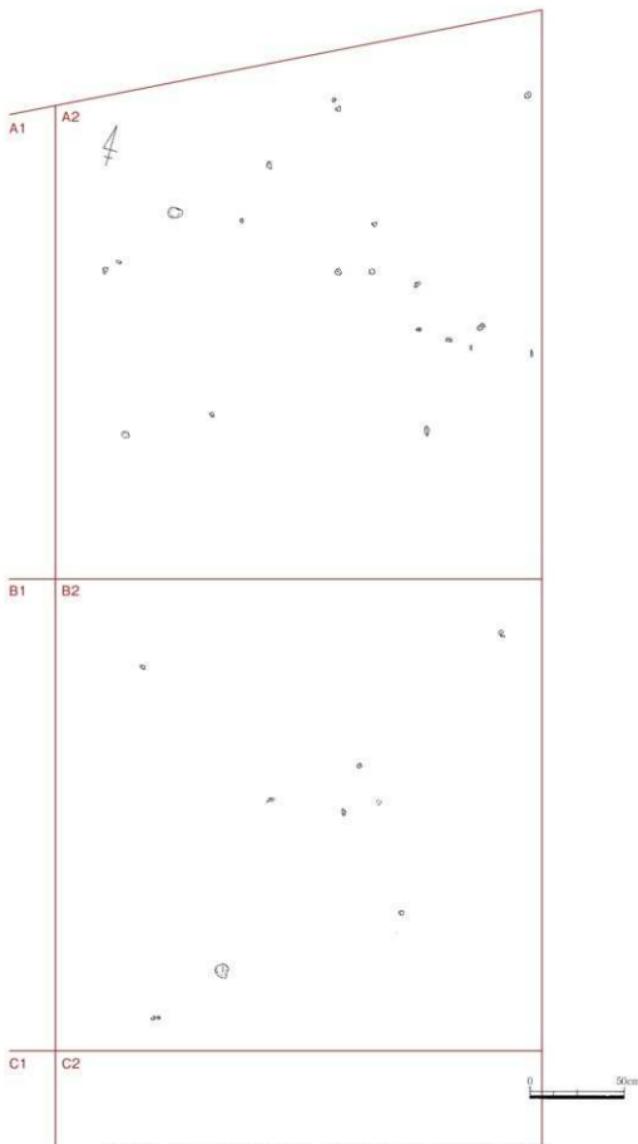
第31図 川口新墻遺跡I区C1・D1グリッドIII層遺物出土状況図



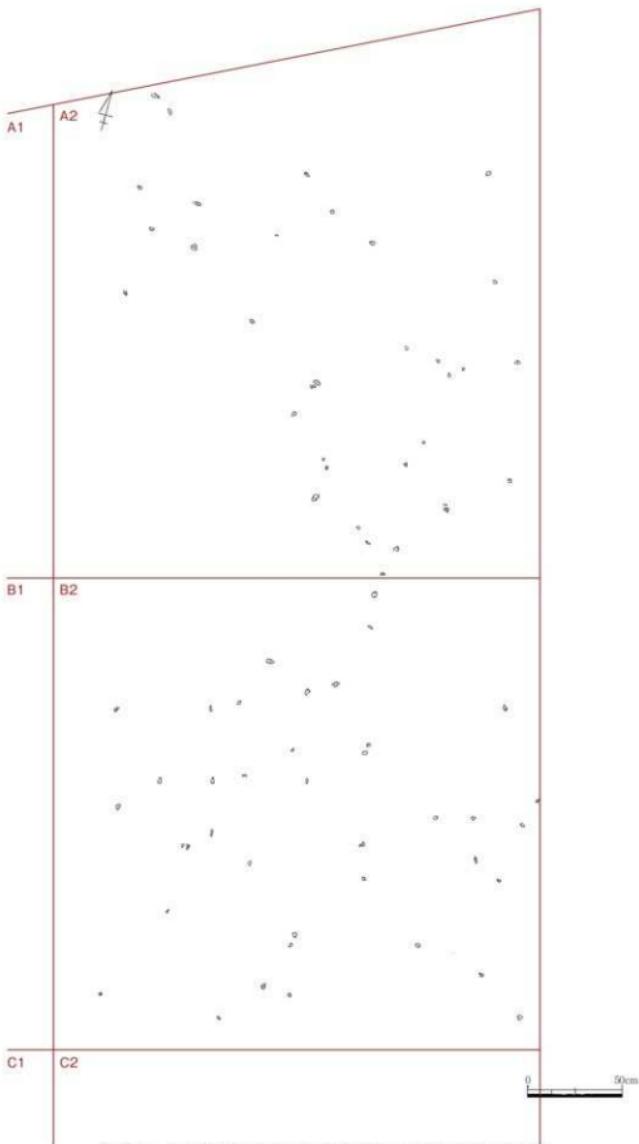
第32図 川口新階遺跡I区C1・D1グリッドM層遺物出土状況図



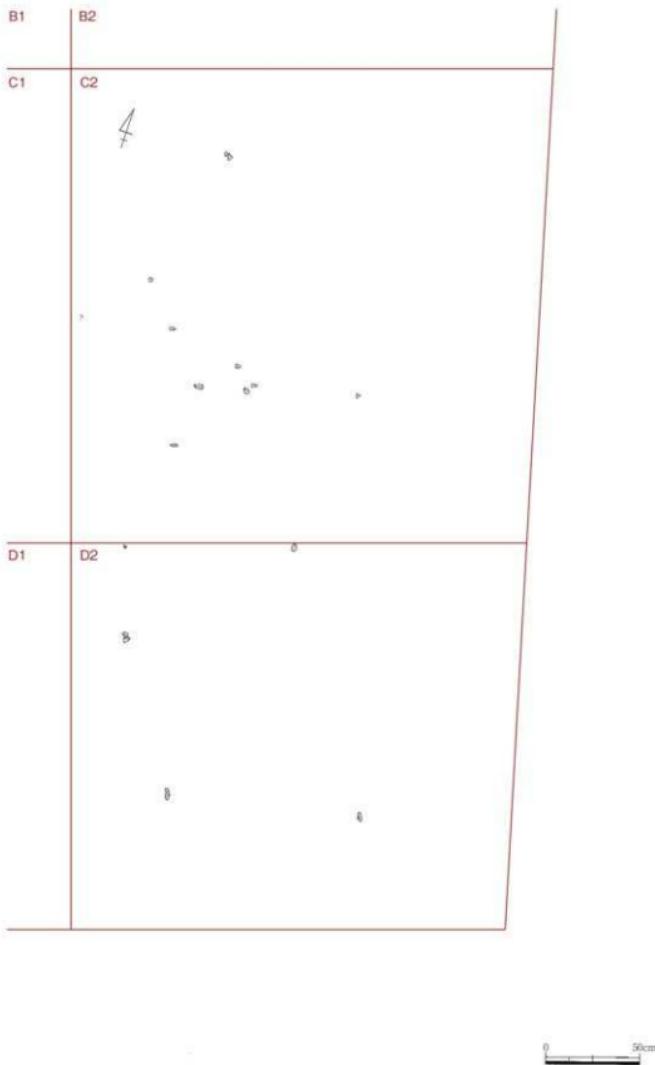
第33図 川口新階遺跡I区A2・B2グリッドII層遺物出土状況図



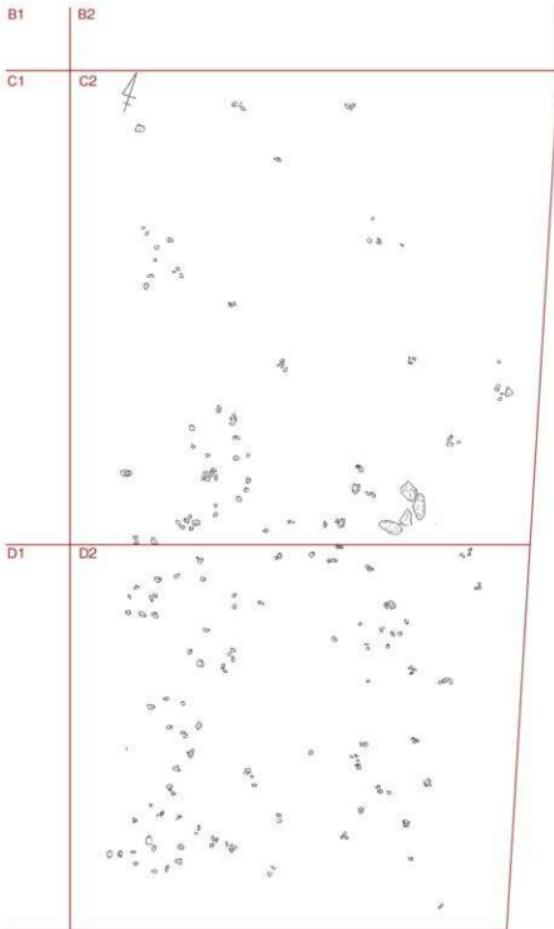
第34図 川口新階遺跡I区A2・B2グリッドIII層遺物出土状況図



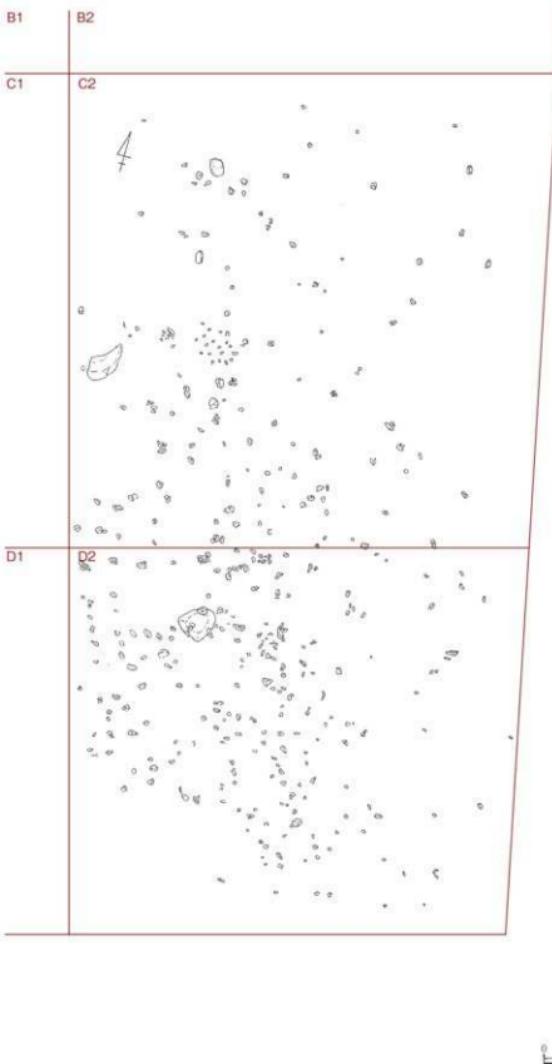
第35図 川口新墳遺跡I区A2・B2グリッドM層遺物出土状況図



第36図 川口新階遺跡I区C2・D2グリッドII層遺物出土状況図



第37図 川口新階遺跡I区C2・D2グリッドⅢ層遺物出土状況図



第38図 川口新町遺跡I区C2・D2グリッドM層遺物出土状況図

調査と同じⅢ区とし、TP番号については昨年度に調査したTP56に続くTP57以降の番号とした。

6. 基本層序

耕作土(①灰色粘土)・盛土(②黄褐色粘土(暗褐色粘土を含む))・自然堆積層(③アカホヤ④黄灰色シルト⑤暗褐色シルト(黄灰色シルトを含む)⑥暗褐色砂質シルト⑦暗褐色シルト⑧黄褐色粘土)となる。Ⅲ区の柱状図の土層については以上の丸番号を用いる。

7. 出土遺物・検出遺構

I 区

I層は耕作土である。Ⅱa層・Ⅱb層は本来同一の地層と思われるが、マンガンを多く含む上層と含まない下層に分層した。遺物を若干包含するが、下層からの混ざり込みの可能性が強い。Ⅲ層は下層のⅣa層に火山灰が混ざり込んだものと思われる。遺物を多く包含するが下層の遺物との時期差ははっきりととらえることはできない。Ⅳa層は最も多く遺物を包含する。Ⅳb層になると極端に遺物の量は減少し、これより下層で遺物を確認することはできなかった。

平面的には南の標高が高い部分ほど遺物の出土量が多くグリッド別ではC2グリッドからの出土が最も多かった。出土遺物のほとんどは剥片で石材は珪質頁岩がほとんどであるが、姫島産黒曜石・チャートを少量であるが含んでいる。石錐の未製品(27)やRF(二次加工剥片)も出土しているが、製品の割合は少ない。(25・26)は石錐であり、石材はいずれも珪質頁岩である。(25)は抉りが深く全体形は二等辺三角形で先端は鋭い。(26)は抉りが浅く小型である。(28・29・30・31・32)は尖頭器である。幅が広いものからやや狭いものまである。石材はこれもいずれも珪質頁岩である。

II 区

この区域については、掘削が終わったあとに、遺物を採取したため、小さい石器や剥片は失われた可能性が強い。それでも表のとおり多くの遺物を確認することができた。特に石核の出土数は多く、法量も長軸約20cmの大型のものがI区より多く出土した。製品としては磨製石斧1点(33)が出土している。

III 区

TP 1・2・3・9・10・17・18・24・33・39・48・53・54・55・58・61・62・64で遺物包含層等を確認した。詳細は以下のとおりである。

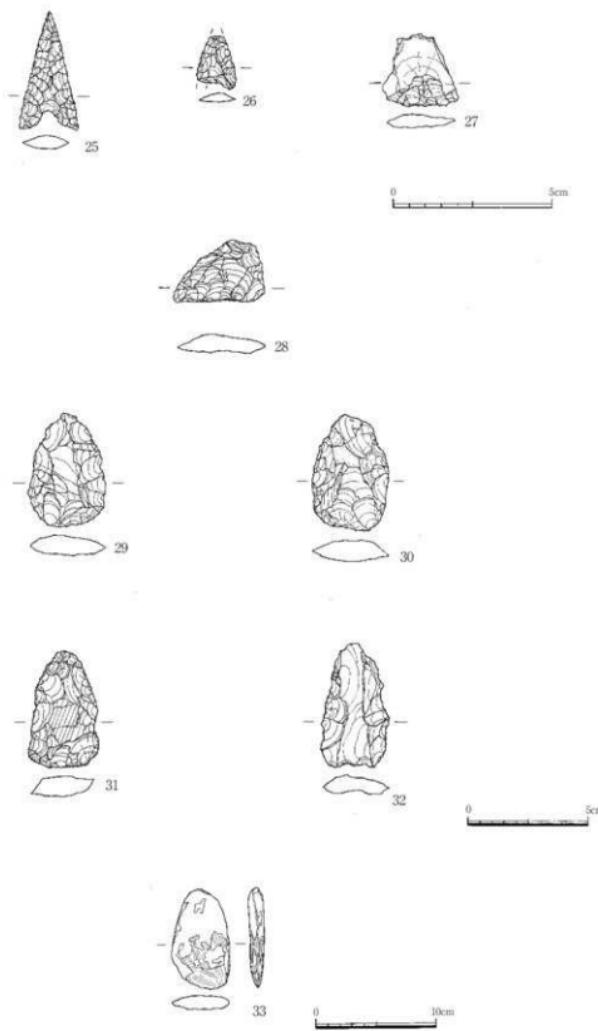
TP 1

第I層は耕作土である。近世陶磁器2点が出土した。第Ⅱ～V層は自然堆積層である。第Ⅱ層からは剥片35点が出土した。石材は珪質頁岩である。

TP 2

第I層は耕作土である。第Ⅱ～V層は自然堆積層である。第Ⅱ層からは剥片10点が出土した。石材は珪質頁岩である。

TP 3



第39図 川口新墳遺跡出土遺物実測図

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ～Ⅳ層は自然堆積層である。第Ⅱ層からは剥片5点が出土した。
石材は珪質頁岩である

TP9

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ～Ⅳ層は自然堆積層である。第Ⅲ層からは剥片1点が出土した。
石材は珪質頁岩である

TP10

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ～Ⅳ層は自然堆積層である。第Ⅳ層からは剥片10点が出土した。
石材は珪質頁岩である

TP17

第Ⅰ層は耕作土である。近世陶磁器2点が出土した。第Ⅱ～Ⅲ層は自然堆積層であるが、遺物を確認することができなかった。

TP18

第Ⅰ層は耕作土である。近世陶磁器1点が出土した。第Ⅱ～Ⅴ層は自然堆積層であるが、遺物を確認することができなかった。

TP24

第Ⅰ層は耕作土である。近世陶磁器2点・剥片1点が出土した。剥片の石材は珪質頁岩である。
第Ⅱ層は盛土である。第Ⅲ～Ⅴ層は自然堆積層であるが、遺物を確認することができなかった。

TP33

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ層は盛土である。第Ⅲ～Ⅴ層は自然堆積層である。第Ⅳ層からは剥片1点が出土した。剥片の石材は珪質頁岩である。

TP39

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ層は盛土である。第Ⅲ層は自然堆積層である。第Ⅲ層からは剥片1点が出土した。剥片の石材は珪質頁岩である。

TP48

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ層は盛土である。第Ⅲ～Ⅳ層は自然堆積層である。第Ⅲ層からは剥片が1点出土した。剥片の石材はチャートである。第Ⅳ層からは剥片1点が出土した。剥片の石材は珪質頁岩である。

TP53

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ～Ⅲ層は自然堆積層である。第Ⅱ層からは剥片2点が出土した。
剥片の石材は珪質頁岩である。

TP54

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ～Ⅲ層は自然堆積層である。第Ⅱ層からは剥片が7点出土した。
剥片の石材は6点が珪質頁岩で、チャートが1点ある。Ⅲ層からは剥片1点が出土した。剥片の石材は珪質頁岩である。

TP55

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ～Ⅲ層は自然堆積層である。第Ⅱ層からは剥片1点が出土した。

剥片の石材は珪質頁岩である。

TP58

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ～Ⅲ層は自然堆積層である。第Ⅱ層からは1点剥片が出土した。石材は珪質頁岩である。

TP61

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ層は盛土である。剥片1点が出土した。石材は珪質頁岩である。第Ⅲ～Ⅳ層は自然堆積層であるが、遺物を確認することができなかった。

TP62

第Ⅰ層は耕作土である。剥片1点が出土した。石材は珪質頁岩である。第Ⅱ～Ⅲ層は自然堆積層である。第Ⅱ層からは剥片1点が出土した。石材は珪質頁岩である。

TP64

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ～Ⅳ層は自然堆積層である。第Ⅱ層からは剥片2点が出土した。石材は珪質頁岩である。

表採した遺物

剥片を約30点表採した。

8. 調査成果

I区

地層は基本的に現在の地形と同じように、北に向かって緩やかに下方に傾斜しているが、調査区のなかではやや高い場所にあたる南側に遺物は集中している。遺物のほとんどは現地付近で採取可能な珪質頁岩製の剥片で、製品としては尖頭器・石鏟・叩石・石皿が出土しただけである。また、石器の未製品やRFが出土している。これは調査区が石器製作跡であったためであり、製品は外部に持ち出されたためであると思われる。銳利な剥片が散布したままの状態だったことも考え合わせると、居住空間は別の場所であった可能性が強いとみられる。

今回の調査で最も多く出土したのは剥片である。付近で採取可能な珪質頁岩のものが大部分である。南隣の畑では比較的大型の石核が多く採取されており石器製作跡であった可能性があるが、今回の調査範囲では小型の剥片が中心である。同じ石器製作跡でも石器の製作過程が異なっていたことも考えられる。剥片では他にチャート製のものもある。また、姫島産黒曜石製のものも含み、他の多くの高知県西部における縄文時代の遺跡と同じように九州との繋がりを想起させる。

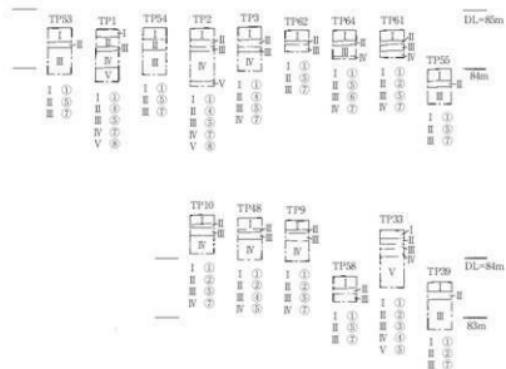
土器については細片のみの出土であるため、時期については判断が難しいが、金雲母を含んだ胎土等から縄文早期のものである可能性がある。

II区

前述した通りI区に比べて大型の石核が多く出土した点が注目される。荒削り等、石器製作過程が異なる作業場所であった可能性も考えられる。

III区

出土した剥片は珪質頁岩製がほとんどで、チャート製のものを僅かに含んでいる。馬ノ石地区で出土した遺物とはほぼ同じ時期であるとみられるため、縄文時代早期のものと考えられる。



第40図 川口新階遺跡Ⅲ区土層柱状図

第16節 今成遺跡

1. 調査場所

高知県幡多郡十和村川口字フチノ上ヘ・クリノキダ・中田・スタノモト・ヨケヂ・シモツルイ・モンビヨヲヂ

2. 調査区の概要

高知県遺跡詳細分布調査実施中の1987(昭和62)年1月9日に縄文土器片・石鎚・土師質土器片を表採して、縄文・室町時代の遺跡であると判断した。また、昭和50年代頃であるようだが、今成から白玉が出土したが、川口にある河内神社の神殿の下に埋めたという事を、土地の人が話していたようである。現在は大部分が水田で、一部は畑として利用されている。地形はほぼ平坦で緩やかに四万十川本流に向かって傾斜している。調査区の北から四万十川本流に注ぐ幾筋かの小川によって形成された谷が所在する。

1991(平成3)年10月14日～10月23日に、財團法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが調査主体となって、国道381号線改良工事に伴う試掘確認調査が実施された。以下この調査を第1次調査と呼ぶこととする。調査対象面積約1,000m²、試掘確認面積100m²で、約2×8mのTRを5箇所、約2×5mのTRを2箇所、計7箇所のTRを設定して調査を実施した。遺物が出土したTRの調査結果は下記のとおり報告されている。

TR 2

第I層は耕作土、第II層は床土である。第III層はアカホヤ層で、上部より珪質頁岩の剥片が4点、珪質頁岩の原石が1点出土している。遺構は検出されなかった。遺物は出土位置から流れ込みの可能性が強い。

TR 5

第I層は耕作土、第II層は床土である。第III層は搅乱層で、第IV層は地山である。出土遺物は、第I層より珪質頁岩製の石鎚1点とチャート剥片1点が出土している(巻末写真1参照)。また、第I層と第III層からは15世紀のものと思われる古瀬戸の鉢皿等、中近世の陶磁器類が数点出土している。

TR 6

第I層は耕作土、第II層は床土である。第III層以下は一部アカホヤ層がみられるもののすぐ地山となる。第I層よりチャート剥片が1点、I・II層より中近世の陶磁器類が数点出土している。遺構は検出されなかった。

今回の調査を以下第2次調査と呼ぶこととするが、調査区は遺跡範囲ほぼ全域とその周辺を含めた部分である。

3. 調査期間

第2次調査 平成13年11月26日～平成13年12月14日



第41図 今成遺跡位置図・調査区平面図

4. 調査面積

①調査対象面積 約26.178m² ②試掘確認調査面積 約152m²

5. 調査方法及び経過

まず、調査対象地域内に任意に1～2×2mのTPを69箇所設定して調査した。その結果TP43・48・49・53・55・59では遺物包含層が確認されたため、TP70～75を設定して包含層の広がりを確認し、必要に応じてトレンチの面積を拡大して調査した。

6. 基本層序

耕作土(①灰色粘土)・盛土(②灰褐色粘土(灰色粘土を含む))・自然堆積層(③暗褐色粘土④暗灰色粘土⑤暗黄褐色粘土⑥黄灰色砂⑦黄灰色粘土質シルト⑧黄灰色粘土⑨暗褐色シルト⑩暗褐色砂)。柱状図の土層については以上の丸番号を用いる。

7. 出土遺物・検出遺構

TP43・48・49・53・55・56・59・70・71・74で遺物包含層等を確認した。詳細は以下のとおりである。

TP43

第I層は耕作土である。第II～IV層は自然堆積層である。第III層からは縄文土器1点が出土した。

TP48

第I層は耕作土である。第II～V層は自然堆積層である。第III層からは縄文土器4点が出土した。

TP49

第I層は耕作土である。第II～V層は自然堆積層である。第III層からは縄文土器6点が出土した。

TP53

第I層は耕作土である。第II～V層は自然堆積層である。第IV層からは縄文土器約10点が出土した。

TP55

第I層は耕作土である。第II～IV層は自然堆積層である。第II層からは陶磁器1点・土師質土器2点が出土した。ともに近世の所産である。

TP56

第I層は耕作土である。第II層は盛土である。叩石(35)が出土した。石材は砂岩である。第III～IV層は自然堆積層である。

TP59

第I層は耕作土である。第II～III層は自然堆積層である。第III層からは縄文土器2点が出土し

た。

TP70

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ～Ⅳ層は自然堆積層である。第Ⅲ層からは縄文土器4点・磨製石斧(34)が出土した。(34)の石材は蛇紋岩である。

TP71

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ～Ⅳ層は自然堆積層である。第Ⅲ層からは縄文土器1点が出土した。

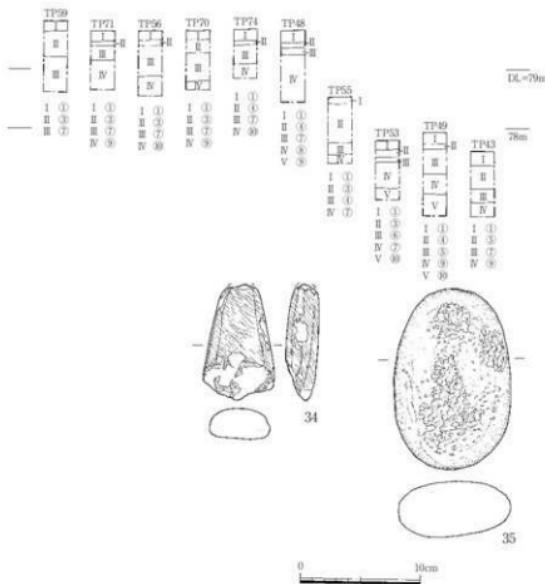
TP74

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ～Ⅳ層は自然堆積層である。第Ⅱ層からは縄文土器2点が出土した。

8. 調査成果

土器については細片のみであるが、胎土より縄文土器であるとみられる。磨製石斧は刀部を大きく破損している。その他叩石も出土している。

出土した縄文土器はいずれも小片で摩耗が激しい。しかし、磨製石斧が出土したTP70周辺については、良好な遺物・遺構等が残っている可能性が強い。



第42図 今成遺跡土層柱状図・出土遺物実測図

第17節 上広瀬遺跡

1. 調査場所

高知県幡多郡十和村廣瀬字宮ノ堀・宮ノ下堀・ヲキダバ・ナカ谷・シンヤ畠・ヲカミ子畠・ハケシ畠・シモダバ・イロクチ・上ミダバ・ヲヲタ・カゲヒラ

2. 調査区の概要

調査区は四万十川本流屈曲部右岸に発達した河岸段丘に立地しており、上広瀬遺跡の範囲を全部含んでいる。現在は大部分が水田で、一部は畠として利用されている。地形は四万十川に向かって傾斜している。上広瀬遺跡は1987(昭和62)年10月15日に実施した分布調査によって確認された遺跡であり、この時の調査では繩文土器片42点・チャート剥片1点・珪質頁岩剥片15点・叩石3点が表採されている。

2002(平成14)年度にはまず、字宮ノ堀・宮ノ下堀・ヲキダバ・ナカ谷・シンヤ畠・ヲカミ子畠・ハケシ畠・シモダバ・イロクチ・上ミダバ・ヲヲタ・カゲヒラにおいて十和中部地区中山間総合整備事業等の場整備に伴う試掘確認調査が実施されたが、本報告書ではこの調査を第1次調査と呼ぶこととする。しかし、調査期間中、菜花の作付け中等の理由で、一部調査を実施できない区域があった。

2003(平成15)年度には、第1次調査の時に作付け中のため調査できなかった廣瀬字宮ノ堀125-1、谷屋敷358-1、中スカ365-3、366-3、367、370-1、371-1、ミヤヂ386-7に相当する場所について調査を実施することとなった。本報告書ではこの調査を第2次調査と呼ぶこととする。

3. 調査期間

第1次調査 平成14年11月12日～平成14年11月22日

第2次調査 平成15年10月 6日

4. 調査面積

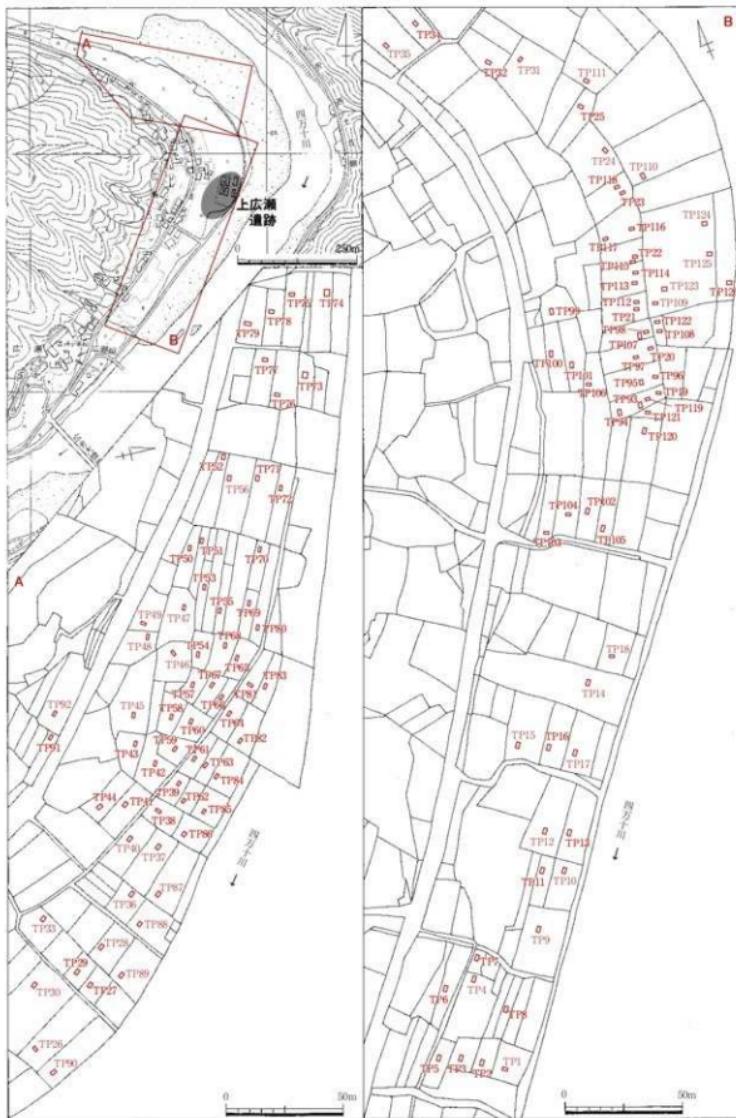
第1次調査 ①調査対象面積 約33,378m² ②試掘確認調査面積 約244m²

第2次調査 ①調査対象面積 約2,100m² ②試掘確認調査面積 約 4 m²

5. 調査方法及び経過

第1次調査では、まず、調査対象地域内に任意に1×2×2mのTPを92箇所設定して調査した。その結果TP19・20では遺物包含層が確認されたため、TP93～122を設定して包含層の広がりを確認して調査した。

第2次調査では、調査対象地域内に任意に1×1mのTPを4箇所設定して調査した。なお、第1次調査ではTP122まで設定して調査しているため、第2次調査は続きのTP123からTP番号をつけた。



第43図 上庄湖遺跡位置図・調査区平面図

6. 基本層序

耕作土(①灰色粘土)・盛土(②黄褐色粘土(灰色粘土を含む))・自然堆積層(③青灰色粘土④黄褐色粘土⑤灰色シルト⑥暗黃灰色シルト⑦黄灰色粘土⑧暗黄褐色粘土⑨暗褐色シルト⑩橙灰色シルト⑪赤橙灰色粘土)となる。柱状図の土層については以上の丸番号を用いる。

7. 出土遺物・検出遺構

TP19・20・93・95・107・108・112・119・122・124・125・126で遺物包含層等を確認した。詳細は以下のとおりである。

TP19

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ～Ⅳ層は自然堆積層であるが、第Ⅲ層からは縄文土器12点・石鎌(40)1点・剥片15点が出土している。(36)は縄文土器の口縁部であるが、やや肥厚されている。施文については磨耗しているためわからない。石鎌(40)の石材は珪質頁岩である。剥片の石材は1点がチャートで残りは珪質頁岩である。

TP20

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ～Ⅳ層は自然堆積層であるが、第Ⅱ層からは縄文土器片2点が出土している。

TP93

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ～Ⅴ層は自然堆積層であるが、第Ⅱ層からは剥片1点が出土した。石材は珪質頁岩である。第Ⅲ層からは縄文土器片4点・剥片2点が出土した。石材は1点が珪質頁岩、1点がチャートである。第Ⅳ層からは縄文土器片1点・剥片1点が出土している。石材は珪質頁岩である。

TP95

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ～Ⅳ層は自然堆積層であるが、第Ⅱ層からは縄文土器片1点、第Ⅲ層からは縄文土器片1点が出土している。

TP107

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ～Ⅳ層は自然堆積層であるが、第Ⅱ層からは縄文土器片9点・剥片3点が出土している。(37)は口縁部である。肥厚され端部は面を成し、刻目を施す。剥片の石材は珪質頁岩である。

TP108

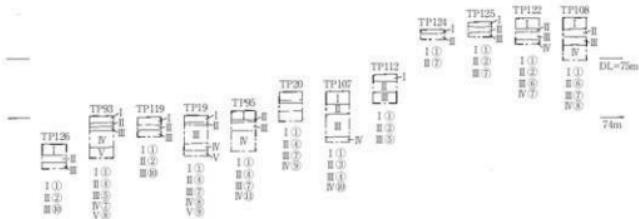
第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ～Ⅴ層は自然堆積層であるが、第Ⅱ層からは縄文土器片6点・剥片3点が出土している。(38)は小片であるが2本沈線を有する。剥片の石材は珪質頁岩である。

TP112

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ層は盛土であるが剥片1点が出土している。石材は珪質頁岩である。第Ⅲ層は自然堆積層であるが、遺物を確認することができなかった。

TP119

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ層は盛土であるが縄文土器3点・剥片2点が出土している。石材



第44図 上広瀬遺跡土層柱状図

は珪質頁岩である。第Ⅲ層は自然堆積層であるが、遺物を確認することができなかった。

TP122

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ層は盛土である。第Ⅲ～Ⅳ層は自然堆積層であるが、第Ⅲ層からは剥片1点が出土している。石材は珪質頁岩である。

TP124

第Ⅰ層は耕作土であるが、珪質頁岩の剥片が2点出土している。第Ⅱ層からは珪質頁岩の剥片が1点出土している。

TP125

第Ⅰ層は耕作土であるが、剥片が1点出土している。石材は珪質頁岩である。第Ⅱ層は盛土である。第Ⅲ層は自然堆積層であるが、遺物を確認することができなかった。

TP126

第Ⅰ層は耕作土であるが、石鎚の未製品(41)が1点出土している。石材は珪質頁岩である。第Ⅱ層は盛土である。第Ⅲ層は自然堆積層であるが、遺物を確認することができなかった。

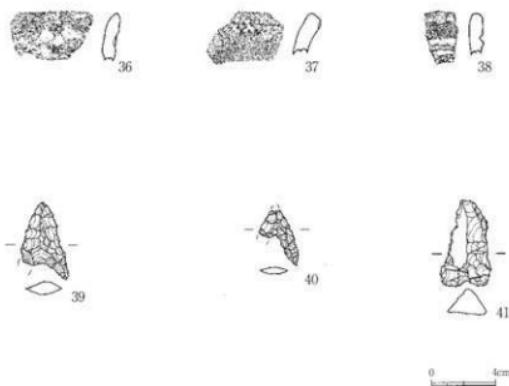
表採した遺物

縄文土器が約10点表採された。(39)は石鎚である。石材は姫島産黒曜石である。剥片は約110点表採されている。石材は1点がチャート、2点が姫島産黒曜石、その他は珪質頁岩である。

8. 調査成果

出土土器片はいずれも細片であるが胎土から縄文土器ではないかと思われる。石鎚・剥片はいずれも在地の珪質頁岩製である。

遺物が出土した地点は小字宮ノ堀・宮ノ下堀周辺に限られており、上広瀬遺跡の範囲もこの周辺に限定されるものと考えられる。小字宮ノ堀・宮ノ下堀周辺も河岸段丘上の傾斜地であるが、宮ノ下堀地区は現在の地形も周囲より低く、試掘の結果からも以前は小河川の経路であったと考えられる。宮ノ堀地区は現在でも周囲より高い地形となっており、小河川と四万十川本流に挟まれた微高地であったと考えられる。宮ノ下堀地区では宮ノ堀地区に隣接した場所から遺物が出土しており、宮ノ堀地区周辺の微高地が遺跡の中心だったと考えられる。出土土器片はいずれも細片であるが胎土から縄文土器ではないかと思われる。剥片は在地の珪質頁岩製のものが多いが姫島産黒曜石製のものも見られる。



第45図 上広瀬遺跡出土遺物実測図

第18節 中広瀬地区

中広瀬地区は試掘確認調査が実施された場所ではないが遺物が表探されたことが報告されているため、ここで節を設けて述べることとする。

1. 表探地点

高知県幡多郡十和村広瀬字アンメン250

2. 表探地点の概要

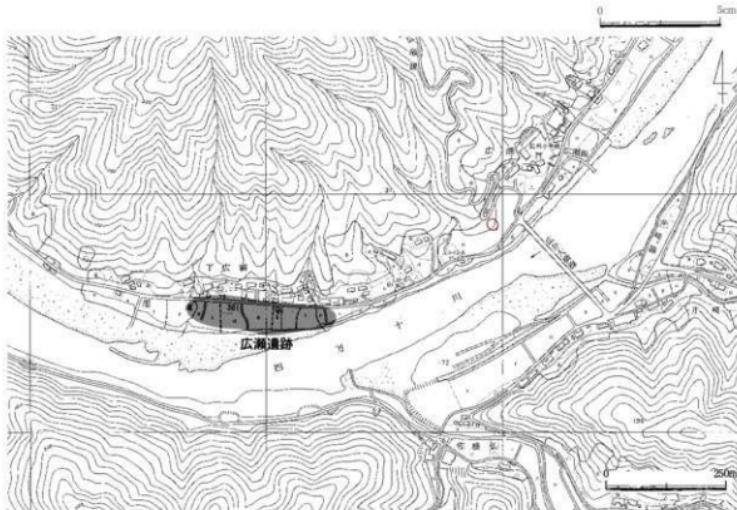
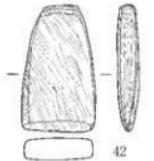
表探地点は四十川右岸に位置する高位の河岸段丘上である。下記の日時に十和村教育委員会によって表探されたことが届出られている。平成13年度に実施されたば場整備の際出土したが、遺物とは認識されず、後に教育委員会に持ち込まれたため確認された。

3. 表探年月日

平成14年3月4日

4. 表探遺物

磨製石斧(42)が1点表探されている。



第46図 中広瀬地区表探地点位置図・出土遺物実測図

第19節 広瀬遺跡

1. 調査場所

高知県幡多郡十和村廣瀬字谷屋敷・中スカ・ミヤヂ・ナカ畠・下モヤシキ・下原・アガリト・フタマタ・ナカホリ

2. 調査区の概要

調査区は四万十川本流屈曲部右岸に発達した河岸段丘に立地しており、広瀬遺跡の範囲を全域含んでいる。現在は大部分が水田で、一部は畑として利用されている。地形は四万十川に向かって傾斜している。

広瀬遺跡は1961(昭和36)年に、土地所有者谷春馬氏が畑を水田化するために土地を掘削した際に発見された遺跡である。その後、数名の考古学者等によって踏査が実施され、打製石斧、石錐、砥石、块状耳飾等が表採されている。

1963(昭和38)年1月3日～1月6日には高知県教育委員会によって学術調査が実施された。発掘調査地点は字谷屋敷354に相当する部分である。本報告書ではこの調査を第1次調査と呼ぶこととする。

1971(昭和46)年8月23日～8月28日には十和村教育委員会によって学術調査が実施された。発掘調査地点は字谷屋敷355、366に相当する部分である。本報告書ではこの調査を第2次調査と記すこととする。

広瀬遺跡では以上2度にわたる調査によって、縄文時代前期～後期の遺物が出土する遺跡として知られるようになる。これらの調査において出土した遺物は次のとおりである。前期の遺物としては、第2次調査において羽鳥下層III式と思われる土器が3片、轟D式と思われる土器が1片出土している。また、第1、2次調査とも彦崎ZI式と思われる土器が出土している⁽¹⁾。

縄文時代中期の遺物としては第1、2次調査で船元II式と思われる土器が出土している⁽²⁾。そして、第2次調査では里木II式と思われる土器が出土している。

縄文時代後期の遺物としては、第1次調査で中津式、福田K2式、宿毛式と思われる土器が包含層の下層から出土している。また、第1、2次調査とも平城式と思われる土器が出土している。第1、2次調査では西平式と思われる土器が出土しているが、ここで出土した西平式と思われる土器は、在地固有の特色を持つ土器様式を持つものであるとして広瀬(上層)式と呼ばれることもある。第1次調査では、西平式と思われる土器包含層から土偶の残片が出土している。

石器については、第1次調査で磨製石斧が1点、姫島産黒曜石製石錐1点、チャート製石錐7点、粘板岩製石錐1点、チャート製スクレイバー3点、粘板岩製スクレイバー1点、石錐11点、叩石6点、台石1点そしてチャート製剥片143点、水晶片1点が出土している。第2次調査では、磨製石斧が1点、頁岩製石錐4点、チャート製石錐4点、頁岩製スクレイバー6点、チャート製スクレイバー2点、石錐13点、叩石13点、砥石2点、台石3点、そして頁岩、チャート、姫島産黒曜石の石核が4点、剥片が215点出土している。姫島産黒曜石製の剥片は2～3点であったということである。



第47図 広瀬遺跡位置図・調査区平面図

1987(昭和62)年4月23日～4月24日には、個人が計画したは場整備に伴い、発掘調査が実施されている。本報告書ではこの調査を第3次調査と記すこととする。この調査については詳細な記録が残っていないが、実施された場所は第47図のとおりであるが、これも図面が残っていないため、地元の関係者に聞き取りを行って確認した位置である。現在当委員会に保管されている遺物はラベルの記述によれば、下記のとおりである。

4月22日分(発掘前日)

表探した遺物のみである。

表探遺物

縄文土器を3点表探した。(43・44)は石斧である。(43)は軽節型で全体を精緻に研磨する。石材は超塩基性岩である。(44)は刃部・基部を欠く。石材は御荷鉢綠色岩である。(45)は叩石である。表裏に2箇所ずつ集中的な敲打痕が残る。側面にも使用痕がみられる。石材は砂岩である。その他にも叩石1点を表探した。石材は砂岩である。(46)は楔形石器である。両端に加えて1側縁にも加工痕がみられる。(47)は剥片石器である。石材はサスカイトで、形状からスクレイバーの可能性もある。石皿が1点表探された。石材は砂岩である。剥片を約100点表探した。石材は1点がサスカイトで、残りは珪質頁岩である。

4月23日分(発掘第1日目)

TR名は不明であるが出土層位が記録されている。

第Ⅱ層

砥石1点が出土した。石材は砂岩である。石核が10点出土した。石材は珪質頁岩である。剥片が約120点出土した。石材は5点が頁岩、5点がチャートで、残りは珪質頁岩である。

第Ⅲ層

縄文土器が約50点出土した。石鎌(48)が1点出土した。未製品の可能性がある。石材は珪質頁岩である。凹石3点が出土した。1点は表裏2箇所ずつ、2点は表裏1箇所ずつ敲打痕の集中部がある。石材は砂岩である。叩石1点が出土した。石材は砂岩である。石核が10点、剥片が290点出土した。石材はチャートが6点で、残りは珪質頁岩である。RFは(49)を含み2点出土した。石材は珪質頁岩である。(49)は台形で周縁に二次加工が施される。

表探遺物

下段で縄文土器約10点を表探した。

4月24日分(発掘第2日目)

上部TR・下部東TR・下部西TRを設定して調査している。

上部TR

第Ⅲ層

打製石斧(50)が1点出土した。短く幅が広い。片面の敲打による調整が特に著しい。石材は珪質頁岩である。磨製石斧も1点出土したが刃部と基部を欠く。石材は砂岩である。RFが1点出土した。石材は珪質頁岩である。剥片が190点出土した。石材は1点がチャート、3点が頁岩、1点がサスカイトで、残りは珪質頁岩である。

下部東TR

第Ⅲ層

打製石斧(51)が1点出土した。短く幅が広い。片面の敲打による調整が特に著しい。石材は珪質頁岩である。(50)に形態が似る。

第Ⅳ層

縄文土器が約10点出土した。

下部西TR

第Ⅲ層

石核1点が出土した。石材は珪質頁岩である。剥片は約30点出土した。石材は2点が頁岩で、残りは珪質頁岩である。

出土した土器片は比較的大きい破片もあったが、無文であるため、時期を特定することはできなかった。

2002(平成14)年度にはまず、廣瀬字谷屋敷・中スカ・ミヤヂ・ナカ畠・下モヤシキ・下原・アガリト・フタマタ・ナカホリにおいて十和中部地区中山間総合整備事業等のは場整備に伴う試掘確認調査が実施されたが、本報告書ではこの調査を第4次調査と呼ぶこととする。しかし、調査期間中、菜花の作付け中等の理由で、一部調査を実施できない区域があった。

2003(平成15)年度には、第4次調査の時に作付け中のため調査できなかった廣瀬字谷屋敷358-1、中スカ365-3、366-3、367、370-1、371-1、ミヤヂ386-7に相当する場所について調査を実施することとなった。本報告書ではこの調査を第5次調査と呼ぶこととする。

註(1)(岡本健児1963)には第1次調査で出土した土器について「彦崎Z式土器に近似する」と記しているが、ここでは「竹管様のものを器面に引っ張りながら結節状に圧痕を押捺した」と表現しているところから彦崎Z式と記述した。

(2)(岡本健児1963)には第1次調査で出土した土器について「船元式土器に近似する」と記しているが、ここでは「隆蒂文に爪形」と表現しているところから船元Ⅱ式と記述した。

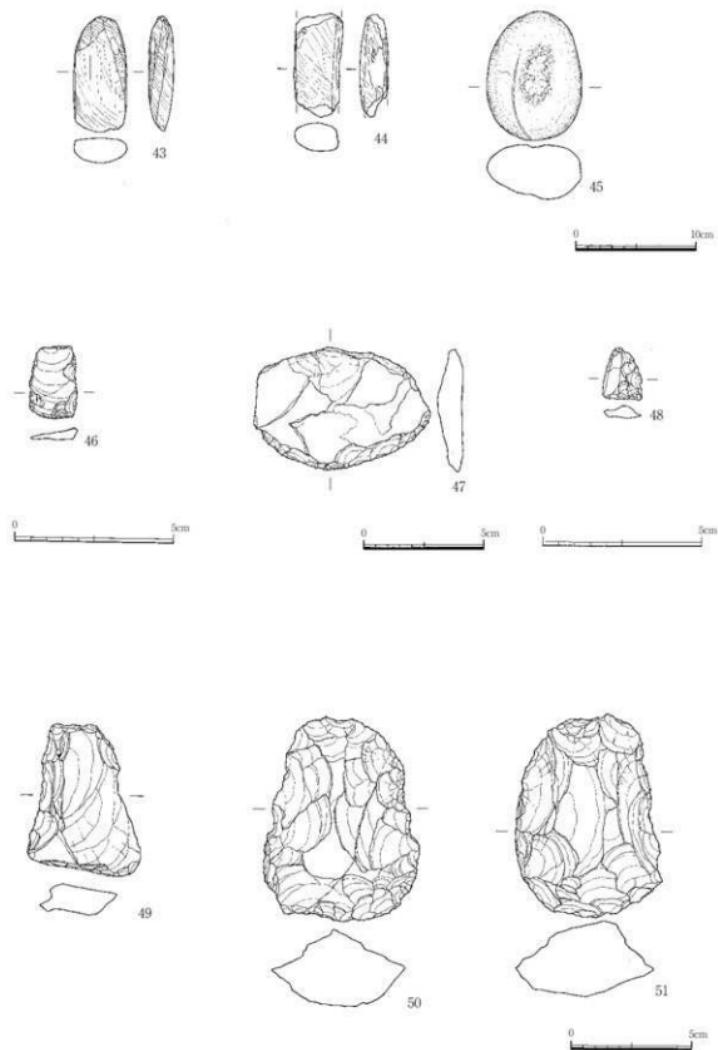
3. 調査期間

第4次調査 平成14年11月25日～平成14年12月11日

第5次調査 平成15年10月7日～平成15年10月8日

4. 調査面積

第4次調査	①調査対象面積	約 9,682m ²	②試掘確認調査面積	約52m ²
第5次調査	①調査対象面積	約 1,400m ²	②試掘確認調査面積	約 6 m ²



第48図 広瀬遺跡出土遺物実測図(1)

5. 調査方法及び経過

第4次調査では、調査対象地域内に任意に1~2×2mのTPを83箇所設定して調査した。

第5次調査でも、調査対象地域内に任意に1×1mのTPを6箇所設定して調査した。なお、第4次調査ではTP83まで設定して調査しているため、第5次調査では続きのTP84からTP番号をつけた。

6. 基本層序

耕作土(①灰色粘土)・盛土(②黄褐色粘土③暗褐色粘土(灰色粘土を含む)④灰色粘土(黄灰色粘土・褐黃灰色粘土・暗褐色粘土を含む))・自然堆積層(⑤灰色シルト(黄灰色シルトを含む)⑥褐黃灰色粘土⑦黄灰色シルト⑧灰色砂⑨褐黃灰色砂⑩褐黃灰色砂礫⑪灰色シルト⑫灰褐色シルト⑬暗褐灰色シルト⑭暗褐粘土質シルト⑮暗褐灰色シルト(10cm大の礫を含む)⑯暗褐灰色砂礫⑰橙灰粘土⑱明黄灰粘土(1cm大の礫を含む)⑲橙灰色シルト(10cm大の礫を含む)⑳暗橙灰砂礫)となる。柱状図の土層については以上の丸番号を用いる。

7. 出土遺物・出土遺構

TP 1・20・26・27・43・44・64・68・70・82・83・84・87・88・89で遺物包含層等を確認した。詳細は以下のとおりである。

TP 1

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ～V層は自然堆積層であるが、第Ⅳ層からは剥片1点出土した。石材は珪質頁岩である。

TP20

第Ⅰ層は耕作土であるが剥片1点が出土した。石材は珪質頁岩である。第Ⅱ層は盛土である。第Ⅲ～VI層は自然堆積層であるが、第Ⅲ層からは剥片1点が出土した。石材は珪質頁岩である。

TP26

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ層は盛土である。第Ⅲ～V層は自然堆積層であるが、第Ⅳ層からは剥片1点が出土した。石材は珪質頁岩である。

TP27

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ層は盛土である。第Ⅲ～V層は自然堆積層であるが、第Ⅳ層からは剥片1点が出土した。石材は珪質頁岩である。

TP43

第Ⅰ層は耕作土であるが、縄文土器片1点が出土した。第Ⅱ～IV層は自然堆積層であるが、第Ⅱ層からは剥片4点が出土した。石材は珪質頁岩である。

TP44

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ層は盛土である。第Ⅲ～VI層は自然堆積層であるが、第Ⅲ層からは縄文土器片3点が、第Ⅳ層からは縄文土器片2点・剥片2点が出土した。剥片の石材は珪質頁岩である。第V層からは縄文土器片8点・剥片1点が出土した。石材は珪質頁岩である。

TP64

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ層は盛土である。第Ⅲ～V層は自然堆積層であるが、遺物を確認することができなかった。廃土から剥片1点が確認された。石材は珪質頁岩である。

TP68

第Ⅰ層は耕作土であるが剥片4点が出土した。石材は珪質頁岩である。第Ⅱ～Ⅲ層は盛土であるが、第Ⅱ層からは石鏃(59)1点・剥片17点が出土した。(59)は側縁がやや直線的であるが、先端は鋭角を成さない。抉りも浅いと思われる。石材は姫島産黒曜石である。剥片の石材は珪質頁岩である。第Ⅲ層からは剥片36点が出土した。石材は珪質頁岩である。第Ⅳ～VI層は自然堆積層であるが、第Ⅳ層からは石鏃(57・58・60)3点・剥片約320点・叩石1点・繩文土器片17点が出土した。(57・58)は小型である。一方の脚部を欠くが、いずれにしても抉りは浅い。(60)も小型であるが先端が丸い。周縁以外の加工は少ない。(57・58・60)の石材は珪質頁岩である。剥片の石材は、9点がチャートで、残りは珪質頁岩である。第V層からは繩文土器片1点・石鏃(52)1点・剥片28点が出土した。(52)は形状が二等辺三角形で抉りはほとんどない。側縁は直線的だが先端部でやや丸い。石材は珪質頁岩である。

TP70

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ層は盛土である。第Ⅲ～VI層は自然堆積層であるが、第V層からは剥片6点が出土した。石材は珪質頁岩である。

TP82

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ～Ⅲ層は盛土であるが第Ⅱ層からは石鏃(53)1点出土した。先端部以外を欠く。側縁は直線的だが、先端部近くは丸くなるものであると思われる。石材は珪質頁岩である。剥片は20点出土した。石材は18点が珪質頁岩、2点がチャートである。第Ⅲ層からは剥片約80点が出土した。石材は2点がチャートで残りは珪質頁岩である。第Ⅳ～VII層は自然堆積層であるが、第Ⅳ層からは石鏃(55)1点・石核3点・楔形石器(62・63・64・65)4点・剥片約550点・繩文土器片約90点が出土した。(55)は小型で脚部も小さく抉りは浅い。(55・62・63・64・65)の石材は珪質頁岩である。石核の石材はチャートで、剥片の石材はチャート5点で残りは珪質頁岩である。第V層からは石鏃(56・61)2点・叩石2点・楔形石器3点・石核3点・剥片約420・繩文土器片52点が出土した。(56)は小型で、抉りを意識して加工しているが浅い。先端を欠く。(61)は大型で全体形が二等辺三角形である。抉りはほとんどない。石材は石鏃・楔形石器・石核が珪質頁岩である。叩石は砂岩である。剥片は3点がチャートで、残りが珪質頁岩である。第VI層からは石鏃(54)1点・叩石(66・67)3点・剥片54点・繩文土器片26点が出土した。(54)は一方の脚部を欠くが、いずれにしても抉りは深いものではないと思われる。(66)は片方の面に2箇所敲打痕が集中する。(67)は全体の半分近くを欠くため、敲打痕の集中部は1箇所だが、完形であれば(67)と同じ可能性がある。石材は(54)が珪質頁岩で、(66・67)は砂岩である。剥片は1点がチャートで、残りが珪質頁岩である。

TP83

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ層は盛土である。第Ⅲ～VI層は自然堆積層であるが、第Ⅲ層から

は剥片10点・縄文土器片4点が出土した。剥片の石材は珪質頁岩である。第IV層からは叩石(68)1点・剥片13点・縄文土器片6点が出土した。(68)は全体の半分以上を占くと思われ、1箇所敲打痕が集中するが、完形の場合、他の叩石の形態から考えて、2箇所ある可能性がある。石材は砂岩である。剥片の石材は珪質頁岩である。第V層からは剥片20点が出土した。

TP84

第I層は耕作土である。第II層は盛土であるが、珪質頁岩の剥片が1点出土した。第III～V層は自然堆積層であるが、第V層からは縄文土器片2点、チャートの剥片1点が出土した。

TP87

第I層は耕作土である。第II層は盛土であるが、縄文土器片1点・珪質頁岩の剥片12点・チャートの剥片1点が出土している。第III～V層は自然堆積層である。第III層は縄文土器片1点・珪質頁岩の剥片10点・チャートの剥片1点が出土している。第IV層は珪質頁岩の剥片3点が出土している。

TP88

第I層は耕作土である。第II層は盛土であるが、珪質頁岩の剥片2点が出土している。第III～V層は自然堆積層である。第III層は珪質頁岩の剥片3点が出土している。

TP89

第I層は耕作土であるが、珪質頁岩の剥片2点が出土している。第II層は盛土であるが、珪質頁岩の剥片4点が出土している。第III～V層は自然堆積層である。第III層は珪質頁岩の剥片2点が出土している。第IV層は珪質頁岩の剥片1点が出土している。

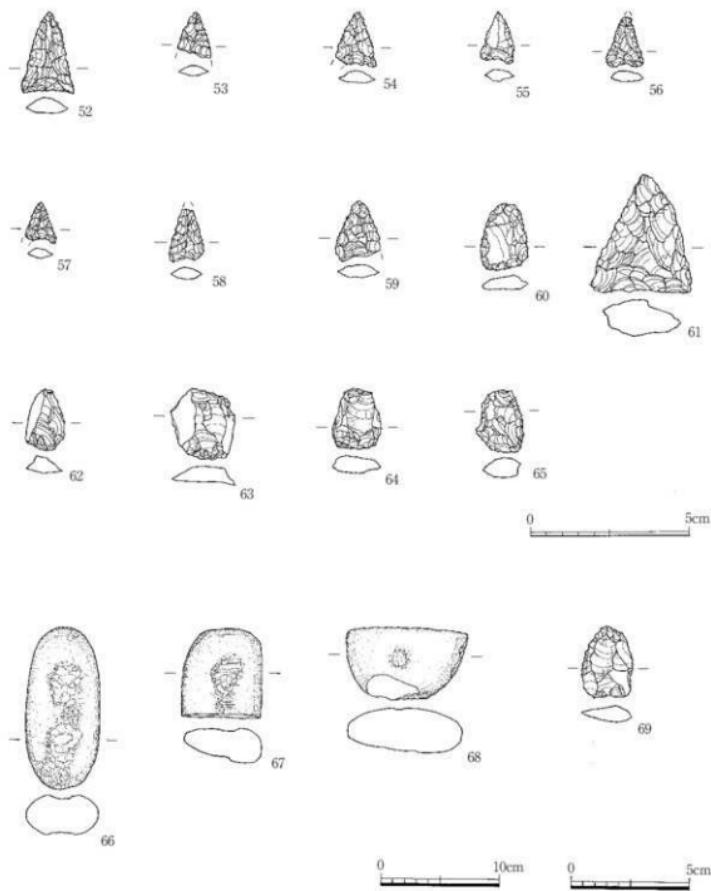
表採した遺物

縄文土器は1点表採されている。(69)は石鏃である。1側縁の一部を切断後再加工している。側縁が丸く、抉りも浅い。石材は珪質頁岩である。石錘が2点、砥石が1点表採されている。石材は砂岩である。石核は1点表採されている。石材は珪質頁岩である。剥片は約100点表採されており、石材は1点がサヌカイト、1点がチャートであり、残りが珪質頁岩である。

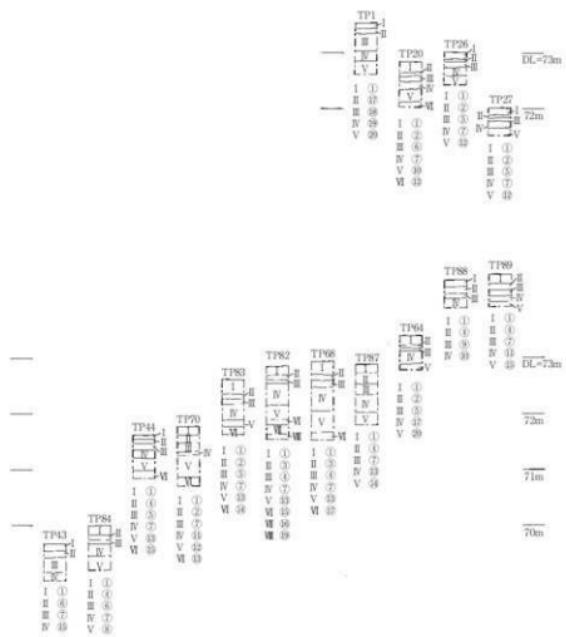
8. 調査成果

土器については細片のみであるが、胎土より縄文土器であるとみられる。石器は剥片・石核・石鏃の量が多い。石鏃は1点が姫島産黒曜石製で、残りは珪質頁岩製である。石鏃は小型で似た型のものが多くみられる。

字谷屋敷周辺が最も出土遺物の密度が高い場所であることを確認した。特にTP68・82では多くの剥片・石核とともに石鏃・叩石が出土しており、この周辺が石器製作のための空間であったことをうかがうことができる。石鏃は10点確認しているが、比較的狭いTPからの出土であることを考えると全体的には相当数のものが埋蔵されていると思われる。周辺では石錘が表採されており、人々が漁を営んで生活をしていた様子を窺うことができる。



第49図 広瀬遺跡出土遺物実測図(2)



第50図 広瀬遺跡土層柱状図

第Ⅲ章 まとめ

第1節 剥片石器の石材について

十和村の遺跡から出土する剥片石器の石材は、在地のものとしては珪質頁岩・チャートが多く、搬入の石材としては姫島産黒曜石・サスカイトがみられる。在地のものでは県西部に多い珪質頁岩が、搬入のものでは九州からの姫島産黒曜石が卓越している。石器の石材として用いられる頁岩については、様々な表記のものが使われている。流紋岩という表記をしているもので、現在では珪質頁岩と表記するような石材もある。報告書から頁岩系と思われる石材を主に使用している遺跡をあげたが、ほとんどが県西部の遺跡である。女川遺跡の凝灰質頁岩については越知町横倉山原産と思われると報告されているが、後はほとんどが四万十川流域の遺跡である。珪質頁岩は二酸化珪素を含む泥が固まってできた岩石であるが、十和村で石材として使われる頁岩は熱変成によってホルンフェルス化したものであると思われる。変成が進まず黒っぽいものは単に頁岩と呼称される場合が多い。熱変成を受けるためには、溶岩との接触等、熱による影響を受けなければならないが、現在は活火山が存在しない四国にもかつては火山活動が続く時期があったようである。面河山・三本杭・篠山北側・柏島周辺・沖ノ島・足摺岬南端には火山活動の影響を示す火成岩が分布している。その周辺は熱の影響でホルンフェルスが発達しやすいが、四国では高知・愛媛西南部県境付近や柏島周辺によく分布している。珪質頁岩の原産地遺跡であるナシケ森遺跡はその範囲内と思われる。長沢川の流域については地質図ではホルンフェルスの分布範囲とはなっていないが、川口新階遺跡の周辺は特にホルンフェルスが多く、細い溶岩の貫流等によって局地的に熱変成が行われた可能性がある。

表5 頁岩系の石材が主に使用される遺跡

遺跡名	所在市町村	石材の呼称	頁岩系の石材を使用した石器の器種
女川遺跡	越知町	凝灰質頁岩	石錐・スクレイバー・尖頭器
根崎五反地遺跡	鹿川町	珪質頁岩	剥片
天ノ川遺跡	鹿川町	珪質頁岩	石錐・剥片
木屋ヶ内遺跡	大正町	頁岩	石錐・楔形石器・RF・UF・スクレイバー・刃器・石錐・鋸器・抜状石器
轟遺跡	十和村	珪質頁岩	剥片
中丸遺跡	十和村	珪質頁岩	剥片
小ノ田・カミヒコ遺跡	十和村	珪質頁岩	石錐・剥片
川口新階遺跡	十和村	珪質頁岩	石錐・石核・剥片・尖頭器
十川駁場崎遺跡	十和村	珪質頁岩等	尖頭器・楔形石器・石錐・剥片・石核・RF
川口ホリキ遺跡	十和村	頁岩	石錐・剥片
江川中嶽遺跡	西上佐村	頁岩	石錐・楔形石器・石匙・尖頭削器・石錐・抜状石器・鋸器・尖状石器
伊豆ヶ谷遺跡	西上佐村	珪質頁岩	石核
車木遺跡	西上佐村	頁岩	石錐・楔形石器・スクレイバー・石核
下家地古吉遺跡	西上佐村	珪質頁岩	石錐・スクレイバー
大宮・宮崎遺跡	西上佐村	頁岩	石核・スクレイバー・石錐
三里遺跡	中村市	頁岩	石核・剥片
竜ヶ遺跡	大月町	黑色頁岩	ナイフ形石器
ナシケ森遺跡	大月町	珪質頁岩	剥片
			石核・剥片・楔形石器・石錐・尖頭器・ナイフ形石器

第2節 石器について

調査等で今回確認した石器は石鎌・尖頭器・トロトロ石器・石匙・石斧・石錘・叩石・石核・剥片である。以下器種別に記す。

1. 石鎌

石鎌が出土した遺跡は小ノ田・カミヒラ遺跡・川口新階遺跡・上広瀬遺跡・広瀬遺跡がある。石器の場合、土器に比べて形状の変化を捉えることが難しいが、先人の研究の成果を参考にしてでき得る限りの検証をしたい。

西南四国における石鎌に関する編年について論じたものでは(1967木村剛朗)によるものがある。高知県西南部出土の石鎌を、出土した土器によって判断した遺跡の時期を基に編年的に分類したものである。資料の多くが表採で土器との共伴関係が不明なものが多いうことを前提にしながらも、時期毎の様相を捉えようとしたものであるが、これによると以下の傾向が指摘されている。基部の抉りについては、早期は鋸形と呼ばれる深いものがみられ、前期までは抉りが深いものが一般的であるが、中期から浅いものが現れ、後期はこれが一般的となり、晚期にはほとんど基部が直線的なものになる。早期には大型の石鎌が含まれる。前期までは側縁が直線的で先端が鋭いものがみられるが、中期以降、両脚が広がるものが多くみられるようになる。後期以降製法が粗雑化し、晚期になると周辺のみを加工したものが主体を成すようになる。同氏はその後、(1968木村剛朗)(1969~1970)においてもこれらの傾向がみられることを記している。以降の発掘調査でも本県の縄文時代の遺跡では優良な一括資料に恵まれることが少なく新しい見解が生まれることがほとんどなかったこともあり、同氏の述べた傾向は多少の例外を含みながら概ね当てはまるものと考えられている。

早期のものと思われる大形の石鎌についてはその後も着目されており、(1996前田光雄)では十川駄場崎遺跡や木屋ヶ内遺跡で出土した重量1g前後またはそれ以上の大形石鎌について、その他の石鎌とは異なる用途に用いられる可能性も示唆している。また、(2000前田光雄)では0.1~0.2gの小形石鎌が松ノ木遺跡での出土例をあげて後期に伴う可能性を記しているが、木屋ヶ内遺跡で早期に伴う出土例があることも示唆している。一方、松ノ木遺跡では尖頭器(柳葉)状の石鎌が確認されており、北川遺跡での出土例も踏まえて、後期に伴う可能性が強いと述べられている。

さて、今回の一連の試掘確認調査で出土した石鎌についてその形態等によって下記のように分類した。

第1類

全体形が二等辺三角形で抉りも深い。鋸形鎌と呼称することができる。先端は鋭利で、側縁は直線的である。川口新階遺跡出土の(25)が相当する。

第2類

全体形が二等辺三角形で抉りも深いが、第1類に比べて先端の角度が鈍く丸い。小ノ田・カミヒラ遺跡出土の(20)、上広瀬遺跡出土の(39)が相当する。広瀬遺跡出土の(59)が相当する。

第3類

全体形が二等辺三角形で抉りが特に深く、両脚が長い。上広瀬遺跡出土の(40)が相当する。

第4類

平基式のもの。抉りがほとんどみられないもの。広瀬遺跡出土の(52)が相当する。広瀬遺跡出土の(53)は同遺跡出土の(52)に似るためここであげておくが、基部を欠くため、第2類の可能性もある。

第5類

側縁が曲線的なもの。広瀬遺跡出土の(69)が相当する。広瀬遺跡出土の(60)は先端が丸く、全く鋭さがない。抉りもない。法量から石鎚と考え分類した。

第6類

小型のもの。ここでは0.6g以下のものを類別した。抉りは浅いもの、またはほとんどないものがほとんどである。川口新階遺跡出土の(26)が相当する。広瀬遺跡出土の(54・55・56・57・58)が相当する。

第7類

大型のもの。広瀬遺跡出土の(61)が相当する。重量があるため、石鎚として利用可能か疑問視されるくらいである。尖頭器と分類し得るものである。(1996前田光雄)で大型石鎚と呼んだものに相当すると思われる。

第8類

柳葉状のもの。尖頭器状のものと呼称されることもあるが、第7類等との混同を避けるために以上の呼称をここでは用いる。前述のとおり縄文時代後期の土器が出土する遺跡でみられる傾向がある。小ノ田・カミヒラ遺跡出土の(24)が相当する。縄文時代後期のものと思われる土器片と共に伴している。

第9類

その他の形状のもの。地吉本村地区で表採した(5)は細長く、尖頭器と形容することも考えられるものである。

第10類

未製品のもの。川口新階遺跡出土の(27)は片方の側縁を加工した痕がみられる。上広瀬遺跡出土の(41)は抉りを意識した加工がみられる。広瀬遺跡出土の(48)もこれに相当するものと思われる。

前述したように、石鎚の形態は第1類のように抉りの深いものから、第4類のように抉りが浅いものに変化していく傾向があるという見方があるが、今回の調査では石鎚の出土数も限られ、出土した石鎚と共伴する土器にも恵まれなかつたため、はっきりとした傾向はつかめなかつた。第6類については、石鎚の出土層位はすべて同じではないが、広瀬遺跡で多くのものが出土している。このような小型の石鎚が意識して作られる可能性は考えられる。第7類についても石鎚としての利用に疑問を持たざるを得ない法量であり、過去の調査でも同様のものが出土していることから、特定

の目的のために、ある程度一貫して作られている器種である可能性があると思われる。第8類についても、特異な形状であることから、同様の可能性が考えられる。

2. 尖頭器

ここでいう尖頭器とは本報告書で設定した石鎚の第7～9類のものとは別のもので、川口新階遺跡出土の(28・29・30・31・32)が相当する。側縁を中心に全体的に加工が施され、幅が広く薄い。先端は決して銳利ではないが、意識して作られる。基部に抉りはあまり認められない。これらの石器は形状・法量ともに近似しており、やや幅広いもの、やや細長いものという違いは認められるが、ほぼ同じ規格のものを意識して作ったものと思われる。法量から、石鎚としての使用は難しいと思われるため、形状から「尖頭器」とした。川口新階遺跡は石器製作地であったと思われ、石核・剥片が多いが、製品は持ち出されたと思われ、あまりみられない。検討する個体数が多いとはいえないで連断は避けなければならないが、そういう条件の中では多く出土していると思われる。偶然製品が持ち出されなかったのか、それとも製品としての基準が厳しいため製品として認められなかつたのかは不明である。

3. トロトロ石器

屋敷地区で表採された(1)が相当する。トロトロ石器は石鎚と基本的には石鎚と同様の形態をしているが、丸い先端部、曲線的な側縁、外側に開く脚部等独特の形状をしており、これらの特徴を共有する石器が出土するため、石鎚とは別の器種として呼称されている。透明性が高いチャート等が石材である場合が多い。西南四国のトロトロ石器については(1995木村剛朗)に集成され、高知県内では下記の遺跡からの出土が紹介されている。

奈路遺跡(十和村)1点・十川駄場崎遺跡(十和村)5点・双海本駄場遺跡(中村市)1点・平野(平野茶園)遺跡(中村市)1点・下益野B地区遺跡(土佐清水市)1点

特異な形狀から宗教的な儀礼に利用されたという説もある。

4. 石匙

轟遺跡で1点(4)が出土している。県内の石匙については(2000前田光雄)に集成されており、(2003山崎真治)では編年試案が発表されている。同遺跡の石匙は綱型で、片面だけであるが、両側縁に加工が施されている。県内の石匙は石材としてサヌカイトを志向する傾向が強いが、これは頁岩製である。アカホヤから出土し、纖維混入土器と同じ土層から出土した。縄文時代前期のものである可能性が強いと思われる。

5. 石斧

小ノ田・カミヒラ遺跡で1点(21)、川口新階遺跡で1点(33)、今成遺跡で1点(34)、中広瀬地区で1点(42)、広瀬遺跡で4点(43・44・50・51)出土、または表採されている。(50・51)は打製石斧で残りは磨製石斧である。(21)は定角式で、片面に抉りがみられる。(33)は扁平である。(34・

(42)も定角式であるが(42)は小型で加工が精緻であり、実用が疑われるくらいである。(44)は乳房状磨製石斧の一部であると思われる。(43)は全体形が輕節形、断面が蒲鉾形である。縄文時代早期のものと思われる。

6. 石錘

小ノ田・カミヒラ遺跡で出土した(22)を図示しているが、その他でも広瀬遺跡で表採されている。蝶石錘については重量等の関係から紡錘用と考える説もあるが、(2002中尾篤志)が民俗例や中四国の出土状況から、魚網錘として使われていた可能性が強いと述べているように、十和村の石錘も河川漁業のために利用していたと思われる。

7. 叩石

叩石は表面または表裏に敲打痕の集中箇所がみられるものが多い。特に2箇所集中箇所があるものが見られる。しかし、叩石の表面は狭く、とてもこの上にものを乗せて叩いたとは思われない。これは叩石を握りやすくするための加工であると思われる。

第3節 縄文土器について

調査等で今回確認されたのは、森遺跡・小野地区・小ノ田・カミヒラ遺跡・川口新階遺跡・今成遺跡・上広瀬遺跡・広瀬遺跡である。ほとんどが小片のみの出土であり、時期等を検討することができるは下記に挙げる遺跡の出土土器のみである。

(1) 森遺跡

森遺跡出土の縄文土器については細片がほとんどである。胎土・色調から後期の土器である可能性が考えられるものもあるが、ここではTP21から出土した繊維痕がみられる土器について記す。

繊維が混入された土器は、縄文時代早期後半～前期前半において全国的にみられる。高知県においても下記の遺跡で出土例等が報告されている。

飼古屋岩陰遺跡(土佐山田町)…出土した厚手無文土器は2種類に分類して報告されており、繊維痕がみられる方については他方に比べて胎土が荒く、器壁の厚さは約15mmであると記されている。

開キ丸遺跡(土佐山田町)……報告書に図示しなかったものを含むと無文厚手土器の出土量が多い。繊維を含むものも認められる。器壁の厚さは7～13mmである。

奥谷南遺跡(南国市)…………器壁の厚さ8～24mm前後の繊維土器が出土。縁部に刻目を有する口縁部が1点出土するが、器壁の厚さは最も薄い。口縁部が

短く外側に屈曲するものもある。

不動ヶ岩屋洞窟遺跡(佐川町)…厚手無文土器として報告された土器の中に、繊維の痕と思われる長さ約5~10mmの鋭い突みがみられることが記されている。口縁部は水平で内面に斜位浅い刻目が施され、短く外側に屈曲する。底部は尖底を呈する。器壁の厚さは約20mmである。

木屋ヶ内遺跡(大正町)……無文土器・条痕文土器の中で繊維痕が認められるものが、約3分の1である。厚さは10~15mmである。

十川駄場崎遺跡(十和村)……前述したようにこの遺跡は5次にわたって調査されている。第1次調査では山形押型文土器よりも上層で、繊維が混入された厚手無文土器が出土している。器壁の厚さは約13mmで、繊維を多量に含んでいたと記されており、駄場崎式と呼ばれている。第3次調査では厚手無文土器に繊維が混入したものに、薄手無文土器に繊維が混入したものが出土したことが報告されている。第4次調査では、断面に繊維痕がみられる無文土器が出土した。

江川中畠遺跡(西土佐村)……2点繊維痕がみられる土器が出土した。器壁の厚さは8~9mmである。1点は集石遺構からの出土である。これらの土器は羽島下層式・轟系土器が出土した土層より下位の土層から出土した。

堂ヶ市遺跡(西土佐村)……表探ではあるが、繊維が混入された無文の厚手土器が確認されている。器壁の厚さは約10mmである。

大宮・宮崎遺跡(西土佐村)……繊維が混入される土器は、無文土器にみられることが多いが、同遺跡では大形山形文を有する押型文土器に繊維痕がみられた。

小谷山遺跡(大月町)………(1995木村剛朗)では「大駄場遺跡」の名称で紹介されており、器壁の厚さ約11mmの繊維混入が認められる土器が出土したことが報告されている。押型文土器の無文部分であると記されている。

以上が県内で確認されている、繊維が混入された土器の例であるが、無文で小片のため、これらの土器が、同種類のものかどうかを判断することは難しい。大宮・宮崎遺跡では押型文土器に繊維が混入されている例が報告されているため、様々な形態を有する繊維混入土器が存在する可能性が考えられる。ただ、帝釈峠遺跡群等の例にみられるように、繊維混入土器は縄文時代早期末葉~前期前葉にかけてのものであると紹介されることが多い。また、十川駄場崎遺跡の第1次調査や江川中畠遺跡での出土層位はこの考え方方に矛盾しない。

轟遺跡出土の繊維混入土器については、アカホヤから出土しているため縄文時代前期前葉の所産である可能性が強いと思われる。遺物包含層は、肉眼では混入されている異物があまりみられず、

降灰後移動したように見えないが、顕微鏡による観察等を実施していないので、アカホヤが二次堆積であり、遺物も流れ込んだものである可能性を完全に否定できるものではない。

(2) 小ノ田・カミヒラ遺跡

小ノ田・カミヒラ遺跡では平城式土器が出土した。平城式は愛媛県平城貝塚を標式遺跡として設定した型式である。(1957鎌木義昌・西田栄)では1954(昭和29)年に発掘調査した平城貝塚出土の縄文土器について、工事に併行して実施した調査であるため出土層位を把握するのは困難であったため、底部や無文のものを除いたものを以下のように5類に形態分類して報告している。

第1類 磨消繩文を施すもの。

第2類 全面または一部に縄文地を有し、沈線文を施すもの。

第3類 磨消繩文を施されるが、器面はよく研磨されており、浅鉢であると思われるもの。

第4類 口唇部に沈線文を有するが縄文をみとめられないもの。

第5類 縄文のみで施文されているもの。

そして第1類を鐘崎式、第2類を津雲A式、第4類を彦崎K I式、第5類を彦崎K I式または彦崎K II式、に相当または類似するものとし、第3類は他の類とともに一型式を構成するものとした。

(1976犬飼徹夫)では第2類の土器は、第1類から転化したものであり、それぞれの他地域の土器との同一性または類似性を強調するべきではないという説が述べられ、第4類・第5類については、時間的な変化が少ないもの、普遍的なものと判断された。そして、平城式は独自の型式として、第1類を平城I式、第2類を平城II式と設定されるようになった。平城I式→平城II式という編年も設定された。

その後、平城式の編年についていわゆる逆転編年が唱えられるようになると、また、それにに対する反論も唱えられた。しかし、出土層位によってこの問題に決着をつけることができる資料がないために、型式論による論争が繰り返された。このような論争の中で(1996三輪晃三)では(1957鎌木義昌・西田栄)でいう第2類を分類して編年を検討する案を提示した。その後、(2002千葉豊)や(2003山崎真治)でも第2類を分類して編年を検討している。

さて、今回出土した土器によって明瞭な編年等を提示することはできないが、将来編年が解明されたときに対比できるよう、出土した土器の主な属性を上げておく。

○ 磨消繩文を有するもの。

(10)

○ 磨消繩文はみられず、沈線のみで施文する。口縁端部は面を成す。浅鉢の可能性がある。

(9)

○ 磨消繩文・縄文地はみられず、沈線のみで施文する。口縁端部は丸い。

(16・17・18)

○ 繩文地を有する。沈線が加わる場合もある。口縁端部は丸い。

(8・12・19)

第4節 十和村における遺跡の立地について

2001(平成13)～2003(平成15)年度に実施した十和村内での試掘確認調査では、14箇所の調査区において約600余りのTPを設定して行われた。は場整備事業に伴う試掘確認調査であったが、十和村における詳細遺跡分布調査を実施したといってよいほど充実したものとなった。

四万十川の支流域では、地形的にみて遺跡の存在する可能性がある場所に限ったため、河岸段丘の発達した長沢川流域では地吉井手ノセキ地区・戸川千良林堂・シンカイノ上地区を除いた場所で、人間生活の何らかの痕跡を確認することができた。地吉井手ノセキ地区・戸川千良林堂・シンカイノ上地区的場合は、前者は傾斜が急な河岸段丘であり、後者は低位のため洪水の影響を受け易かったことなどが考えられる。古城下モダバ・ニイヤ地区のように、現在確認できる遺物は少ないが、盛土から出土した遺物から、かつては埋蔵文化財包蔵地として保護の対象とするべき規模の遺跡があった可能性がある場所もみられる。このように、長沢川流域ではある程度条件のよい河岸段丘が活動の場として利用されていた可能性がある。特に土器や、様々な器種の石器が出土した、小ノ田・カミヒラ遺跡は集落跡である可能性が考えられる。

四万十川本流沿いの調査区では、やはり洪水の影響が強いためか、津賀地区・昭和藤次田・スカ谷地区では全く生活の痕跡は確認できなかった。また、今成遺跡や上広瀬遺跡のようにかなり遺跡範囲が広いと考えられていた遺跡も調査したが、遺跡範囲がかなり狭った範囲に限定されることがわかった。広瀬遺跡の場合はある程度広範囲から遺物は出土したが、それでも遺物が集中して出土する場所は限られていた。四万十川本流沿いの遺跡は、本流に注ぐいくつかの小河川によって地形的に分断されているが、その内の一箇所を生活の場として選んでいる。選択の基準についてはわからないが、広瀬遺跡の場合、地元の人の話によると遺物が集中して出土した場所は、周辺の中では一番日照時間がながい場所であるということであった。

参考文献

- 犬飼徹夫1976「愛媛県平城貝塚の再評価」『月刊考古学ジャーナルNo.129』ニュー・サイエンス社
- 犬飼徹夫1993「愛媛県平城貝塚出土Ⅱ式土器の再検討－西脇論文への反論－』『古代吉備第15集』古代吉備研究会
- 犬飼徹夫1996『平城貝塚－平城貝塚第V次発掘調査報告書－』御庄町教育委員会
- 犬飼徹夫1997『愛媛県南宇和郡平城貝塚出土土器の総括とその課題』『愛媛考古学14』愛媛考古学協会
- 犬飼徹夫2000『江川中畠遺跡』西土佐村教育委員会
- 岡本健児1959『土佐の原始と古代の文化』
- 岡本健児1963『高知県広瀬縄文遺跡の調査』『高知県文化財調査報告書第十三集』高知県教育委員会
- 岡本健児1968『高知県史 考古編』高知県
- 岡本健児1966『高知県の考古学』吉川弘文館
- 岡本健児・片岡鷹介1967『高知県不動ヶ岩屋洞穴』『日本の洞穴遺跡』平凡社
- 岡本健児1973『高知県史 考古資料編』高知県
- 岡本健児・廣田典夫1973『高知県広瀬遺跡発掘調査報告書』十和村教育委員会
- 岡本健児・前田和男・岡本桂典・井本葉子1977『長徳寺址発掘調査報告書』本山村教育委員会
- 岡本健児・廣田典夫・木村剛朗1978『三里遺跡』中山村教育委員会
- 岡本健児1984『北幡・窪川台地の古代・中世の考古学』『十和村史』十和村
- 岡本健児1984『十和の近世考古学』『十和村史』十和村
- 岡本健児1987『土佐神道考古学』高知県神社庁
- 甲藤次郎1977『表層地質図』『西南開発地域土地分類基本調査 田野々』高知県
- 鎌木義昌・西田栄1957『伊豫平城貝塚－縄文式土器を中心として－』『瀬戸内考古学創刊号』瀬戸内考古学会
- 木村剛朗1967『四国西南部における縄文期石錨の編年に関する一試案』『西四国創刊号』西四国郷土研究会
- 木村剛朗1968『愛媛県深泥縄文遺跡の紹介』『西四国第2号』西四国郷土研究会
- 木村剛朗1969～1970『九州姫島産黒曜石よりみたる西四国縄文期の交易圈(上)(中)(下)』『土佐史談 第124～126号』土佐史談会
- 木村剛朗1984『北幡の縄文時代』『十和村史』十和村
- 木村剛朗1983『土佐における後期縄文文化について』『高知の研究1 地質・考古篇』清文堂
- 木村剛朗1987『四万十川流域の縄文文化研究』幡多埋文研
- 木村剛朗1995『四国西南沿海部の先史文化』幡多埋文研
- 木村剛朗1999『大宮・宮崎遺跡I』西土佐村教育委員会
- 木村剛朗2001『車木遺跡』西土佐村教育委員会
- 高知県教育委員会1984『高知県中世城館跡分布調査報告書』
- 高知県教育委員会1988『昭和61・62年度高知県遺跡詳細分布調査概報－幡多ブロック－』
- 小林麻由2002『開キ丸遺跡』土佐山田町教育委員会

- 潮見浩1999「帝釈峠遺跡群」吉備人出版
- 曾我貴行1999「女川遺跡」越知町教育委員会
- 曾我貴行1999「女川遺跡Ⅱ」越知町教育委員会
- 近森泰子・山下英雄1991「十和村今成遺跡埋蔵文化財発掘調査概要報告書」財団法人高知県文化財団
埋蔵文化財センター
- 千葉豊2002「平城式について」『犬飼哲夫先生古稀記念論集 四国とその周辺の考古学』犬飼徹夫先生
古稀記念論文集刊行会
- 寺川嗣1997「十和村河内遺跡発掘調査概要報告書」十和村教育委員会
- 戸沢充測1994「縄文時代研究事典」東京堂出版
- 中尾篤志2002「中・四国地方における縄文時代の魚網鍤」「往還する考古学 近江貝塚研究会論集1」
近江貝塚研究会
- 中平大世・竹内清治・宗海弘・岡本邦雄・芝菊男1994「十和の文化財」十和村教育委員会
- 西和彦1977「地形分類図」「西南開発地域土地分類基本調査 田野々」高知県
- 日本の地質「四国地方」編集委員会1991「日本の地質8 四国地方」
- 畠中宏一2004「高知県における姫島産黒曜石の出土状況」「Stone Sources No 3」石器原産地研究会
- 廣田佳久1986~1987「十和村埋蔵文化財包蔵地調査カード」高知県教育委員会
- 廣田佳久1993「付福川口新階遺跡十和村十川小学校プール建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」
『高知県十和村奈路遺跡』十和村教育委員会
- 文化財保護委員会1966「全国遺跡地図(高知県) 史跡・名勝・天然記念物及び埋蔵文化財包蔵地所在
地地図」
- 文化庁1976「全国遺跡地図 高知県」
- 前田和男1983「幡多郡」「高知県の地名」平凡社
- 前田光雄1991「尻貝遺跡」大月町教育委員会
- 前田光雄1993「平城式についての覚え書き」「牟邪志 第6号」
- 前田光雄・吉成承三1993「松ノ木遺跡Ⅲ」本山村教育委員会
- 前田光雄1995「木屋ヶ内遺跡」大正町教育委員会
- 前田光雄1996「高知県十和村十川駄場崎遺跡 - 第5次発掘調査 - 」十和村教育委員会
- 前田光雄1996「三島遺跡確認調査報告書」 十和村教育委員会
- 前田光雄2000「松ノ木遺跡V」本山村教育委員会
- 前田光雄2001「ナシケ森遺跡」大月町教育委員会
- 松田直則1993「高知県十和村奈路遺跡」十和村教育委員会
- 松村信博2001「奥谷南遺跡Ⅲ」高知県埋蔵文化財センター
- 三輪晃三1996「九州阿高式系・縁帯文系土器群の研究」「奈良大学大学院研究年報 創刊号」奈良大学
大学院
- 森田尚宏・宅間一之1983「飼古屋岩除遺跡調査報告書」高知県教育委員会・日本道路公団
- 森田尚宏1991「高知県十和村十川駄場崎遺跡発掘調査報告書 - 第4次発掘調査概要報告 - 」高知県教

育委員会

森田尚宏1994「竜ヶ迫遺跡」「竜ヶ迫遺跡 ムクリ山遺跡」大月町教育委員会

山崎真治2003「縁帶文土器の編年的研究」「東京大学大学院人文社会系研究科・文学部考古学研究室
紀要第18号」東京大学大学院人文社会系研究科・文学部考古学研究室

山崎真治2003「高知県の縄文時代石器の実相」「第14回中四国縄文研究会 中四国地域における縄文
時代石器の実相」中四国縄文研究会

山本哲也1988「高知県幡多郡十和村十川駄場崎遺跡発掘調査報告書－国道381号線十川新橋橋梁架換
工事に伴う発掘調査－」十和村教育委員会

山本哲也・岡本桂典1989「高知県幡多郡十和村十川駄場崎遺跡発掘調査報告書」十和村教育委員会
横川末吉1984「古代・中世編」「十和村史」十和村

蕨川正重・岡本邦雄1982「門脇家御山控帳・中世古城址調査図」十和村教育委員会

写真図版

写真1



今成遺跡 TR5 出土石鎌



今成遺跡 TR5 出土剥片



河内遺跡表採スクレイバー



川口新階遺跡表土掘削



川口新階遺跡作業風景



川口新階遺跡作業風景



川口新階遺跡 I 区完掘状況



川口新階遺跡 I・II 区完掘状況

写真2



古城下モダバ・ニイヤ地区作業風景



小ノ田・カミヒラ遺跡 TP3 セクション



小ノ田・カミヒラ遺跡 TP7 石斧出土状況



今成遺跡 TP70 石斧出土状況



上広瀬遺跡全景



上広瀬遺跡 TP108 セクション



広瀬遺跡 TP81 セクション



広瀬遺跡作業風景

写真3

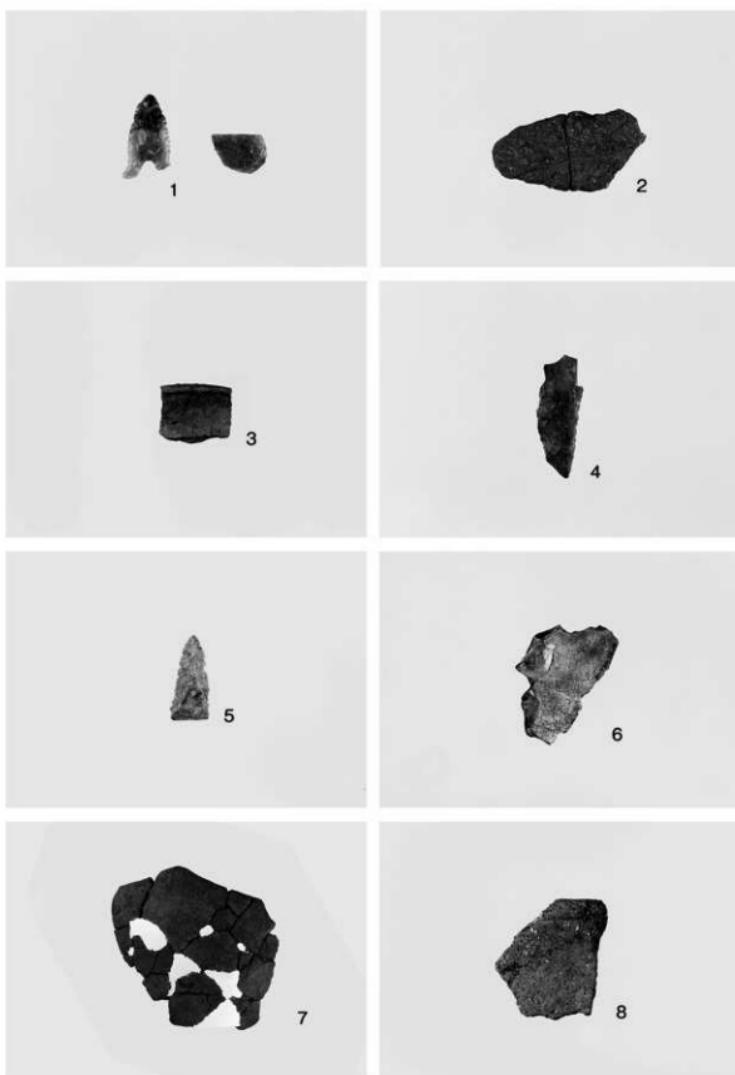


写真4

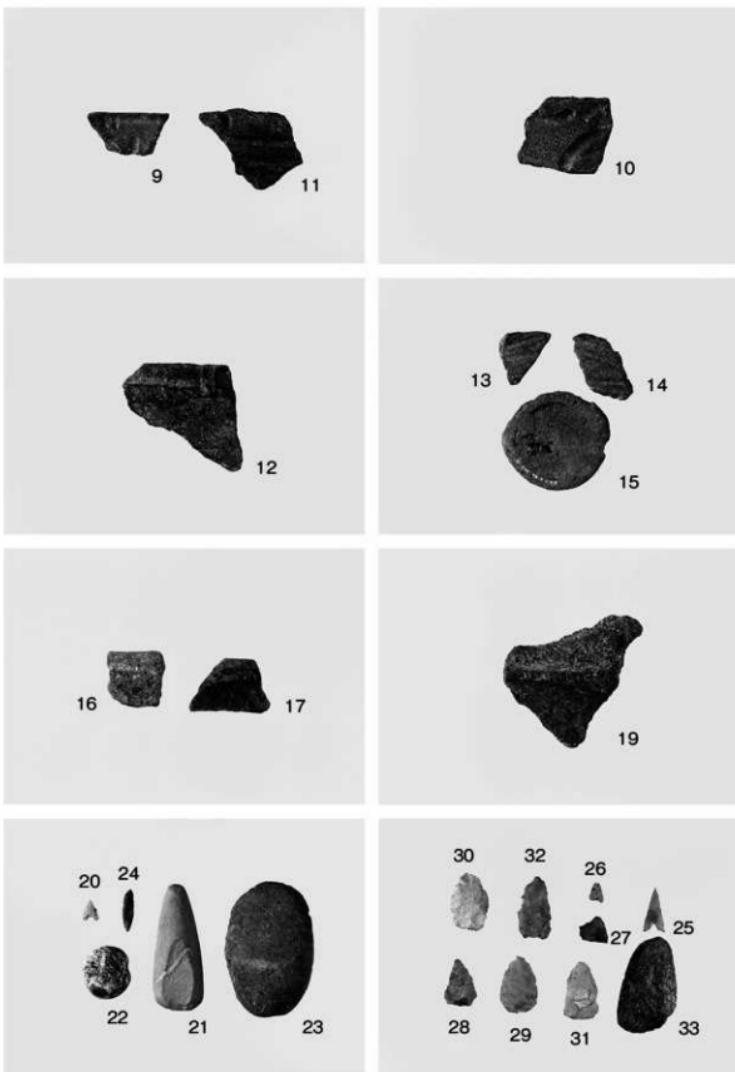


写真5

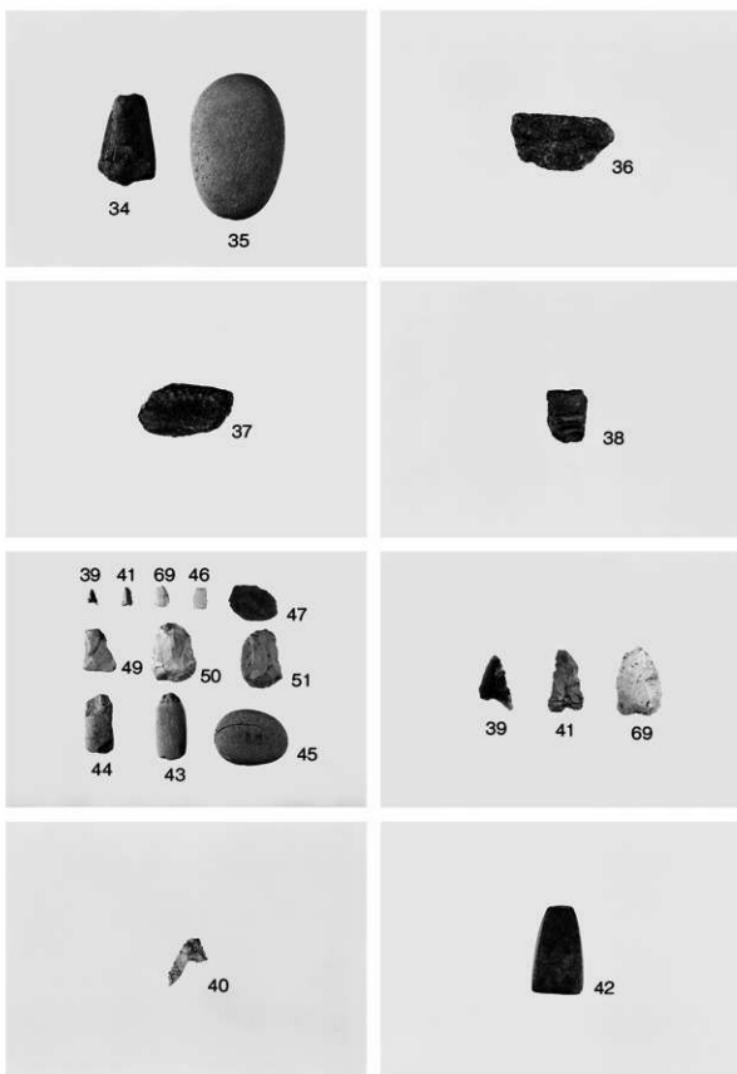
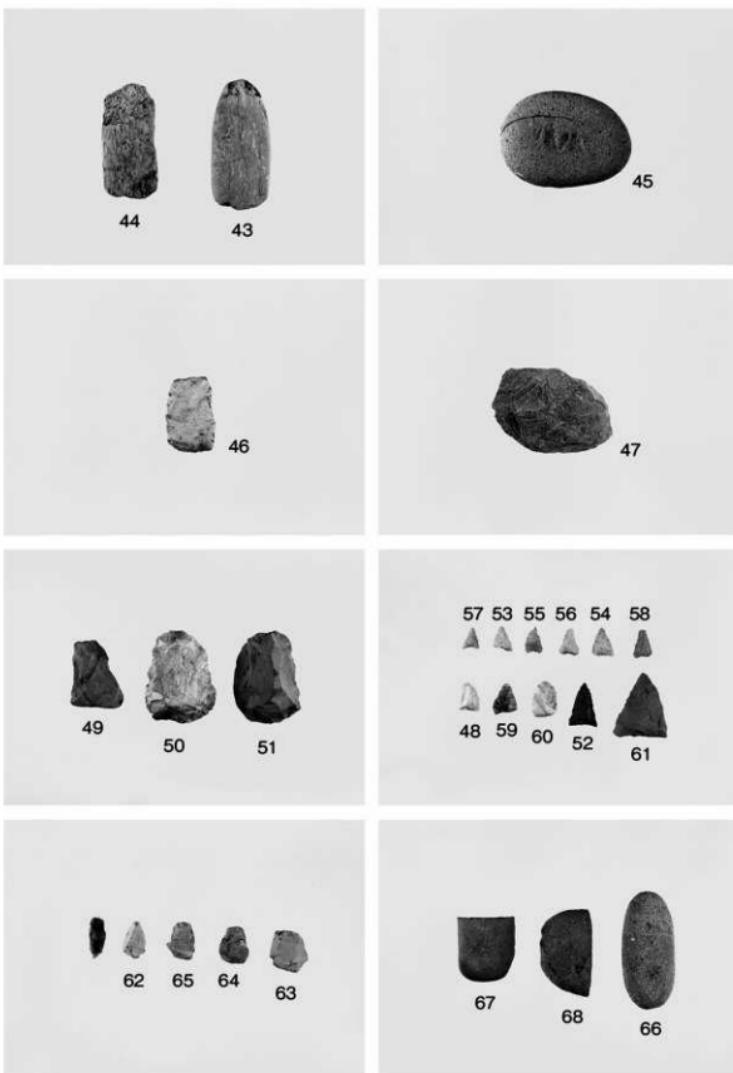


写真6



報告書抄録

ふりがな	かわぐちしんがいいせき、とどろいせき、なかめごしいせき、おのだかみひらいせき、いまなりいせき、かみひろせいせき、ひろせいせき							
書名	川口新階遺跡、轟遺跡、中亀遺跡、小ノ田・カミヒラ遺跡、今成遺跡、上広瀬遺跡、広瀬遺跡							
副書名	十和中部地区中山間地域総合整備事業等に伴う発掘調査報告書							
シリーズ名	十和村埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第6集							
編著者名	酒井寿哉・畠中宏一							
編集機関	十和村教育委員会							
所在地	〒786-0504 高知県幡多郡十和村川口 151-1 Tel.0880-28-5115							
発行年月日	西暦 2004年3月26日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 通路番号	北緯 度分秒	東経 度分秒	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
かわぐちしんがいいせき 川口新階遺跡	こうちんはたぐんとおわそんかわぐちあさまのいし 高知県幡多郡十和村川口字馬ノ石	39425 510018	33度 13分 52秒	132度 51分 3秒	2001.9.4～ 2001.9.21. 2001.11.12～ 2001.11.15. 2002.10.16	173	は場整備	
とどろいせき 轟遺跡	こうちんはたぐんとおわそんとうこうあうこううだ 高知県幡多郡十和村轟和甲字神田	39425 510023	33度 12分 46秒	132度 54分 31秒	2001.10.23～ 2001.10.26	78	は場整備	
なかめごしいせき 中亀遺跡	こうちんはたぐんとおわそんちよしまさなめこじ 高知県幡多郡十和村地吉字中亀越	39425 510035	33度 14分 43秒	132度 49分 15秒	2001.11.6～ 2001.11.8	49	は場整備	
おのだ・かみひらいせき 小ノ田・カミヒラ遺跡	こうちんはたぐんとおわそんかわあざむつとい 高知県幡多郡十和村川口字小ノ田	39425 510036	33度 13分 56秒	132度 50分 41秒	2001.11.16～ 2001.11.21	112	は場整備	
いまなりいせき 今成遺跡	こうちんはたぐんとおわそんかわであぎもつつい 高知県幡多郡十和村川口字シモツルイ	39425 510032	33度 13分 20秒	132度 50分 19秒	2001.11.26～ 2001.12.14	152	は場整備	
かみひろせいせき 上広瀬遺跡	こうちんはたぐんとおわそんひろせいせき 高知県幡多郡十和村廣瀬字宮ノ堀	39425 510034	33度 12分 39秒	132度 51分 19秒	2002.11.12～ 2002.11.22. 2003.10.6	248	は場整備	
ひろせいせき 広瀬遺跡	こうちんはたぐんとおわそんひろせいせき 高知県幡多郡十和村廣瀬字谷屋敷	39425 510019	33度 12分 10秒	132度 50分 44秒	2002.11.25～ 2002.12.11. 2003.10.7～ 2003.10.8	172	は場整備	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
川口新階遺跡	石器生産遺跡	縄文	石器製作遺構	尖頭器・石鏽・叩石・石皿・石核・剥片	多量の石核・剥片が出土。珪質岩の原産地遺跡。			
轟遺跡	散布地	縄文	土坑	縄文土器・石器・剥片	縄文土器・姫島産黒曜石の剥片が出土。			
中亀遺跡	散布地	縄文	-	剥片(珪質岩)	石器製作遺跡の可能性がある。			
小ノ田・カミヒラ遺跡	散布地	縄文	ビット	縄文土器(平城式)・石鏽・石斧・石鍬・剥片	縄文後期の集落跡の可能性がある。			
今成遺跡	散布地	縄文	-	縄文土器・石斧・剥片	蛇紋岩の磨製石斧が出土。			
上広瀬遺跡	散布地	縄文	-	縄文土器・石鏽・剥片	姫島産黒曜石の石鏽が出土。			
広瀬遺跡	散布地	縄文	-	縄文土器・尖頭器・石鏽・石鍬・叩石・凹石・楔形石器・石核・剥片	姫島産黒曜石の石鏽・剥片が出土。多量の石鏽が出土。			

十和村埋蔵文化財発掘調査報告書

第1集 高知県広瀬遺跡発掘調査報告書

第2集 十川駄場崎遺跡発掘調査報告書 -国道381号線十川新橋橋梁架換工事に伴う発掘調査-

第3集 十川駄場崎遺跡発掘調査報告書

第4集 奈路遺跡

第5集 十川駄場崎遺跡 -第5次発掘調査-

第6集 川口新階遺跡,轟遺跡,中龜越遺跡,小ノ田・カミヒラ遺跡,今成遺跡,上広瀬遺跡,広瀬遺跡

十和村埋蔵文化財発掘調査報告書 第6集

川口新階遺跡,轟遺跡,中龜越遺跡,

小ノ田・カミヒラ遺跡,

今成遺跡,上広瀬遺跡,広瀬遺跡

十和中部地区中山間地域総合整備事業等に伴う発掘調査報告書

2004年3月

発行 十和村教育委員会

高知県幡多郡十和村十川151-1

kyou@vill.towa.lg.jp

電話 (0880) 28-5115

印刷 (有)西村謹写堂